

---

# 遊戯王 真相の果て

蒼空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王 真相の果て

### 【Nコード】

N8786N

### 【作者名】

蒼空

### 【あらすじ】

5D'Sから約100年後プロ決闘者【須崎瞬矢】は3年前の復讐のためある大会に出場する。そこで待ち受ける決闘者や3年前の真相。それらを乗り越えて瞬矢が選ぶ道とは!?

## 登場人物紹介（前書き）

初めて投稿します。

文才はありませんが温かく見守って下さい。  
( ^ | ^ ; )

## 登場人物紹介

この小説は5D'Sから約100年後として執筆します。

### 登場人物一覧

須崎瞬矢【すぎきしゅんや】19歳

表と裏のサイバー流デッキ使用。

サイバー流道場で修業中襲撃された時の生き残り。

後述の藤堂ミツバと哀川総司とはとても仲がよかった。

現在プロリーグで連勝中。

藤堂ミツバ・哀川総司

3年前死亡

享年18歳。主人公とともにサイバー流を学んでいたが修業中襲撃され、亡くなった。

二人とも主人公とはプロの舞台で決闘するのが夢だった。

海馬彼方【かいばかなた】25歳

プロリーグで主人公と何回か決闘し勝ちこしている決闘者。その天性の決闘センスから彼を一流の決闘者と認めている。海馬瀬人の子孫で先祖の自己中ぶりを受け継いでいる。

また若くして海馬コーポレーション総帥である

青眼の白龍を愛用しそれらをモチーフにした決闘盤を使用

無月陰達【むつきかげたつ】16歳

3年前サイバー流道場を襲った張本人。デッキはシンクロ召喚に特

化したデッキを使用しシグナーの龍などを意のままに操る。  
何故持っているかは不明。

実力は主人公、海馬の数段上をいく。  
その言動や行動には謎が多い。  
市販されていない黒と白の色が入った決闘盤を使用。

須崎俊矢【すぎきとしや】享年42歳

主人公の父親で自分と他人に厳しく道場の門下生に慕われていた。  
3年前の事件で死亡。サイバー流道場講師の仕事をしていたが息子  
にも本当に強い決闘者になってほしいと考えていた。

神山 ルイ【かみやま るい】20歳

三枚の邪神のカードを扱う決闘者。神の召喚に特化したデッキを使  
用し神に依存している。IDGP本選に出場する。

氷川 涼【ひかわ りょう】26歳

デュエルアカデミア童実野校出身。プロ入り後もかなりの強さを見  
せるが今までIDGP本選には一度も出場していなかった。  
IDGP本選には敗者復活枠で出場する。

雪代 憂司【ゆきしろゆうじ】14歳

陰達に操られている少年。  
哀川総司の弟で姓が違うのは親戚の家に引き取られたから。  
3年前の事件以後、宝玉獣のレプリカのデッキを瞬矢から譲られた。  
IDGP本選に出場する。

四つ葉 ?歳

陰達が操っていた記憶喪失の女性。

3年前に亡くなったミツバに瓜二つで瞬矢も見間違えたほど。そこから瞬矢に名付けられたがその名を気に入ってる様子。  
瞬矢との決闘後陰達の洗脳が解け彼との共同生活が始まった。

??? ?歳

素性、目的等が一切分からない謎の男。普段はフードを被っている。瞬矢には友好的な態度で接している。  
その実力は未知数。

遊城 翔夜【ゆうきしょうや】 18歳

デュエル・アカデミア本校に在籍している高校三年生。オベリスク・ブルー所属で頭も良く、実技も未だ負け無し。伝説の決闘者、遊城十代の子孫で性格も明るい。  
IDGPにはアカデミア生徒枠で出場する。

河上 駆将【かわかみかけまさ】 15歳

陰達に操られている少年。好戦的な面もあり非常に危険な人物。IDGPでは翔夜と決闘するがそのデッキは……

それでは次話より遊戯王 真相の果て をお楽しみ下さい (^ー^)

v

## 予選決勝！

P M 7 時 3 0 分

海馬ドーム

ここでインターナショナルデュエリスト大会、通称【IDGP】に出場するための予選大会の決勝が行われていた。

「これよりIDGP予選大会決勝を始める。両者はそれぞれスタンバイせよ。」

審判の宣言により両者所定の位置につきデッキをシャッフルした。

戦う決闘者は表と裏のサイバー流デッキを自在に操るプロ二年目の須崎瞬矢【すぎき しゅんや】。

対するはプロ八年目でようやくIDGP出場まで後一步のところまで来た氷川 涼【ひかわ りょう】である。

「長かった予選もついに決勝、さくしてIDGP本選行きの切符を手にするのは昨年に引き続き予選の決勝に進出したルーキー須崎瞬矢か！！」

それともプロ8年目の貫禄を見せる氷川涼か！！

熱戦の火ぶたが切って落とされる。勝つのは、どっちだあ！！」

「リーグでは俺が負け越していたな。プロの先輩としてその借りは今ここで返し、俺が本選に出場する！！」

「残念だが決勝に行くのは俺だ。そして俺は、俺の使命を果たす！！」



「決闘開始！」

「決闘！！！」

審判の宣言と共に決勝進出を賭け二人のプロランカーが決闘を開始した。

「俺の先攻、ドロー！！モンスターセット、カードを二枚伏せターンエンド」

瞬矢LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「俺のターン！黒竜の雛を召喚、そしてモンスター効果発動。このカードを墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚する！！」

そう言う場に現れた卵を身に纏っている子供の竜が、現在でも激レアカードである真紅眼の黒竜（ATK2400）に成長した。

「出たあゝ、氷川 涼選手の主力モンスター、真紅眼の黒竜がいきなり特殊召喚されたぞー！！」

「更にスタンピング・クラッシュとサイクロンを発動！その二枚の伏せカードを破壊する！」

瞬矢のリバースカード、王宮のお触れと次元幽閉は破壊された。

瞬矢LP8000 7500

「真紅眼の黒竜でセットモンスターに攻撃！黒炎弾！！」

何の抵抗も無しにセットモンスター、サイバー・ダーク・ホーン（DEF800）は墓地に送られていった。

「そのデッキか。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

氷川 LP8000

場：真紅眼の黒竜

伏せカード一枚

「俺のターン！チューナーモンスター、ブラックボンバーを召喚！」

瞬矢の場に黒い球体のモンスターが現れ、少しずつ瞬矢の逆転への準備が整っていくのであった

## 裏サイバー流の実力（前書き）

第3話目です。

誤字脱字等ございましたら、連絡をお願いします

（^。^；）

## 裏サイバー流の実力

「ブラック・ボンバーの効果発動。召喚時、墓地のサイバー・ダーク・ホーンを効果を無効にし、守備表示で特殊召喚する。

そしてレベル4、サイバー・ダーク・ホーンにレベル3のブラック・ボンバーをチューニング！！

悲しみを背負いし漆黒の竜よ、今こそその雅なる花を咲かせよ！シンクロ召喚！！舞い散らせ、ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

瞬矢の場に黒薔薇の翼を持った鮮やかな竜、ブラック・ローズ・ドラゴンがフィールドに舞い降りた。

「出たあゝ！！真紅眼の黒竜に劣らない超激レアカード、ブラック・ローズ・ドラゴン！しかもその効果によりフィールド上の全てのカードは破壊されるのだゝ！！」

実況がそう言うのとブラック・ローズ・ドラゴンは自らを含む真紅眼の黒竜等の全てのカードを破壊し、墓地に送った。

「くっ、いきなりか…」

「終わりだ。永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョン発動、対象はFGD」

瞬矢はデッキから【ホルスの黒炎竜LV8、LV6×2体、仮面竜×2体】を墓地に送った。

「手札より魔法カード、ハリケーン発動」

瞬矢は自らのフィールドの未来融合・フューチャー・フュージョンを回収した。

「俺は再度未来融合・フューチャーフュージョンを発動。対象は鎧黒竜サイバー・ダークドラゴン！！デッキから素材となるサイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールを墓地に送る」

「（この流れは……）  
まさか！！」

「魔法カード、サイバー・ダークインパクト！発動。現れよ、裏サイバー流奥義、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン！！」

瞬矢の声と共に体中からこの世の負のオーラを放つ、表サイバー流奥義のサイバー・エンド・ドラゴンと対をなすモンスター、鎧黒竜・サイバー・ダークドラゴンが降臨した。

「鎧黒竜の融合召喚時、墓地のドラゴン族モンスター一体を装備し、その攻撃力を得る。俺は墓地のホルスの黒炎竜LV8を装備させ、攻撃力を3000ポイントアップさせる。  
更に鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンは墓地のモンスターの数×100ポイント攻撃力をアップする。墓地には7体のモンスター、よって攻撃力は700ポイントアップする！」

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK1000 4700

「そして、これでとどめだ。リミッター解除発動！！鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力を二倍にする！！」

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK4700 9400

サイバーダークドラゴンは限界を突破し、体中から出ていた負のオーラが倍増した。

「鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンでダイレクトアタック！フル・ダークネス・バースト！！」

サイバーダークは口から強大な負のオーラを実体化させ、氷川に目掛けて放出した。

「そんな・・・ぐああああああああああああああ！！！！」

氷川LP8000 0

「決闘終了。勝者、須崎瞬矢！よってIDGP本選出場者は須崎瞬矢とする！！」

「決まったあゝ！！鮮やかなプレイングで勝利し、IDGP本選出場決定したのはプロ二年目の須崎瞬矢選手だあゝ！！」

会場からは惜しめない拍手が送られ、瞬矢は昨年出来なかったIDGP本選出場決定の達成感を味わいながら決闘場を後にするのだった・・・

## 裏サイバー流の実力（後書き）

感想のほう、よろしくお願ひしますf^| ^ ;

## 墓参り（前書き）

### 第4話目です

主人公の過去が明かれます。



## 墓参り

- I D G P 本選一週間前

瞬矢はこの日ネオ童実野シティの郊外にある墓地に赴いていた。

「やっとだよ、父さん、総兄ちゃん、ミツ姉ちゃん。奴がI D G P本選に出場する。」

闇のゲームで俺が勝利して仇は討つから。その後はまたみんなと一緒に暮らすから、その時は・・・よろしく頼むね・・・」

そう言いながら瞬矢は涙を流していた。

三年前：サイバー流道場

「うつ・・・ここは・・・道場の地下？」

気絶していた瞬矢は辺りを見回すと三人の人影が見えた。

否、正確には一人と二人の所々焼けただれた生きているのかどうかわからない人間であった。

しかも、その人物は自分もよく知っている人だった。

「ミツ姉？総兄ちゃん？」

瞬矢のその問いには答えずただ寝転がっているだけだった。

「ミツ姉!？」

瞬矢はミツバの所へ行き肩を揺すった。

「うつ・・・瞬ちゃん?、・・・・そう、よかつ・・・・」

「ミツ姉エエー!!!」

「煩いなあ、死んだからってそう取り乱すなよ・・・」

その場にいた長い白髪の少年は何事もないような、瞬矢を少し軽蔑した目つきで言った。

これが須崎瞬矢と無月陰達との出会いであった。

そして二人の対称的な顔をした少年が向かい合った。

「無月陰達【むつきかげたつ】、それが僕の名だよ」

そう言つて陰達と名乗った少年はクスリと笑った。しかしその笑みは極めて危険なものだと本能的に瞬矢は感じ取った。

「何で?…何でこんな時にそんな表情ができたよ!？」

瞬矢は涙ながらに陰達に聞いた。

「この世に不必要な物は切り捨てる、それが昔から人間がしてきた繁栄の理由だからさ、もちろんそれが大勢の生命でさえも」

瞬矢は彼の表情と発言に対して体中に悪寒がして、生きた心地がし

なかった。と同時に瞬矢の頭に一つの憶測が生まれた。

「おまえが・・・これを・・・？」

「フフフ・・・だったらどうする？」

そう言った瞬間、瞬矢は地面を蹴って、陰達に殴り掛かろうとした。

「お前があ、お前があああ」

「フフツ・・・舐めるなよ餓鬼が！！」

突然陰達の口調が変化し、邪悪な声で陰達は身につけていたオリジナルの決闘盤にカードをセットした。

「レッド・デーモンズ・ドラゴン召喚！！」

そう言うと陰達の前に今や伝説でしかないレッド・デーモンズ・ドラゴンが現れ、辺り一面に炎を吐いた。

（これは・・・本物のモンスター？）

瞬矢はそう思いながら爆風によって飛ばされ、壁に叩きつけられた。意識が朦朧とする中で瞬矢の前にカードが落とされた。

「僕のお気に入りのカードだけど君に貸すよ。上手く使えよ、それから・・・今度会う時はもっと強くなってこの世に必要な人間になれよ・・・」

陰達はそう言うとその場から去って行き、瞬矢はそこで意識を手放

した。

一週間後、瞬矢は病院のベッドの上で目を覚ました。後から聞いたが救急隊が来た時、瞬矢の前にあった表と裏のサイバー流の奥義、サイバー・エンドとサイバー・ダークが瞬矢を守るように置いてあったのだという。

(この二枚、ミツ姉と総兄の使っていたカード。そして………)

瞬矢は陰達から渡されたカード、ブラック・ローズ・ドラゴンを見ていた。

(……父さん、ミツ姉ちゃん、総兄ちゃん、奴は、陰達はいつか必ず倒す、だから……それまでは少し待っててね………)

瞬矢の心に陰達への復讐心と覚悟が生まれた瞬間であった。

## 墓参り（後書き）

こんな文才のない作者ですが感想をいただけたらうれしいです）  
| - # )

**本選前の決闘者達（前書き）**

第5話目です。

最後に瞬矢がとある人物と再会します。

（ ^ | ^ ; ）

## 本選前の決闘者達

墓参り後、瞬矢は青と白と黄色を基調とした自分専用のDホイールに乗って帰っていた。

その時何かに気付いたのか、近くに駐車していた高級車に近付くと中から黒のスーツを着た背の高い青年が出て来た。

「お久しぶりです、海馬さん」

「ふうん、堅苦しい挨拶は無しだ。探したぞ、須崎瞬矢」

中から出て来たのは若くして海馬コーポレーション総帥を務め、同時にプロ決闘者でもあり、あの伝説の決闘者海馬瀬人の子孫、海馬彼方【かいばかなた】だった。

「そうですね。ところで、俺が頼んでいたことは？」

「ああ、その報告のために今日は来た。十中八九お前が言っていた無月陰達に間違いない」

瞬矢は本選のアマチュア代表選手の素性を調べ、自分の仇であるか確認してくれと頼んでいたのだった。

「そうですか、本当にありがとうございます」

「礼には及ばん、全て部下にやらせたことだ。だが須崎、もう一人危険な輩がいる。素性も全く分からん得体の知れない奴がな」

「そうですねか・・・海馬さん、本選には闇のゲームも行われるでしょうからパニックにならないよう実況はなくしてください」

「フン、そんな事は百も承知だ」

そう言っつて海馬は高級車に戻って行った。

「じゃあな須崎。俺はこれからまた仕事があるのでな、先に失礼する」

それだけ言っつと海馬はそのまま風のごとく去って行った。

（相変わらず忙しい人だ。まあ、仕方ないかな）

そう思い瞬矢はまた自分の住んでるマンションへ向けてDホイールを走らせた。

その夜・・・

「・・・じゃあよろしく頼むよ」

とあるビルの屋上で月明かりを浴びながら二人の人影が対峙し話していた。

「御意。必ずや須崎から“本気”を出させます」

「瞬矢と・・・“本気”の瞬矢との決闘、それしか僕に残されては



いないからね。正直お前が瞬矢に勝てるのなら勝つていいよ。全力を出した瞬矢以外とは決闘しても意味を成さないんだ」

「分かっております。俺に負けるようではあなたには到底敵わないでしょう」

「フフツ、それじゃ行こうか………憂司」

そうやって憂司と呼ばれた少年と陰達はその場から移動していくのだった……

#### IDGP本選五日前

「真紅眼の闇竜でスナイプスターカーに攻撃、ダークネス・ギガフレイム!!」

真紅眼の進化型、真紅眼の闇竜（ATK4800）が銃を構えた小型の悪魔、スナイプスターカー（ATK1500）を一瞬の内に灰にした。

「ぐああああああああああ!!!!」

相手LP2700 LP0

「決まったああ!! 氷川涼選手、須崎瞬矢選手に敗北したものの、敗者復活枠で本選出場決定だ!!」

本選五日前の今日、海馬ドームにて敗者復活戦が行われ、瞬矢に敗

退した氷川が見事本選への出場を勝ち取った。

（須崎瞬矢、奴から本選で勝利を奪い取る事こそ今の俺の全てだ……）

丁度その頃：ネオ童実野シティ某所

瞬矢は近くのスーパ―からの帰りでDホイールに乗っていた。その時、誰かがいきなり道の真ん中に姿を現した。

ブレーキを踏もうとした瞬矢だったが次の瞬間今度はアクセルを全開にした。

……突然出現した誰か、それは他でもない。サイバー流を滅ぼした自分達の仇、無月陰達であったからだった……

## 本選前の決闘者達（後書き）

次回、陰達と3年振りに再会した瞬矢は・・・  
感想お待ちしています。（\*^o^\*）

表サイバー流VS至高の天使族（前書き）

第6話目です。

やっと決闘シーンが書けました〇（＾－＾）〇  
それでは駄作ですがお楽しみ下さい。

## 表サイバー流VS至高の天使族

「全く、Dホイールに乗っただけで3年前と変わりないじゃないか・・・」

陰達は3年前と同様に襲い掛かってくる瞬矢に落胆の色を見せた。そして陰達はデッキからカードを引きそのまま決闘盤にセットした。

「スターダスト・ドラゴン召喚！」

陰達の前に白銀の翼を纏った嘗てシグナーの一人、不動遊星が使用していた龍、スターダストドラゴンが現れた。

その瞬間瞬矢は危険を感じ、ブレーキを踏んでスターダストの所までは行かなかった。

「少しは変わったということかい？ まあそれでも無知に違いないけど」

「貴様・・・」

「久しぶりだね瞬矢。あれから強くなったかい？」

瞬矢は陰達の言葉など聞かずに只々陰達を睨んでいるだけであった。

「いい目だ、やっとそんな表情が出来るようになったか。でも決闘の腕はどうかな？」

そう言って陰達はフィールド魔法『闇』を発動し、周りを闇で覆っ

た。

「まだ本選前なのに決闘する気か？」

「そう焦るなよ、君の相手はこいつだよ」

そう言い陰達は闇の中へ一人の女性を手招きした。

髪を肩の辺りまで伸ばし、ボロボロの服を着ていて年齢は瞬矢と同じ位に見える。

だがその目は虚ろで陰達が操っていることは明白だった。

「!.....」

しかしそれよりも瞬矢は目の前の女性が自分が姉とよんで惚れていた人にそっくりだったことで頭が一杯だった。

「・・・ミツ姉?・・・そんなはずはないか・・・」

瞬矢が我に帰ると陰達はこの闇から抜け出そうとしていた。

「ここから出るにはそいつに勝つしかないよ。負けたら闇のゲームの規定で“君の”魂は取られるからね・・・それじゃあ君が本選に出るのを楽しみにしてるよ」

そう言い残し陰達は何処へと消えていった。

「（本選前の試練のつもりか？）  
おいお前、さっさと始めるぞ!」

相手の女性は何も言わずただ決闘盤を構えた。

「決闘!!!」

「私の先攻……」

女性はそれだけ言うとモンスターをセットし、カードを一枚セットしターンを終了した。

女性LP8000

場：裏守備モンスター、伏せカード一枚

「俺のターン。相手の場にのみモンスターが存在するのでサイバー・ドラゴンを手札から特殊召喚!!!」

瞬矢の場に表サイバー流の要とも言えるモンスター、サイバー・ドラゴンが召喚された。

サイバードラゴンが特殊召喚された瞬間、女性が「…表か…」と言ったのを瞬矢は聞き逃さなかった。

「(こいつも奴の被害者か。)

ならば救ってやる。融合呪印生物 光 (ATK1000) を召喚」

瞬矢の場に不気味な光を放つ、様々な物体の集合体が現れた。

「こいつの効果により、このカードとサイバー・ドラゴンをリリース、サイバー・ツイン・ドラゴンを特殊召喚する!!!」

瞬矢の場に本来なら二体のサイバー・ドラゴンが融合したモンスター

ー、サイバー・ツイン・ドラゴン（ATK2800）が現れた。

「サイバーツインで攻撃、エヴォリユーション・ツインバースト！  
！」

サイバーツインが片方の口から青白い強力なエネルギー波を出し、裏守備モンスター、シャインエンジェル（DEF800）は破壊され、また新たなシャインエンジェルが攻撃表示でデッキから呼び出された。

「リクルーターか。サイバー・ツインでもう一度攻撃！！」

もう一度サイバーツインはシャインエンジェル（ATK1400）に同様の攻撃を加えた。

女性LP8000 6600

シャインエンジェルの効果で女性の場にチアガールのような恰好をしたモンスター、勝利の導き手フレイヤ（ATK100）が現れ瞬矢はこれからの女性の戦術を予想した。

「（おそらくは次のターン来る）  
カードを二枚伏せターンエンド」

瞬矢LP8000

場：サイバー・ツイン・ドラゴン（ATK2800）  
伏せカード二枚

「私のターン、ドロー。永続魔法、コート・オブ・ジャスティス発動。フレイヤがいるため手札のThe splendid VEN



USを特殊召喚する!!」

聖なる光を放ちながらプラネットシリーズの一体、The splendid VENUS(ATK2800)が光臨した。

「The splendid VENUSの効果により天使以外は攻守が500ポイントダウン。そしてフレイヤの効果で天使は攻守が400ポイントアップ」

The splendid VENUS ATK2800 3200

勝利の導き手フレイヤ ATK100 500

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800 2300

二体の天使はそれぞれ強化され、逆にサイバー・ツインは弱体化した。

(プラネットシリーズ、奴はこんなものまで持ってんのかよ…)

「VENUSでサイバーツインに攻撃、ホーリー・フェザー・シャワー!!」

サイバー・ツインドラゴンはThe splendid VENUSの攻撃を受けスクラップ状にされた。

瞬矢LP8000 7100

「フレイヤで直接攻撃!!」

フレイヤの直接攻撃により瞬矢のLPはさらに削られた。

瞬矢LP7100 6600

ライフは丁度同じになったが場はどうみても女性の方が有利であった。

「これでターン終了」

女性LP6600

場：The splendid VENUS (ATK3200)

勝利の導き手フレイヤ(ATK500)

コート・オブ・ジャスティス

伏せカード一枚

圧倒的に不利な状況の中、瞬矢にターンが回るのであった……

表サイバー流VS至高の天使族（後書き）

次回、瞬矢と女性の決闘の決着は！？

感想、お待ちしております。（<|>）

**決着！表サイバー流奥義VS世界！（前書き）**

いよいよ表サイバー流奥義が登場します。

書いてて分かったこと・・・アニメの決闘構成考えてる  
人すぎ過ぎです（-|-#）

それではお楽しみ下さい。

## 決着！表サイバー流奥義VS世界！

「俺のターン！プロト・サイバー・ドラゴンを召喚！」

瞬矢の場にサイバー・ドラゴンの試作型の攻守がサイバー・ドラゴンより1000ポイント低いモンスター、プロト・サイバー・ドラゴンが現れた。

「更に魔法カード、パワー・ボンドを発動。場のプロト・サイバーと手札のサイバー・ドラゴンを融合、もう一度フィールドに現れよ、サイバー・ツイン・ドラゴン！！」

瞬矢の場に、再度サイバー・ツイン・ドラゴンが現れたが攻撃力はパワーボンドにより倍、5600ポイントになっていた。

「（いけるか？）

サイバー・ツイン・ドラゴンで攻撃、エヴォリューション・ツイン・バースト！！」

その瞬間、The splendid VENUSの翼が新しく生え変わって迎撃し、サイバー・ツインを破壊した。

「何！？」

突然のことに瞬矢は理解できなかった。

「手札のオネストの効果。このカードを捨てることでThe splendid VENUSの攻撃力はサイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力を加え、8800になった」

見ると女性が墓地へオネストのカードを送っていた。

瞬矢LP6600 3400

「（急ぎすぎたか。）  
カードを一枚伏せターンエンド」

瞬矢LP3400 600

パワー・ボンドのデメリットにより瞬矢のライフは更に2800ポイント削られた。

瞬矢LP600

場：伏せカード二枚

またしても瞬矢が不利な中女性にターンが回って行くのだった。

「私のターン、ドロ！。コート・オブ・ジャスティスによりアルカナフォース???? - THE WORLDを特殊召喚!!」

女性の場に巨大なアルカナフォースのラストナンバー、THE WORLD(ATK3100)が特殊召喚された。そして女性はポケットからコインを取り出しコイントスを行った。

チイイイン

結果コインは表になった。

「THE WORLDは表の効果を持つ。」

(また厄介なモンスターを……やはりこいつ強い)

「The splendid VENUSでとどめ、ホーリー・フ  
エ「まだだ！ 畏発動、和睦の使者！！」……小賢しい。だが悪  
あがきた。

エンドフェイズ時にTHE WORLDの効果、The splen  
did VENUSとフレイヤの二体を墓地に送り、相手ターンを  
スキップする」

「馬鹿な！？」

「私のターン！ とどめ。THE WORLDでダイレクトアタック！  
！」

THE WORLDは瞬矢に向け攻撃をした、その時何かが瞬矢の  
前に現れ攻撃を中断させた。

「……バトルフェーダーか。小賢しい！ ターンエンド」

女性LP6600

場：アルカナフォー스??? THE WORLD (ATK3100)

コート・オブ・ジャステイス

伏せカード一枚

「俺のターン！ 畏発動。リビングデッドの呼び声、墓地からプロト・  
サイバーを特殊召喚。」

更に速攻魔法地獄の暴走召喚発動。デッキ、手札、墓地からサイバ  
ー・ドラゴンを可能な限り特殊召喚する！！」

瞬矢はこのターンで決着をつけるよう、表サイバー流皆伝を召喚しようとしていた。

「お前もTHE WORLDを召喚しろ。」

「THE WORLDは私のデッキに一枚しかない」

瞬矢の場に呼び出されたサイバー・ドラゴン3体が並んだ。

「行くぞ、魔法カード、パワー・ボンド発動！サイバー・ドラゴン3体を融合、いでよ、表サイバー流奥義、サイバー・エンド・ドラゴン！！！」

瞬矢の場に三つ首の機械龍、サイバー・エンド・ドラゴン（ATK 4000 8000）が召喚され、女性に多大なプレッシャーを放った。

「サイバーエンドでTHE WORLDに攻撃、エターナル・エヴォリューション・バースト！！！」

サイバー・エンドはそれぞれの口から超絶過ぎる程のエネルギー波を放った。

「リバースカードオープン、光の召集。手札三枚を墓地に送り、オネストとフレイヤ、シャインエンジェルを回収。これで私の勝ちよ！！」

女性はオネストを手札に戻した事で自分の勝利を確信した。



「それはどうかな？ダメージステップ、手札のオネストの効果発動  
！！」

「なっ！？」

サイバー・エンド・ドラゴン

ATK8000 11100

「攻撃力……11100……」

オネストを発動してもチェーンの逆順処理により無意味だと判断した女性は敗北を悟った。

サイバー・エンドの莫大なエネルギーがTHE WORLDを飲み込み決闘に終止符を打った。

女性LP6600 0

瞬矢が決闘に勝利したことで辺りの闇が晴れ、女性は意識を失った。

決着！表サイバー流奥義VS世界！（後書き）

次回 決闘後意識を失った女性に瞬矢は

瞬矢と女性の共同生活（前書き）

瞬矢の家の朝の風景ですが・・・・・・・・・・文才が欲しいです（T O  
T）

それではどうぞ！

## 瞬矢と女性の共同生活

- 決闘から30分後 -

瞬矢はDホイールに女性を乗せ、自宅のマンションへと運んだ。女性は改めて見ても藤堂ミツバによく似ていて瞬矢自身ドキツとしながらも彼女を寝かせ、瞬矢も食事とデッキ調整、シャワーを浴びた後に就寝した。

翌朝

瞬矢が目覚めた時、女性はまだ寝たままだった。

(……やっぱり似てる)

瞬矢は女性にミツバの面影を重ねて無意識の内に彼女の髪を撫でていた。そしてそのまま彼女の頬に手が伸びようとしたその時……

「うう……んっ?」

起き出した女性に気付いて瞬矢は急いで手を離し平静を装った。

「あれ…….…….」

「……目が覚めたか。君、なんで陰達に操られていたか覚える?」

「・・・私・・・数年前に気がついたら記憶を無くしてて、シティ中を転々としていたら陰達って人が私が必要だって言ってるから・・・すみません、あとは何も思い出せないんです」

女性は自分についての情報を全て話した。

「そうか。俺は須崎瞬矢。もうすぐ奴も出場する大規模な大会があるんだ。

それが終わったら君の事をセキュリティにお願いしておくからそれまではここにいていいよ。ところで名前は？」

「・・・名前も思い出せないんで、好きなように呼んでください」

女性は瞬矢に少し身を乗り出して頼んできた。

女性は自分が瞬矢に話しかける度に瞬矢は顔を赤らめ、瞬矢の心臓の鼓動が大きくなっているのに気付いていない。

「／／……四つ葉っていうのはどう？」

「四つ葉・・・いい名前ですね。それを名乗らせてください」

「じつ、じゃあよろしくな四つ葉」

「ハイっ!」

(何だろう、性格はミツ姉にそんなに似てないのに同じ感じがする)

「じゃあ私、世話になるばかりも嫌なので朝ご飯作りますね」

そう言つて四つ葉はキッチンへ行き、瞬矢はこれからの自分の心臓の安否を考えながら気を紛らわすためにテレビをつけ、普段は見ない朝のニュース番組を見るのだった。

- 30分後 -

机の上にはご飯、味噌汁、ハムエッグ、サラダと手際よく作られた朝食が置かれていた。

「（速っ！）

よく30分でこれだけ作れたね・・・」

「何か料理だけは覚えてて。早く作らなくちゃと思つたから手の込んだ物は作れなくてすみません。」

「いや、俺は最近ずっとインスタントか外食で済ませてたから本当に美味そうだよ」

実際瞬矢はプロの仕事で決闘や決闘番組等に出演しちゃんとしたものは口にしてなかった。

「いただきます！」

瞬矢と四つ葉はそれぞれの料理を食べ始めた。

「美味しい。よくそんな若くてこの味が出せるね」

「いえ、基本的な料理ばかりだから結構簡単ですよ」  
そんな会話をしながら箸を進め、瞬矢は知らず知らずの内に久しぶりに本当の笑みを浮かべていたのだった。

### 朝食後

「あの……瞬矢さん。一つ頼みがあるんですが……」

皿洗いを終え、リビングに戻った四つ葉は瞬矢に向かって言った。

「何？ 出来ることならするけど？」

「実は……服が欲しいんですけど。」

四つ葉の服は当然の事ながら今着ている物しか無い。何か着るものを欲しがるのも当たり前である。

「服かあ。今日もIDGP本選前で休みだからこれから買いに行く？」

「えっ、いいんですか？」

「大丈夫だよ。お金とかも気にしないでいいから」

実際瞬矢はプロで稼いではいるが使い道は家賃と生活費ぐらいしかなくかなり溜め込んでいた。

「ありがとうございます！」

「じゃ準備とかするから11時頃出発ね」

「ハイ!!」

そう言って二人は外出の準備をするのであった。



瞬矢と女性の共同生活（後書き）

次回、四つ葉と買い物に行った瞬矢は・・・

新キャラも出ます。

手渡されるサイバー流カード（前書き）

今回瞬矢の前に謎のキャラが出てきます。

それでは駄作ですがお楽しみ下さい）＾。＾・；（

## 手渡されるサイバー流カード

AM11時

瞬矢は周りにプロ決闘者だと気付かれぬよう帽子とサングラスをかけ、四つ葉は一旦シャワーを浴び、髪を結い直して年相応に綺麗になっていた。

「それじゃ行こうか」

「ハイ！」

そう言って二人でDホイールに乗って買い物へと出かけた。

- 高級ブティックの店で四つ葉は遠慮しながらも瞬矢が何着も服を買ったり

瞬矢の過去（サイバー流は除いて）のアカデミア時代やプロの裏側などを話しながらランチを食べたり

決闘についてのそれぞれの意見を述べながらショッピングモールを回ったりした

「今日は本当にありがとうございました」

「いや俺もいい息抜きになったよ。楽しかったし」

お互いにそう言い、自宅へ帰ろうとしたその時……

「・・・やっと見つけたか・・・須崎瞬矢」

突然フードを被った謎の男がどこからともなく現れ、瞬矢に話しかけた。

「・・・？お前は誰だ？しかも見つけたとはどういう意味だ？」

瞬矢はその男から感じる常人には無い何かに警戒した。

「そう警戒するな。俺はお前の味方だ」

「悪いが素性も知らない奴を味方にするほど俺はお人よしじゃない」

「フフツ・・・だろうな」

男は懐からカードを数枚取り出した。

「素性も知らない奴を信用できないと言ったが、その女はどうなんだ？」

出会ってまだ一日しかたっていない。しかも記憶喪失と言っていて自分のことを語ろうとしない。それで何故お前は彼女を怪しまない？」

「！・・・お前、なぜそれを？」

「お前の事など大体分かる。お前、その女にミツバの面影を重ねているんだろう？」

「・・・なぜミツ姉の事を？」

瞬矢はその男の言動で本当に目の前の男が誰か分からなくなった。

「まあ、今は言えないもんでな。それよりもこいつを持ってけ」

男は瞬矢に持っていた数枚のカードを手渡した。

「これは・・・？」

「わしからの選別だ。奴に・・・陰達に勝てるようにな。じゃあ俺は行く。必ず優勝しろよ」

そう言い残し???は風のように去っていった。

(何だったんだ、あの男。それにこのカード・・・)

瞬矢は手渡されたカード、もうこの世にあるはずのないサイバー流の死滅したカード群を見ながら瞬矢は考えていた。

「あの・・・瞬矢さん？」

瞬矢は四つ葉に呼ばれるまで考えに没頭していた。

「・・・何でもない、じゃあ捕まって。」

「…ハイ」

そうして瞬矢は考えるのを止め、自宅のマンションへとDホイールで帰宅するのだった。

手渡されるサイバ一流カード（後書き）

今回渡されたカードの一枚は「ゲオレンダア……」のあのカードです。

次回もお楽しみ下さい（＾―＾）（＾―＾）

伝えたかった事(前書き)

やっと投稿できましたf^\_^ ;

またあの謎の人物が登場します。  
それではお楽しみ下さい。

## 伝えたかった事

IDGP本選二日前

PM8:30

瞬矢は自宅のマンションでデッキ調整をしていた。が……

「……………スー……………スー……………」

瞬矢がデッキ調整している前で四つ葉がソファアの上で無防備に寝ているのだった。瞬矢は何か理性を保とうとしているが……

(……………やっぱり心臓に悪い……………どっか出かけるか。)

そう思い瞬矢は近くのコンビニに行く準備をして玄関を出た。

しばらくしてコンビニに着き、家で一杯やろうと思いい酒とつまみを買ってそのコンビニを出た。そうして帰ろうと思ったその時……

「おい瞬矢！」

瞬矢の耳に聞き覚えのある声が聞こえた。



「あんたか……一体何のようだ？」

瞬矢が振り返ると数日前に会ったフードを被った男が立っていた。

「この間は女の前という事もあつて言えなかったことを伝えにな」

男は瞬矢に近づきながら言った。

「一体何だ？ デッキ調整もあるし俺もそう暇ではないぞ」

「フン……あの女を襲いかねないと思ったからの間違いじゃないのか？」

男は少し笑いながら言った。

「（……やっぱりこいつの前では隠し事はできないか。……）  
で、伝えたい事って何なんだ？」

男は笑うのをやめ真剣な口調で話しはじめた。

「単刀直入に言うぞ。……お前、大会に優勝したら死ぬ気だろ  
う……お前はまだ死んではならん。自分の本当の使命を果たせ」

「……俺みたいな親戚もいないような奴がいつ死んでも誰も何  
とも思わんさ。早くみんなの所に逝きたいんだ、俺は……」

瞬矢は淋しそうな表情でその男に言った。

「……誰も何とも思わんだと。お前とプロで決闘をすることを望ん

でいる海馬や氷川、そして大勢のお前のファンや居候しているあの女……四つ葉がお前の死を悲しまないと。寝言は寝てからほざけ!!」

男は厳しい口調で瞬矢に言い放った。

「それに、今のお前の心そのままでは陰達には勝てんしな」

男はわざと瞬矢が突っ掛かるように言った。

「……何だと？」

「死ぬ気で戦ってもただ負けるだけだ……勝つてこの世界で生きようと思え。何よりも強いのは生きようとする意思だ。それだけは忘れるなよ……」

「……………それが伝えたかったことか？」

「ああ。それでも分からなければ俺が力付くで分からせるぞ」

そう言っつて男は決闘盤を構えた。

「……いや、決闘は止めておく。デッキも持ってきてないしそれに……俺が負けそうな気がする」

瞬矢は自分でも分からないがその男から感じるプレッシャーに押され決闘を控えた。

「そうか。じゃあ俺はお前を決勝まで……………最期まで見届けてやるよ」

男はそう言い残すと何処かへと去って行った。

（生きようと、か。考えた事もなかったな）

そう思い帰っていく瞬矢だったが、今までの自分が強がっている子供のように思い始め、それと同時に罪悪感を感じはじめたのだった

.....

伝えたかった事（後書き）

次回、本選出場する決闘者達は……………

次回もお楽しみ下さい。

そして感想をいただけたら幸いです（＾－＾；）

**本選前日！ 決闘者達は……（前書き）**

いよいよ本選前日です。

また正体不明のキャラが出て来ますが次話くらいで分かると思います。

それではどうぞ。

本選前日！ 決闘者達は……………

I D G P本選前日

I D G P本選に出場する決闘者は試合会場に隣接するホテルに無料で宿泊することができる。

そのため瞬矢は午前中、明日から始まる本選の準備、いつも使っている日用品や着替え、決闘盤などを旅行用のバッグに詰めたりして、午後からは本選用にデッキ調整をしようとしていた。

P M 2 : 0 0

瞬矢は表、裏、表裏の三種類のサイバー流デッキをそれぞれ一から考え、構成していた。

「あの……………瞬矢さん……………」

「……………ん、呼んだ？」

瞬矢は四つ葉の声もちゃんと聞こえないくらい集中していた。

「あの、瞬矢さんは明日から大会ですけど……………その間私は何をすればよいでしょうか？」

「ああ……………そのことなんだけどさ、出場者の親族や応援者はホテルがもう一部屋だけ無料で泊まらせてくれるらしいんだ。だから……………一緒に来てくれるかな？／／／」

「ハッ、ハイ！私、瞬矢さんに声が届くように応援頑張ります」

「／……………ああ、それじゃその押し入れにもうひとつかばんがあるから準備しておいてね」

「分かりました。じゃ準備してきます」

そう言っつて四つ葉は部屋を出て行っつたが……

(……………大会に優勝するより、あの子の笑顔に慣れる方が難しい気がする……………)

前途多難な瞬矢であった。

### 丁度その頃

とあるビルの屋上で三人の少年が立っつていた。

「やっつとだ。やっつと待ちに待っつた日々が明日から始まる。明日から頼むよ、お前達。いくら僕でもトーナメントの組み合わせを自分の思い通りには出来ないからね。誰か一人が一回でも当たれば良いんだ」

「はい。俺も全力で相手をします」

「いいや、須崎瞬矢と決闘するのは俺だ、哀川憂司……………いや、今は雪代憂司か」

「前日に喧嘩はよせよ。どっちが当たってもいい。瞬矢の“本気”の力を出してくれさえすればね。さて……………そろそろ行くこうか。憂司、駆将」

陰達はそう言っつて二人を連れて移動して行つた。

### 海馬コーポレーション本社

海馬彼方は午前中を会場準備に費やし午後は瞬矢同様にデッキ調整をしていた。

「（昨年に引き続き、本選を勝ち抜いて栄光を手にする決闘者として俺は歴史に名を残す。）  
須崎、無月、氷川。今年も俺を満足させる決闘者がいる。だが青眼と共に再び優勝するのは俺だ。ワハハハハハハハハハ！」

海馬は前回のIDGPで優勝しているが今年も優勝する気満々であった。

### 選手滞在先のホテル

（初めての大会。俺は須崎瞬矢を完膚なきまで叩き潰す）



氷川は一足早くホテルに泊まり、皆と同じ様にデスク調整をしていた。

その両隣の部屋で同じくデスクを調整している決闘者がいるとは思  
いもせずに。

全員がそれぞれの思いを胸に秘めながらIDGP本選に臨んでいく  
のでであった。

**本選前日！ 決闘者達は……（後書き）**

次回、いよいよ本選当日です。

次回もお楽しみ下さい（＾|＾）∨

**本選当日！到着、エンペラードーム（前書き）**

今回、瞬矢と四つ葉が会場へと向かいます。

そして瞬矢の決闘盤は……………

それではお楽しみ下さい。

## 本選当日！到着、エンペラードーム

IDGP本選当日

AM7:00

(……………朝か、いつも試合が夜だけにきついな)

瞬矢はいつもより早起きして余裕をもって会場入りしようとしていたのだが……………

「あ、おはようございます。今朝食作ってますからもう少し待っていて下さい」

四つ葉がすでに起床し朝食を作っていた。

「……………おはよう。起きるの早いね」

「瞬矢さんが今日から試合なのに私だけなにもしないのは嫌なので……………身の回りのお世話くらいはしますから」

「(……………専属のメイドみたいだな。)  
じゃあ今日は9時30分くらいには出発するからそれまでに準備してね」

「ハイッ！」

(／／／……………寝起きでその笑顔はすぎるすぎだわ……………)

瞬矢のマンションの前には一台のベンツが停車していた。

「あの……このベンツは？」

「俺が世話になってるスポンサー、万丈目グループの車だよ。今日のために手配しておいたんだ」

四つ葉と話をしていると運転席からかなり大柄な黒服の男が出てきて瞬矢に歩み寄った。

「須崎瞬矢様でございますね。万丈目グループの加川と申します。会場までは私のご案内致します。お荷物をお預かり致します。それでは中へどうぞ」

加川と名乗った黒服の男はそう言って二人の荷物をトランクに詰め、二人を車に乗せた。

「やっぱりプロの人ってすごいですね。こんな車ただで乗られるなんて」

「まあ、かなり大規模な大会だしスポンサーもこれくらいはしてくれるさ」

そんな他愛もない話をしてから1時間後、二人はIDGP本選会場：

【エンペラードーム】に到着した。

「すごい！さすが決勝の舞台」

(エンペラー、文字通り皇帝を決定する場所ということか)

「お荷物はホテルのお部屋にお届け致しますので安心して決闘に集中して下さい。それでは失礼します」

そう言って加川は車でホテルへと向かった。

「とりあえず中に入ろっか」

「はい」

二人はエンペラードームに入り、受付を済ませ、出場者控室へ入った。

控室は高級そうなカーペットが敷かれ、ソファー、大型液晶テレビ、洗面台、シャワー室などがあり、ここだけで生活していけそうなほど広々としていた。

「ここ本当に本選会場ですよね？豪華すぎるんですけど……………」

「あの海馬さんが作り上げたんだ。別に不思議ではないよ」

そう言って瞬矢はデッキと決闘盤を机の上に置き、最終調整に入った。

「あれ？瞬矢さん、その決闘盤、いつも使ってるのと違いますよね

？」

机の上の決闘盤は瞬矢がいつも使用しているスタンダードな決闘盤ではなく赤と黒が入り混じり、中心になにかが埋め込まれている、神秘的な感じのする物だった。

「ああ……………この大会用に買ったんだ。今までのも結構古くなってきたしね」

そう笑いながら瞬矢は言ったが、顔は引きつっており何かを隠しているようだった。

その時、控室内のアナウンスが鳴った。

「・・・IDGP本選開会式は予定通り午後1時より行います。出場者は決闘場に集合下さい」

「…じゃあもう行かなくちゃ。君用に選手関係者専用の特別席を取っておいたからそこに行つてて」

「分かりました。じゃ、また後で会いましょう」

「ああ」

そう言って二人は別れ、瞬矢は開会式に向かうのだった。

**本選当日！到着、エンブレイドーム（後書き）**

次回、開会式に集う決闘者達は・・・

決闘シーンまではあと少しだと思います。 ) - o - (

次回もお楽しみ下さい。



**IDGP開幕！（前書き）**

何とか開会式まで書けました。（＾―＾；）

それではお楽しみ下さい。

## IDGP開幕!

### IDGP本選決闘場

瞬矢は決闘場へと入ったが周りの報道陣の数が半端ではなかった。

「おい、今度は大物ルーキーの須崎瞬矢だぞ」

「よっしゃー。編集長に怒らなくて済みそうだわ」

本選だけあり、会場のおちこちで瞬矢を撮影しようとするマスコミやファンがカメラで撮っていた。

(……………こういうのは苦手なんだよな……………)

プロ二年目の瞬矢だったがこういう場面はあまり慣れてはいなかった。

何とか決闘場に到着した瞬矢だったがすでに二人の決闘者が来ていた。その内の一人は金髪で目つきが鋭く近寄りがたい雰囲気のある男。もう一人は瞬矢の母校、デュエルアカデミア本校の青い制服を着た少年で、その少年がこちらを向いた時に目が合った。

「……………瞬矢先輩？」

「……………翔夜か？」

「お久しぶりです。プロでの決闘は毎回欠かさず見ていました」

「ありがとよ。そうか、アカデミア生枠で勝ち抜いたのか」

「はい！こういう大会で今度こそちゃんと先輩に勝ちたかったので」

瞬矢と親しげに話している少年は遊城翔夜【ゆうきしょうや】。

伝説の決闘者遊城十代の子孫であり、デュエルアカデミア本校のオベリスク・ブルーの生徒であり瞬矢と親しかった後輩であった。

「残念だがそいつを叩き潰すのは俺だ」

「……………また、返り討ちにしますよ。氷川さん」

瞬矢に話しかけてきたのは敗者復活戦を勝ち抜いた決闘者、氷川涼であった。

「盛り上がってるね。僕も交せてくれないかな」

「……………陰達……………」

「そう睨むなよ。カメラの前だし子供も見ているしね」

瞬矢達の前に二人の少年を連れた陰達が来たがその内の一人に瞬矢は見覚えがあった。

「君は……………憂司君？」

「ああ。あれから俺は陰達様の所で強くなった。お前に勝てるよう

になー!!」

「貴様、こんな子供まで操ったのか!？」

「子供？強ければ歳なんて関係無いだろう。彼らは本選まで来れたのだから」

憂司と呼ばれた少年は3年前に亡くなったサイバー流門下生、哀川総司の弟の哀川憂司【あいかわゆうじ】であり、瞬矢がそれまで使っていた宝玉獣のレプリカを譲った決闘者だった。

「それよりもその決闘盤を使ってくれて嬉しいよ。覚悟を決めてくれたみたいだね」

「ああ。お前を殺すためにな。」

そういつた会話をしていると会場のモニターには来ていない出場者、海馬彼方が映し出された。

「全員揃ったようだな。これより、インターナショナル・デュエリスト・グランプリ、IDGP本選の開会式を始める!!!」

会場のギャラリイ達が一斉に盛り上がった。

「大会のルールは昨年同様、コンピューターがランダムに組み合わせを決めてトーナメントを行い、優勝者を決定する。それでは抽選を開始する!」

決闘者達の命運を握る組み合わせ抽選が行われるのだった……

## IDGP開幕！（後書き）

次回、初戦を戦う決闘者は誰に・・・

こんな小説ですが感想をいただけたら幸いです。

一回戦、海馬VS神山開始！（前書き）

やっと一回戦開始です。

それではお楽しみ下さい。

一回戦、海馬VS神山開始！

「トーナメント一回戦の組み合わせは……」

海馬がそう言うとモニターに青眼の白龍が現れ、対戦カードが青眼の攻撃シーンと同時に表示された。

対戦カードは……

一回戦第一試合

海馬彼方VS神山ルイ

第二試合

須崎瞬矢VS雪代憂司

第三試合

無月陰達VS氷川涼

第四試合

河上駆将VS遊城翔夜

だった。

（憂司君とか。願ってもないことだな…）

（いきなりあの変な子か）

（須崎とは決勝でか…）

（憂司が当たったか。まあ僕は決勝で決闘するからいいけど）

(ちっ、あんなアカデミア生が相手かよ)

(……………運命の女神よ、感謝する)

「フン、俺は第一試合か。それでは選手達は控室や観覧席でそれぞれの準備をするように。以上で開会式を終了する」

海馬がそう言うともモニターから海馬が消え、表示が海馬彼方VS神山ルイのフィールドとライフポイントの表示になった。

しばらくすると海馬も決闘場に姿を現し神山と対峙した。

瞬矢と翔夜は四つ葉のいる席へ行き海馬の決闘を見届けることにした。

「あ、瞬矢さん、こっちです」

二人に気づいた四つ葉は声をかけた。

「あの、先輩。この人は？」

「……………記憶喪失で今家で預かってる四つ葉っていうんだ」

「初めまして。四つ葉っていいいます」

「……………先輩もなかなかやりますね!!」

「……………話聞いてたか、お前?……………」



瞬矢らがそんな話をしていた頃二人は既に決闘盤を構えていた。

「お前の調べはついている……………地下決闘場をあるカードで潰した凶悪犯とな」

「そうか、それなら話が早い。俺はこの大会で優勝し、こいつらで世界を破壊しつくして地球を終わらせる!!」

「フン、くだらん戯れ事はいい。決闘者ならば決闘盤を構え、闘いの中で語れ!!」

「いいだろう。前回優勝者のあんたを倒して名を挙げてやる!!」

「決闘!!」

「俺のターン、ドロ。サファイアドラゴンを攻撃表示で召喚。カードを一枚伏せターンエンド」

海馬LP8000

場：サファイアドラゴン（ATK1900）  
伏せカード一枚

「俺のターン。モンスターをセット。カードを二枚伏せターンを終了する」

神山LP8000

場：裏守備モンスター  
伏せカード二枚

「（攻めてこないか）  
俺のターン。正義の味方カイバーマンを召喚！」

海馬の場に昔のヒーロー漫画に出てきそうなモンスター、正義の味方カイバーマン（ATK200）が召喚された。

「カイバーマンの効果発動！このモンスターをリリースし手札の我が究極のドラゴン、青眼の白龍を特殊召喚！！」

- パアアアア -

海馬が最も信頼するドラゴン、先祖代々受け継いできた青眼の白龍が場に現れた。

「さすが海馬さん。最初から本気だ…」

「綺麗………初めて見ました」

「くう〜！！俺も決闘したい！！」

「行け、青眼の白龍！！滅びのバーストストリーム！！」

青眼の青白いブレスが神山の裏側守備モンスター、ジャイアントウィルスを破壊した。

海馬LP8000 7500

「ジャイアントウィルスにより貴様に500ポイントのダメージを

与え、デッキから同名カードを二体攻撃表示で特殊召喚する」

ジャイアントウィルス二体はデッキから呼び出された。

「サファイアドラゴンでジャイアントウィルスへ攻撃！」

「速攻魔法、エネミーコントローラー発動。サファイアドラゴンを  
守備表示にする」

いきなり現れたゲームのコントローラーが無理矢理サファイアドラ  
ゴンを守備表示にした。

「（なぜ青眼に使わなかった……）  
カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

海馬LP7500

場：青眼の白龍（ATK3000）

裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「俺のターン！畏発動、リミットリバー。墓地からジャイアント  
ウィルスを復活させる！！」

そう言うつと神山はジャイアントウィルスを召喚し、自身の手札の一  
枚を掲げた。

「いくぞおおお、海馬彼方！！三体のジャイアントウィルスをリリ  
ース、現れよ！全てを無に帰す邪神、邪神イレイザー召喚！！！」

三体のジャイアントウィルスはリリースされ、現在では存在する筈

のない三邪神の一角、邪神イレイザーが呼び出されたのだ……

一回戦、海馬VS神山開始！（後書き）

次回、邪神を召喚された海馬は……

感想、受け付けております。

次回もお楽しみ下さい

邪神VS漆黒の龍！（前書き）

邪神イレイザーを前にして海馬は……

感想お待ちしております。

## 邪神VS漆黒の龍！

エンペラードームの外では昼間とは思えない程突風が吹き荒れ、雷鳴が轟いていた。

「ちっ、邪神のカードを使って地下決闘場を滅ぼしたという話は本当だったか……」

「ああ。俺はこの邪神でこんな世界など破壊する……！」

「……………邪神イレイザーだと!？」

「瞬矢先輩、あのカードってもう百年以上も前に処分されたはずじゃ?？」

「ああ、その筈だが……………あのモンスターから感じるプレッシャー、あれは神特有の気。間違いなく本物の神だ……」

「邪神イレイザーの攻撃力は相手の場のカードの数×1000ポイント。よって今は攻撃力は4000となる。イレイザーで青眼の白龍に攻撃！ダイジェステイブ・プレス！！」

イレイザーの二つ目の口から放たれた闇の攻撃に耐えられずに青眼の白龍（ATK3000）は破壊された。

海馬LP7500 6500

「フン、青眼など所詮は通常モンスター、神には通用しない。ターンエンドだ」

神山LP8000

場：邪神イレイザー（ATK3000）

「貴様ああ！！青眼を愚弄するか！絶対にゆるさんぞ！！俺のターン、ドロー！！俺はダーク・リゾネーターを召喚！レベル4、サファイアドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！」

ダーク・リゾネーターが輝く輪となりサファイアドラゴンを包摂した。

「王にふさわしき漆黒の龍よ、我が眼前に舞い降りよ！シンクロ召喚！羽ばたけ、エクスペロード・ウィング・ドラゴン！！！」

海馬の場にエクスペロード・ウィング・ドラゴン（ATK2400）



が召喚され、邪神同様強い闇のオーラを纏っていた。

「更に速攻魔法、イーजीチュールニング発動。墓地のダーク・リゾネーター（ATK1300）を除外し、エクスプロード・ウィング・ドラゴンの攻撃力を1300ポイントアップさせる！」

エクスプロード・ウィング・ドラゴンはダーク・リゾネーターの生気を吸収して自らの攻撃力に変えた。

「エクスプロード・ウィング・ドラゴン（ATK3700）で邪神イレイザーを攻撃！！」

エクスプロード・ウィング・ドラゴンの効果により、自身の攻撃力以下のモンスターと戦闘する時、そのモンスターを破壊してその攻撃力分ダメージを与える！！」

邪神イレイザーはエクスプロード・ウィング・ドラゴンの闇のブレスに覆われそのまま消滅した。

神山LP8000 5000

「くっ……さすがにやるな。だがイレイザーは破壊の神。墓地に送られた時場のカード全てを破壊する！」

イレイザーの体液が決闘場に流れ、その闇の中に全てのカードが飲み込まれていった。

「フン、破壊されてもただでは死なんか。カードを一枚伏せターンエンド」

海馬LP6500

場：伏せカード一枚

邪神イレイザーは倒したが代償として場のカード全てを破壊され海馬が不利な状況で神山にターンが回っていくのだった。

邪神VS漆黒の龍！（後書き）

次回、第二の邪神が海馬を襲う！！

次回もお楽しみ下さい。(^-^)  
○

**決着！最強の青眼VS最凶の邪神（前書き）**

海馬VS神山戦の決着です。

果たして勝つのは青眼か、邪神か……………

それではお楽しみ下さい。

## 決着！最強の青眼VS最凶の邪神

「俺のターン！モンスターをセット。カードを二枚伏せターンを終了する」

神山LP5000

場：裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「俺のターン！モンスターをセットし、永続魔法、未来融合・フューチャーフュージョン発動！対象はF・G・D」

そう言うと海馬はデッキから、

伝説の白石×2

スピアドラゴン

サファイアドラゴン

ミラージユドラゴンを墓地に送った。

「伝説の白石が墓地に送られた事によりデッキから青眼の白龍を二枚手札に加える。これでターンエンドだ」

海馬LP6500

場：裏側守備モンスター

未来融合・フューチャーフュージョン（F・G・D）

伏せカード一枚

「俺のターン！見せてやる、更なる神を！二枚の罫、死霊ゾーマと

アポピスの化身を発動。

そして二体の畏モンスターと裏守備モンスター、クリッターをリリース！！現れよ、あらゆる恐怖の根源、邪神ドレッドルート！！！！」

体中から闇のオーラを放ち、イレイザー同様に神特有のプレッシャーを持つモンスター、邪神ドレッドルートが召喚された。

「ハハハハッ、どうした海馬？新たな邪神に声も出ないか？」

「……………フン、馬鹿を言うな。今や伝説でしかない三邪神と戦う事が出来るんだ。決闘者として己の血が騒ぐぞ……………」

「…ならば受けてみよ！邪神ドレッドルートでセットモンスターに攻撃！ファイアーズ・ノックダウン！！」

海馬の裏側守備モンスター、クリッターがドレッドルートの巨大な拳によって破壊された。

「クリッターの効果発動。デッキから沼地の魔神王を手札に加える」

「そんな雑魚に何が出来る？ターンエンドだ」

神山LP5000

場：邪神ドレッドルート（ATK4000）

「俺のターン！来た。畏発動、正統なる血統。墓地から青眼の白龍を特殊召喚」

海馬の場に再び青眼が現れた。

「更に沼地の魔神王の効果、このカードを捨て、デッキから融合を手札に加え、発動！！青眼三体融合、いでよ青眼の究極竜！！」

海馬の場に青眼が三体融合した光り輝くドラゴン、青眼の究極竜が現れた。

「……………これが海馬家に代々受け継がれてきた青眼の究極の姿………  
…だが攻撃力はドレツドルートの効果により半分になる」

「貴様に言われんでも分かっているわ！装備魔法、巨大化を貴様のドレツドルートに装備。俺のライフは貴様より高い。よってドレツドルートの攻撃力は半分になる！」

「何だと!?!」

青眼の究極竜

ATK4500 2250

邪神ドレツドルート

ATK4000 2000

「行け、青眼の究極竜！神を滅せよ！！アルティメット・バースト  
オオオオ!!!」

究極竜の青白いプレスにより二体目の神、邪神ドレツドルートが微塵も残らず破壊された。

神山LP5000 4750

「ぐっ……馬鹿な！？神がこつも呆気なく………」

「フン、使い手が貴様のような凡人ならば神も所詮カードという紙でしかない。ターンエンドだ」

海馬LP6500

場：青眼の究極竜（ATK4500）

未来融合 - フューチャーフュージョン（F・G・D対象）

（神を目の前にしてあの冷静な判断とプレイング……やはり流石だ）

瞬矢は海馬のような強靱な精神、隙の無い戦術に改めて尊敬の念を抱いていた。

「……………俺のターン。速攻魔法、サイクロンを発動、その未来融合を破壊。モンスターをセットしカードを一枚伏せターン終了」

神山LP4750

場：裏側守備モンスター

伏せカード一枚

「俺のターン。究極竜で攻撃、アルティメットバースト！」

神山の裏側守備モンスターはメタモルポットだった。



「メタモルポットのリバース効果。互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキから五枚のカードをドローする」

互いのプレイヤーはそれぞれ手札補充を行った。

「カードを伏せ、ターン終了」

海馬LP6500

場：青眼の究極竜（ATK4500）

伏せカード一枚

「……………神山、インダストリアル・イリュージョン社の有能なカードデザイナーだったお前が何故こんなことをしている？」

突然海馬は神山に対し問いただした。

「……………言った筈だ。この邪神の力で世界を……………この世を破壊するためだ!!」

そう言った神山の肩からは闇と光のそれぞれがせめぎあっているオーラが出ていた。

「（やはり、こいつは何者かに……………）  
フン、下らん質問だったな。お前のターンだ、ドローしろ」

「ドロー！魔法カード、ワン・フォー・ワン発動。手札のダブルコストーンを捨ててデッキからレベル・ステイラーを特殊召喚。更に、リビングデッドの呼び声発動。ダブルコストーンを復活させる」

神山の場に二つの顔を持つ闇のモンスター、ダブルコストーンが復活した。

「ダブルコストーンは闇属性モンスターを召喚する際、一体で二体分と扱う。」

ダブルコストーンとレベル・ステイラーをリリース。現れよ！！邪神を束ねる究極のモンスター、邪神アバター！！！」

神山の場にイレイザー、ドレッドルートを超える闇のオーラを纏った神、邪神アバターが召喚され、真っ黒な球体だった姿から青眼の究極龍の姿へと変化した。

「これが我が最強の邪神。邪神アバターの効果によりフィールド上の一番攻撃力の高いモンスターの攻撃力+100ポイントがアバターの攻撃力となる」

邪神アバター

ATK? 4600

「アバターで究極竜を攻撃！！ダークネス・アルティメット・バースト！！！！！」

邪神アバターの攻撃に耐えられず、青眼の究極竜はそのエネルギー波に飲み込まれた。

海馬LP 6500 6400

「くっ……これが我が先祖、海馬瀬人が敗れたという邪神アバター……」

「アバターが召喚されてから二ターンの間、貴様は魔法、罫を發動できない。ターンエンドだ」

神山LP4750

場：邪神アバター（ATK100）

伏せカード一枚

「俺のターン。」

（今は耐えるしかないか）

モンスターをセットしてターン終了だ」

海馬LP6400

場：裏守備モンスター

伏せカード一枚

「フッフ……………どうした？前回優勝者の名が泣くぞ。俺のターン！アバターで攻撃！」

アバターは裏守備のモンスターに攻撃した……………が

「俺のモンスターは魂を削る死霊だ。このモンスターは戦闘によつては破壊されない」

「……………まあいい、ターンエンド」

神山LP4750

場：邪神アバター（ATK400）

伏せカード一枚

「ドロ。ターンエンドだ」

海馬LP6400

魂を削る死霊(DEF200)

伏せカード一枚

「俺のターン。魔法カード、死者蘇生発動！お前の墓地から青眼の究極竜を特殊召喚する！」

「チエーンして畏発動、リビングゲットの呼び声。究極竜を貴様ごときには使わせぬわ！！」

海馬の場に再び青眼の究極竜が現れ、同時に邪神アバターもまた究極竜の姿に変わった。

「ならばアバターで再び究極竜に攻撃、ダークネス・アルティメット・バースト！！」

海馬LP6400 6300

「もうお前に勝機は無い。サレンダーしろ！！ターンエンドだ！」

神山LP4750

場：邪神アバター(ATK400)

伏せカード一枚

「俺のターン！！………神山よ、この決闘、なかなか楽しめた。だがこのターンで終わりだ！」

「フン、サレンダーなら早くしろ！」

「誰がサレンドーなどするか！！俺は死者蘇生を発動！青眼の究極竜を特殊召喚。更に究極竜をリリース！！」

「究極竜をリリースだと！？」

「いでよ！青眼の光龍！！！！」

海馬の場に全身から神々しい光を放つ青眼の最終進化形態、青眼の光龍が現れ、邪神アバターは光龍の姿をコピーした。

「光龍は墓地のドラゴン一体につき300ポイント攻撃力がアップする。俺の墓地には11体。よって光龍の攻撃力は6300だ！！」

「くっ……………だがアバターの攻撃力はその上を行く6400だ！」

「装備魔法、レインボー・ヴェールを光龍に装備させる。バトルだ。青眼の光龍で邪神アバターに攻撃！！」

虹色の衣を纏った青眼の光龍は邪神アバターに向けて、壮絶な光の波動を放った。

「馬鹿か？アバターの攻撃力は6400だぞ」

「装備されたレインボー・ヴェールの効果、攻撃する相手モンスターへの効果を無効にする！！」

「何！？」

邪神アバター

ATK6400 0

「行け！青眼の光龍！！シャイニング・バアアアストオオオオオ！！！！」

「そんな・馬鹿なあああああああ！！！！」

青眼の光龍の放ったブレスが邪神アバターを完全に飲み込み決闘に  
終止符を打った。

神山LP4750 0

決着！最強の青眼VS最凶の邪神（後書き）

海馬彼方、ご先祖様のリベンジ達成です。（^| ^）v

感想などございましたらお願いします。

二回戦開始！ サイバー流VS宝玉獣！（前書き）

今回は二回戦、瞬矢と憂司が決闘します。

感想などございましたらお願いします。

それではお楽しみ下さい。 (^-^ ) v



二回戦開始！ サイバー流VS宝玉獣！

青眼の光龍が邪神アバターを破壊したその瞬間、海馬や瞬矢、陰達らには見えた……神山から闇と光の入り混じった”何か”が飛び出て粉々に砕け散ったのを。

それと同時に神山はその場に膝から崩れ落ちた。海馬はそれを見届けると神山の所へ向かった。

「大丈夫か、神山？」

「うっ……海馬……さん、すみません……で……した……」

「（やはりこいつあの憑き物が……）  
何も言うな。今救護班を呼ぶ」

「海馬さん……半年前、インダストリアルイリユージョン社にいた時、……”何か”が俺に話しかけてきたんです……三邪神のカードを作れと……その声の言ったことには何故か断れなくて……社内の極秘データから邪神のカードデータを盗んでカードにして……後はあなたの知っている限りです……  
本当にすいませ……せ……」

「救護班……！急いで神山を病院に運べ……！早くせんと全員首にするぞ……！！」

会場中に響き渡るような声に全員が唾然としてる中、救護班が到着し、神山が担架で運ばれて行った。

(・・・さすが海馬さん・・・さて、俺も行くか)

「瞬矢先輩、次頑張つて下さいね。絶対決勝で決闘しましょう!」

「頑張つて下さい、瞬矢さん!」

「ああ!行ってくるよ」

瞬矢は決闘場への階段へと歩いて行った。

「(・・・そうか。あいつに宿っていたか・・・)

面白そうだな、海馬彼方。興味が湧いたよ」

「けっ、何で俺だけあんなガキと・・・」

「そういうなよ……………恐らくは奴の先祖……………遊城十代だ。舐めてたら負けるよ」

「あの遊城十代ですか!?!なら、退屈しないで済みそうだ」

「……………それでは俺は瞬矢の相手をして来ます。」

「ああ、頼んだよ。プロリーグでの瞬矢を更に超えた強さの瞬矢になつていればいいけどね……………」

決闘場から少し離れた席で陰達ら三人が話し、憂司が決闘場へと歩いて行った。

「海馬さん！」

決闘場の入口で瞬矢は海馬に話しかけた。

「須崎か……次の決闘だったな。あんな子供に負ける事は俺が断じて認めんからな！」

「分かっています。それであの神山っていう人、一体何なんですか？何故邪神を？それにあの白と黒のは一体？」

「……神山はな……インダストリアル・イリユージョン社にいた有能なカードデザイナーでな。何度か顔を会わせていたが、半年前急にどこかへ行ってしまい、俺も捜していたのだが……その間地下決闘場を荒らし回っていたらしい。邪神は行方不明になる前インダストリアルイリユージョン社で製造したらしいが、あいつから出ていたあの白と黒の何が奴を操っていたのだろう。まあもう問題はない。邪神のカードも俺が処分しておく」

そう言う海馬の右手には神山の決闘盤が握られていた。

「……そうだったんですか。それで、担架で運ばれて行きましたけど大丈夫なんですか？」

「おそらく憑き物が無くなったせいだろう。しばらくして回復したらまたカードデザイナーに復活させるつもりだ」

「そうですか、じゃあ俺は決闘があるので行きます」

「フツ、準決勝で待っているぞ!!」

そう言い海馬は控室へ戻って行き、瞬矢も決闘場に向かった。

## 決闘場

「久しぶりだな瞬矢!」

「こちらこそ、お兄さんにはずいぶん世話になったよ」

「フン、総司のことはいい。俺にあのデッキを譲った事を後悔させてやる!」

「俺がどうなるうがあのでッキを譲った事に後悔はしないよ。君にはあの時無限の可能性を感じた。それに俺にはこのサイバー流デッキがある」

「ならば、死なせて後悔させる、闇のゲームで!!」

そう言い憂司は決闘盤を構え、その決闘盤の中心にある模様から光が放たれ、周りを薄暗くした。

「……………やはり……………やるしかないのか」

そう言った瞬矢も決闘盤を構え、その決闘盤からも光が放たれて周りを異様な雰囲気させた。

「千年盤【ミレニウム・ディスク】、数年前エジプトで発掘された千年アイテムの破片を散りばめた闇の力を得られる決闘盤……楽しみだ、この力でお前を殺せるんだから」

「俺が勝つたら君を陰達の洗脳から解放させる」

「必要ないね、今の俺にお前は勝てない」

「なら、決闘者らしく続きは決闘で語ろう」

「……そうだな」

「「決闘!!」」

「俺の先攻、ドロー！俺はモンスターをセット、カード一枚を伏せターンエンド」

憂司LP8000

場：裏守備モンスター

伏せカード一枚

「俺のターン！相手の場にのみモンスターが存在するのでサイバー・ドラゴンを特殊召喚。さらに、仮面竜を召喚。」

サイバー・ドラゴンで攻撃！エヴォリユーション・バースト!!」

サイバー・ドラゴン（ATK2100）から放たれたエネルギーが裏守備モンスター、宝玉獣 エメラルド・タートル（ATK2000）を破壊した。

しかし、破壊されたエメラルドタートルは憂司の場に宝玉となって残った。

「宝玉獣は破壊されても魔法・畏ゾーンに永続魔法扱いでとどまる」

「だが、モンスターはいない！仮面竜でダイレクトアタック！」

「くっ……………」

LP8000 6600

「カードを伏せ、ターンエンド」

瞬矢LP8000

場：サイバードラゴン（ATK2100）

仮面竜（ATK1400）

伏せカード一枚

「すごい……………サイバ一流デッキとレプリカの宝玉獣デッキ。二人とも今では億単位で売れるデッキを使ってる」

「億単位！？そんなデッキ使ってるんですか？」

「サイバ一流はあのヘルカイザーが、宝玉獣はヨハン・アンデルセンが使ったカード。マニアじゃ喉から手がでる程欲しがる代物ですよ」

「へえ、あの伝説の決闘者達が使ってたんだあ」

翔夜の言うようにこの二つのデッキは新しく作られることもまれで、大規模な大会の優勝者などに稀に記念として贈られるぐらいでかなりの値段がついていたのだった。

「俺のターン！行くぞ、俺は宝玉獣 サファイア・ペガサスを召喚！」

憂司の場に宝玉を埋め込んだ想像上の動物、サファイア・ペガサスが召喚された。

「効果によりデッキからコバルト・イーグルを魔法・畏ゾーンに置く。」

更に魔法カード、宝玉の導きを発動！もう一体のサファイア・ペガサスをデッキから特殊召喚！！それによりアメジスト・キャットをフィールドに置く！！」

憂司の場には宝玉が三枚並んでいるが、憂司は手札のカードを掲げ、三体の宝玉獣を墓地に送った。

（何だ！？この召喚方法は！？）

瞬矢は自分が使ってた時にはないプレイングに驚きを隠せなかった。

「見せてやる瞬矢！！三体の宝玉獣を墓地に送り・・・降雷皇八モンを特殊召喚！！！！」

「なっ!?!?・・・降雷皇・・・だと!?!?」

憂司の場にデュエルアカデミア本校の地下にあるはずの二幻魔の  
体、降雷皇ハモンが現れ、ドームに雷鳴が轟くのだった……………



二回戦開始！ サイバー流VS宝玉獣！（後書き）

次回、思いがけない三幻魔の出現に瞬矢は……………

次回もお楽しみ下さい。

現れる混沌の合成獣（前書き）

更新遅くなり申し訳ありません（<|>）

圧倒的な効果のハモンに対して瞬矢は……………

それではお楽しみ下さい。

## 現れる混沌の合成獣

「降雷皇だと!？」

瞬矢は封印されているはずの三幻魔の一体、降雷皇八モンに驚きを隠せなかった。

「何で降雷皇が!？」

翔夜も瞬矢同様予期せぬ八モンの登場に驚いていた。

「何ですか、あの降雷皇って?」

「昔創られた三幻神や邪神に匹敵する能力を持った三幻魔と呼ばれるカードの一枚。俺がいま通ってるアカデミア本校の地下に封印されているはずなのに……………」

「……………封印を解いたのか、陰達は?」

「ああ、俺のデッキに相性が良いからな。いくぞ!!降雷皇八モンで、サイバー・ドラゴンに攻撃!地獄の贖罪!!」

降雷皇八モン(ATK4000)が呼び出した雷によりサイバー・ドラゴン(ATK2100)は何も抵抗できないまま破壊された。

瞬矢LP 8000 6100

「さらに、ハモンが相手モンスターを破壊した時1000ポイントのダメージを与える。失楽の霹靂！！！」

サイバー・ドラゴンを破壊した雷撃がそのまま瞬矢に直撃した。

「ぐあああああああ！！！」

瞬矢LP 6100 5100

「まだ倒れるなよ、サファイア・ペガサスで仮面竜に攻撃！！サファイア・トルネード！！！」

サファイア・ペガサス（ATK1800）の攻撃により仮面竜（ATK1400）は体を貫かれた。

瞬矢LP 5100 4700

「ぐっ………仮面竜の効果によりデッキから仮面竜を守備表示で特殊召喚……」

「ならばもう一体のサファイア・ペガサスで攻撃！！」

再度仮面竜（DEF1100）はサファイア・ペガサスによってその身を貫かれた。

「……仮面竜の効果によりチューナーモンスター、炎龍を特殊召喚……」

「チューナーか……カードを一枚伏せターンエンド」

憂司LP6600

場：降雷皇ハモン（ATK4000）

宝玉獣 サファイア・ペガサス（ATK1800）×2

伏せカード一枚

「……ハア……ハア……ハア……」

ハモンの攻撃によるダメージで瞬矢の肉体はかなりのダメージを受けていた。

「何をもたついている？もう体が持たないか？」

「……バカな事言うなよ……俺のターン！カードを一枚伏せ、サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚。効果発動！手札の魔法カード、エヴォリューション・バーストを見せることでこのターンのみカード名をサイバー・ドラゴンとして扱う。

魔法カード、エヴォリューション・バースト発動！サイバー・ドラゴンが俺の場にいる時、このターンの攻撃を放棄して相手の場のカード一枚を破壊する。俺が破壊するのは当然ハモン！！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイは口から青白いエネルギー波を降雷皇ハモンに向けて放出した。

「カウンター罠、ディストラクション・ジャマー発動！！手札のアンバー・マンモスを捨ててモンスターを破壊する効果を持つカードの発動と効果を無効にする！！」

降雷皇ハモンは畏により守られ、逆にエヴォリユーション・バーストのカードが破壊された。

「（くっ……隙が全くない、俺が渡した時にはないカードもある……）」

カードを一枚伏せ、炎龍を守備表示にしてターン終了」

瞬矢LP4700

場：サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）

炎龍（DEF600）

伏せカード二枚

「俺のターン！宝玉獣 トパーズ・タイガーを召喚。バトルだ！ハモ」畏カード発動、威嚇する咆哮。このターンの攻撃宣言を封じる！……防いだか。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

憂司LP6600

場：降雷皇ハモン（ATK4000）

宝玉獣 サファイア・ペガサス（ATK1800）×2

宝玉獣 トパーズ・タイガー（ATK1600）

伏せカード一枚

「俺のターン、ドロー！畏発動、DNA改造手術。機械族を選択。」

場の全てのモンスターの状態が変化し機械で構成された。

「何のつもりだ？今更こんなカードを発動するとは」

「俺が手に入れた新しいサイバー流のためだ。サイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果により手札の未来融合・フューチャー・フュージョンを見せてサイバー・ドラゴンとして扱う。そしてフィールドの全てのモンスターを融合!!!」

「何だと!?!」

場の全てのモンスターが一つに構成され、全身が機械の集合体が姿を現した。

「いでよ、キメラテック・フォートレス・ドラゴン!!!」

瞬矢の宣言と共にキメラテック・フォートレス・ドラゴン（ATK 0）が六つの首を上げながら降臨した。

「馬鹿な!?!何だこの召喚方法は!?!」

「キメラテック・フォートレス・ドラゴンは場のサイバー・ドラゴンを含む機械族モンスターを墓地に送り特殊召喚出来る。さらにキメラテックの攻撃力は素材にしたモンスターの数×1000ポイントとなる!」

キメラテック・フォートレス・ドラゴン

ATK 0 6000

「攻撃力6000だと!?!」

「バトル、キメラテックで直接攻撃!エヴォリュション・レザルト・アーティレリー!!!!」

キメラテック・フォートレス・ドラゴンは車輪の部分から全ての顔を出し一斉に攻撃を仕掛けた。

「くっ、リバーズ罠、次元幽閉発動。キメラテックには異次元に飛んでもらう。」

「……危なかった。いきなり攻撃力6000のモンスターをだすとは……………」

突然、キメラテック・フォートレス・ドラゴンの目の前に異次元への入口が現れ、キメラテックは吸い込まれて行った。

「……流石だ。永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョン発動。鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを選択」

瞬矢はデッキから融合素材のサイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールをデッキから墓地に送った。

「これでターンエンドだ」

瞬矢LP4700

場：未来融合・フューチャー・フュージョン（鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン対象）

DNA改造手術

「……俺のターン！」

お互いに相手の力量を確かめた後に憂司にターンが回っていくのだった。



## 現れる混沌の合成獣（後書き）

次回、サイバー流VS宝玉獣決着です。

ご要望などございましたらお願いします。

**激突！ 究極の破壊竜VS古の宝玉神（前書き）**

瞬矢VS憂司の決着です。

表サイバー流の切り札が登場します。

それではお楽しみ下さい。（^ー^）v

10月25日作者がエフェクト・ヴェーラーの効果をきちんと理解していなかった為、一部修正致しました。大変ご迷惑をおかけします。（<ー>）

激突！ 究極の破壊竜VS古の宝玉神

「……………俺は、カードを一枚伏せターンエンド」

憂司LP6600

場：伏せカード一枚

「俺のターン！」

「（…憂司はちゃんとやってくれてるね。だが、あのキメラテック・フォートレスのカード、あれはもうこの世には現存しないと聞いてたけど…一体どうして？）  
まあいいや、瞬矢は憂司に勝てるかな？」

決闘場から少し離れた席で陰達は二人の決闘を見ていた。

「カードを一枚伏せターン終了」

瞬矢LP4700

場：伏せカード一枚

未来融合 - フューチャーフュージョン（鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン対象）  
DNA改造手術

「俺のターン！速攻魔法、サイクロン発動！未来融合を破壊！」

サイクロンにより瞬矢の未来融合が破壊され、次のターン来るはずだった鎧黒竜は召喚されなくなった。

「……ターンエンド」

憂司LP6600

場：伏せカード一枚

「俺のターン！プロト・サイバー・ドラゴンを召喚。直接攻撃、エヴォリューション・フレア！」

プロト・サイバー・ドラゴン（ATK1100）が放ったプレスが憂司に直撃した。

「ぐっ……」

憂司LP6600 5500

「これでターンエンドだ」

瞬矢LP4700

場：プロト・サイバー・ドラゴン（ATK1100）  
DNA改造手術

「俺のターン、ドロー！モンスターをセットしてターンを終了する」

憂司LP5500

場：裏守備モンスター

伏せカード一枚

「俺のターン、プロト・サイバーをリリース、ホルスの黒炎竜LV6をアドバンス召喚」

瞬矢の場に白い翼を纏ったホルスの黒炎竜LV6（ATK2300）が召喚された。

「ホルスで攻撃！ブラック・フレーム！！」

ホルスの黒炎竜LV6の放った闇の炎により裏守備モンスター、メタモルポット（DEF600）が破壊された。

「メタモルポットのリバース効果、互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキから五枚ドローする。」

「良いのか？俺まで補充するんだぞ？」

「手札があっても今の貴様では俺には勝てん」

「言っじゃないか・・・カードを一枚伏せターンエンド。そしてこのエンドフェイズ、ホルスの黒炎竜LV6を墓地に送り、デッキ

からLV8を特殊召喚する!!」

瞬矢の場にホルスの黒炎竜の最終形態、LV8（ATK3000）が現れた。

瞬矢LP4700

場：ホルスの黒炎竜LV8（ATK3000）

DNA改造手術

伏せカード一枚

「俺のターン、ドロー!!俺はサファイア・ペガサスを召喚。サファイア・ペガサスの効果でデッキからルビー・カーバンクルを魔法・罠ゾーンに置く!

罠発動、カウンター・ジエム。ルビー・カーバンクルを墓地に送り、墓地の エメラルド、サファイア、トパーズ、アンバーの四体を魔法・罠ゾーンに置く!」

憂司の場に墓地にあるはずの宝玉が現れ、それぞれが幻想的なイメージを醸し出していた。

「さらに、俺の場に永続魔法扱いの宝玉獣が三体以上いることにより手札のバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを特殊召喚」

憂司の場に、心の中に深い悲しみを持っている、そんなイメージを持たせるドラゴン、バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（ATK1900）が出現した。

「だがそれらのモンスターではホルスの攻撃力には及ばんぞ?」

「分かっている。俺の場と墓地に全ての宝玉獣が揃った……………」

……何を意味しているか以前使ってたお前には分かっているだろう？」

「（やはり……来るか？）ああ、掛かって来い」

「行くぞ！！俺の場と墓地に宝玉獣が七種類存在する時、手札の究極宝玉神レインボー・ドラゴンを特殊召喚出来る！！いでよ、宝玉獣を束ねる古の龍、究極宝玉神 レインボー・ドラゴン！！！」

場と墓地の宝玉が輝き出し、綺麗な虹色の弧を描いた中から七つの宝玉を持つ究極の宝玉獣、究極宝玉神 レインボー・ドラゴンが現れ瞬矢に咆哮を上げたが、その瞳はバッド・エンド・クイーン・ドラゴン同様に悲しい眼をしていた。

（やはり……お前も悲しいのか）

瞬矢はレインボー・ドラゴンやバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを見てそう判断した。

「行くぞ！！レインボー・ドラゴンでホルスの黒炎竜LV8に攻撃！オーバー・ザ・レインボー！！！」

レインボー・ドラゴン（ATK4000）が放った虹色のエネルギーがホルスの黒炎竜LV8を襲い、ドラゴンとしての格の違いを見せられたホルスは破壊された。

「ぐっ……」

瞬矢LP4700 3700

「まだだ。サファイア・ペガサスで直接攻撃！サファイア・トルネード！！！」

サファイア・ペガサスの鋭い角が瞬矢の左肩を突き刺した。

「ぐああああああああああああああ！！！」

無論これは闇のゲームのため瞬矢は実際になりの量の血を流していた。

瞬矢LP3700 1900

「これで終わりだ！！バッド・エンド・クイーン・ドラゴンで直接攻撃！！！」

「ぐっ………畏発動・ガード・ブロック・ダメージを0にし一枚……ドローする……」

瞬矢は朦朧とする意識の中畏を発動し、このターンの敗北を防いだ。

「ちっ、しづとい。ターンエンドだ。カウンター・ジエムの効果により場の全ての宝玉獣が破壊される」

全ての宝玉獣は破壊されサファイア・ペガサスだけが魔法・畏ゾーンに宝玉として残った。

憂司LP5500

場：究極宝玉神 レインボー・ドラゴン（ATK4000）

バッド・エンド・クイーン・ドラゴン（ATK1900）



宝玉獣 サファイア・ペガサス（永続魔法扱い）

### 客席

「……翔夜さん……あれってソリッドビジョンじゃないんですか？」

「……これが闇のゲーム……モンスターが実体化してダメージが実際にくる決闘。今瞬矢さんは命懸けで戦ってるんですよ……」

「そんな！？早く止めさせないと……」

「駄目です。この大会に瞬矢さんはこんな決闘があることを覚悟して来たんです。止めさせないで下さい！」

「そんな……でも瞬矢さんが……」

「信じて下さい！俺が尊敬している瞬矢さんはこんなところで死ぬような人ではありません。見守っていて下さい」

翔夜はそう言ったがその表情は悲しげで四つ葉以上に心配しているように見えた。

「……分かりました……でも！」

四つ葉は客席から身を乗り出した。

「・・・瞬矢さん！頑張ってくださいーい！絶対負けないうでございーい！！！！瞬矢さーいーいん」

四つ葉は大声で瞬矢を応援し始めた。

「（・・・この声は・・・四つ・・・葉？）  
・・・まだ・・・俺は・・・死ねない！！！」

瞬矢は意識が朦朧としていたが、四つ葉の声を聞き再び闘志を燃やした。

「それでいい。さっさとドローしろ。貴様のターンだ！」

「（ありがとう四つ葉・・・）  
俺のターン、ドロー！！！」

瞬矢は四つ葉に心の中で礼を言い、決闘を再開した。

「サイバー・ドラゴンを守備表示で特殊召喚。さらにプロト・サイバー・ドラゴンを召喚」

「またそいつらか。今更召喚したところで何になる！？」

「俺の勝利のためだ。魔法カード、オーバード・フュージョン発動！！自分の場と墓地からモンスターを除外し、闇属性、機械族

の融合モンスターを特殊召喚する！俺が除外するのは機械族モンスター八体！！」

「八体の機械族を除外だと!?!」

瞬矢は場と墓地の

サイバー・ドラゴン×2

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ

プロト・サイバー・ドラゴン×2

サイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールを一体ずつを除外した。

「・・・現れよ、力を求めた合成獣、キメラテック・オーバー・ドラゴン！！！」

全ての機械族モンスターが異次元に飛ばされ、その中から首が八つある、キメラテック・フォートレス・ドラゴンと対を為すモンスター、キメラテック・オーバー・ドラゴンが凶々しいオーラを放ちながら場に舞い降りた。

「なっ、何だこのモンスターは!?!」

「ずっと昔に死滅したはずの表サイバー流のカードだ。キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は素材にしたモンスターの数×800ポイント。よって攻撃力は6400だ!!!!」

キメラテック・オーバー・ドラゴン

ATK? 6400

「馬鹿な!?!?・・・だがどちらのモンスターに攻撃してもまだライフは残る」

「キメラテックは融合素材にしたモンスターの数だけ相手モンスターに攻撃出来る!!!」

「なっ!?!? そんな…… 馬鹿な!?!?」

「これで終わりだ!!! キメラテック・オーバー・ドラゴンでレインボー・ドラゴンとバッド・エンド・クイーン・ドラゴンに連続攻撃!!! エヴォリューション・レザルトバーストオオオ!!!」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの全ての首から放たれたエネルギーがレインボー・ドラゴンとバッド・エンド・クイーン・ドラゴンを飲み込み、決闘に終止符を打った。

「ぐああああああああっっ!!!」

憂司LP5500 0

(勝つ……た)

瞬矢がそう思った瞬間に瞬矢と憂司はお互いに力尽き、決闘場に倒れ込んだのだった。

**激突！ 究極の破壊竜VS古の宝玉神（後書き）**

次回、決闘終了と同時に倒れた二人は……

次回も遊戯王・真相の果て・をよろしくお願いします。

**運命の出会い！ 瞬矢と翔夜（前書き）**

今回は番外編みたいな感じですよ。瞬矢と翔夜の出会いを書きました。

それではお楽しみ下さい。

## 運命の出会い！ 瞬矢と翔夜

- 決闘終了後

瞬矢と憂司は病院へ運ばれ、治療を受けていた。瞬矢の左肩はサファリア・ペガサスの攻撃によって大量に出血していたが傷自体はそれほど深くなく、数日安静にしていれば退院出来る位だった。憂司は陰達の洗脳は解けたようだったがかなりの栄養失調で普通の人間ならば倒れていてもおかしくない状態だった。

瞬矢は病院のベッドに倒れてから一度も目を覚まさないまま寝かされていた。

二年前

瞬矢はサイバー流道場が無くなった後、太平洋の孤島にあるデュエル・アカデミア本校に在籍していた。しかし……

「おい、あいつ今こつち睨んでたぞ」

「本当に不気味だよなあ……………もう行こうぜ」

事件以来、瞬矢はアカデミアの誰にも心を開かずそのせいで他の生徒から気味悪がられていた。月一の実技も未だに負けなしということもあり瞬矢はどんどん孤立していった。

「……………この学園にはいないよ……………ミツ姉や総兄ちゃんや……………父さんみたいに強い決闘者……………」  
あの頃に戻りたい……………」

皆が帰った教室で夜空を眺めていた瞬矢が自分の本音を呟いた時だった。

「いつですか？戻りたい時って？」

突然教室に入ってきたオベリスク・ブルーの制服を着て、髪を茶色に染めた端正な顔立ちをした少年が瞬矢に話しかけてきた。

（……………何だ、こいつは？）

「そう睨まないで下さいよ。僕は遊城 翔夜【ゆうき しょうや】、オベリスク・ブルーの一年生ですよ」

遊城、その姓に瞬矢は心当たりがあった。

「……………まさか遊城十代の……………」



「へえ〜。やっぱり決闘者ですねえ。その通り、僕は遊城十代の子孫です」

「伝説の決闘者の子孫が俺に何の用だ？俺も暇では無いんだよ」

「単刀直入に言います。瞬矢先輩、僕と決闘してください！」

「ふざけるな！暇じゃないと言ったはずだ。さっさと消えろ！！」

瞬矢は荷物をまとめ、翔夜を無視して寮に戻ろうとした。

「やっぱり無理か……………ま、いいや。明日を楽しみにしてくださいね！」

そう言っつて翔夜は瞬矢よりも早く帰って行った。

（遊城十代の子孫か……………明日を楽しみにしとけとはどういう意味だ？）

瞬矢は翔夜の言った事を不審に思いながらも自分の部屋があるオベリスク・ブルーの寮へと戻って行った。

この日は月一の実技テストが行われ、実技担当の三上教諭の監督の下、全校生徒が決闘場に集まり成績の悪い生徒から決闘が開始されていた。

(…次は俺か……………)

瞬矢の順番が来たその時だった。

「……………全校生徒に次ぐ。次の決闘は本人達の希望により、三年生実技トップの須崎瞬矢VS一年生実技トップの遊城翔夜の決闘とする」

「なっ!?!」

「それじゃ先輩、お手柔らかにお願いします!」

気がつけば瞬矢の横に翔夜が立っていた。

「……………お前が言った事はこういう事か?」

「はい!?!いや〜大変でしたよ。実技決闘の決闘願を偽造するの」

「……………お前、そこまでして俺と決闘したいか?」

「当たり前じゃないですか。強い人と決闘したがるのは決闘者の性ですよ」

「……………まあいい、どうせ勝つのは俺だ」

「負けませんよ。一年トップの実力を舐めないで下さい!」

そう言つて二人は決闘場に入り、お互いに向かい合った。

「じゃあいいですね？」

「……行くぞー!!」

「決闘!!」

この当時瞬矢はすでに宝玉獣のデッキを中等部にいた憂司に譲り、あの日の事件を思い出したくないという理由でサイバー流デッキを使用していなかった。

したがって瞬矢はアカデミア時代に第三のデッキを使用し、連勝を繰り返していた。

「俺の先攻、ドロー。モンスターをセット、カードを二枚伏せてターンエンド」

瞬矢LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「僕のターン。相手の場にのみモンスターが存在するので手札のバイス・ドラゴンを攻守を半分にして特殊召喚。さらにチューナーモンスター、トラスト・ガーディアンを召喚！」

翔夜の場に二体のモンスターが並び瞬矢を威嚇した。

「シンクロ召喚狙いか。何を出す気だ？」

「今からお見せしますよ。レベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング!!  
闇を支配する古の竜よ。今こそその力を世界に示せ!!シンクロ召喚!駆け上げれ、ダーク・エンド・ドラゴン!!!」

辺り一面を闇が覆いその中から漆黒の翼を持った竜、ダークエンド・ドラゴン(ATK2600)が現れた。

(これがダークエンド………初めて見たな)

「ダークエンドのモンスター効果。攻撃力を500ポイント下げることです相手モンスター一体を墓地に送る。裏守備モンスターを墓地に送ります!ダーク・フォッグ!」

ダークエンド・ドラゴン

ATK2600 2100

ダークエンド・ドラゴンは口から霧のようなブレスを吐き、瞬矢の裏側守備モンスターを墓地へと葬った。

「墓地に送られたクリッターの効果。デッキから攻撃力1500以下のモンスター、クイック・シンクロンを手札に加える」

「だがモンスターはいない!ダークエンド・ドラゴンで直接攻撃!  
!ダークネス・バースト!!!」

闇のエネルギーがダークエンドに溜められ、そのまま瞬矢目掛けて発射された。

「畏発動、魔法の筒。攻撃を無効にしその攻撃力分ダメージを与え

る！」

ダークエンドの攻撃は魔法の筒により翔夜に跳ね返りダメージを受ける……筈だった。

「チエーンして手札のハネワタの効果発動！このカードを手札から捨て、このターン受ける効果ダメージを0にします！！」

翔夜の前にハネワタが現れ、魔法の筒のダメージを掻き消した。

（ちゃんと俺の罠を読み、対策を考えていたのか……さすが一年のトップだ）

「カードを一枚伏せターン終了」

翔夜LP8000

場：ダークエンド・ドラゴン（ATK2100）

伏せカード一枚

「（何だか……久しぶりだなこの感覚）

俺の……ターン……！」

瞬矢は自分でも気づかない内に心から決闘を楽しみ、少なからず翔夜の實力を認めるのであった。

運命の出会い！ 瞬矢と翔夜（後書き）

次回、瞬矢VS翔夜の決闘の決着は……

新EDの遊星とアキを見て『スタッフありがとう（T|T）』と思  
ったのは俺だけですか？……

できれば感想をお願い致します（^|^-）

次回もよろしくお願いします。

## 大切なもの（前書き）

自分的には今回結構長くなりました。

瞬矢VS翔夜、アカデミア時代勝利したのは・・・

それではお楽しみ下さい。

## 大切なもの

「俺のターン！！手札のボルト・ヘッジホッグを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚。更に墓地に送ったボルト・ヘッジホッグの効果発動！俺の場にチューナーモンスターがいる時墓地から特殊召喚出来る。ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

瞬矢の場にピストルを携えたチューナーモンスター、クイック・シンクロン（ATK700）と機械で構築されたかわいらしいモンスター、ボルト・ヘッジホッグ（DEF800）が現れた。

「流石です先輩。一体どんなシンクロモンスターを出すんですか？」

「今から見せてやるよ！レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！！

主の危機に炎の戦士が立ち塞がる。その志を貫け！シンクロ召喚！叩き潰せ、ニトロ・ウォリアー！！」

緑色をした悪魔のような戦士族のモンスター、ニトロ・ウォリアー（ATK2800）が瞬矢の場に降臨した。

「出ましたね。先輩の主力モンスター。強そうだなあ」

「悠長な事言ってる場合じゃないと思うぞ。俺は装備魔法ジャンク・アタックを発動！ニトロ・ウォリアーに装備する。バトルだ！！ニトロ・ウォリアーでダークエンド・ドラゴンを攻撃！ニトロ・ウォリアーの効果発動。自分が魔法カードを発動したターンに一度ダメージ計算時のみ攻撃力を1000ポイントアップする」



二トロ・ウォリアー  
ATK2800 3800

(やばっ……油断しすぎたかな?……)

「行けっ、二トロ・ウォリアー!!ダイナマイト・ナックル!!」

二トロ・ウォリアーの拳によりダーク・エンド・ドラゴン(ATK2100)はその体を貫かれ破壊されたかに見えた。

翔夜LP8000 6300

「ぐっ……」

「装備されたジャンク・アタックの効果。装備モンスターが破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える!!」

「シンクロ素材にしたトラスト・ガーディアンの効果、一ターンに一度、攻撃力を400ポイント下げること戦闘では破壊されない!!」

「(ダークエンドの破壊を防いだ……)  
ターンエンドだ」

瞬矢LP8000

場：二トロ・ウォリアー(ATK2800)  
ジャンク・アタック(二トロ・ウォリアーに装備中)  
伏せカード一枚

「やっぱり甘く見すぎたかな？・・・僕のターン。ダークエンド・ドラゴンの効果発動！攻守を500ポイント下げること相手をモンスター一体を墓地に送る！二トロ・ウォリアーを墓地に送る！  
！ダーク・フォッグ！！」

ダークエンド・ドラゴンが放ったプレスが二トロ・ウォリアーを闇の霧で包み込み、そのまま墓地へと葬った。

「（こいつ・・・強い！）」

・・・久しぶりだよ・・・決闘を楽しんだと思ったのは」

瞬矢は自分のモンスターが破壊されたというのに笑っていた。

「瞬矢先輩・・・この決闘、久々に楽しめましたがこのターンで終わりです！！」

「面白い、見せてみる！！お前の本気の実力を！！」

「そのつもりです！！僕はカードを一枚伏せてチューナーモンスター、ドレッド・ドラゴンを召喚。レベル8のダークエンド・ドラゴンにレベル2のドレッド・ドラゴンをチューニング！！」

地獄からの猛火により、三ツ首の竜王が今目覚める！！シンクロ召喚！燃やし尽くせ、トライデント・ドラギオン！！」

トライデント・ドラギオン（ATK3000）は三つある頭からそれぞれ炎を吐きながら場に君臨し、瞬矢に対し咆哮を上げた。

「トライデント・ドラギオンのシンクロ召喚時、僕の場のカードを二枚まで破壊出来る！二枚の伏せカードを破壊！！」

更にこの効果で破壊したカード一枚につき一回このカードはこのターンのみ追加攻撃出来る！！」

「くっ……それがお前の切り札か？」

「その通りです。アカデミアに来て初めてですよ、こいつを出したのは。」

行きます！トライデント・ドラギオンで三連続攻撃！トリプルバーニング・フレアアアア！！！」

三つの口から放出された炎が瞬矢に直撃し、合計で9000ポイントのダメージを与えたかに思えた。

「ぐっ……」

瞬矢LP8000 2000

「バカな！？……何でライフが！？……」

「俺は最後の攻撃の時にこの畏れカード、ガード・ブロックを発動してダメージを0にして一枚ドロウしたんだよ」

「くっ……流石瞬矢先輩。カードを一枚伏せてターンエンド」

翔夜LP6300

場：トライデント・ドラギオン（ATK3000）  
伏せカード一枚

翔夜が伏せたカードは究極の攻撃反応型罠、聖なるバリア ミラー  
フォース であり翔夜は安心してターンを終了した。

「俺のターン！！魔法カード、おろかな埋葬発動。デッキからチュ  
ーニング・サポーターを墓地に送る。チューナーモンスター、ジャ  
ンク・シンクロン召喚！！ジャンク・シンクロンが召喚に成功した  
事により墓地のレベル2以下のモンスター、チューニング・サポ  
ーターを効果を無効にして特殊召喚！

この瞬間、速攻魔法地獄の暴走召喚発動！デッキからチューニング・  
サポーターを二体特殊召喚する！！」

「くっ……シンクロモンスターはエクストラデッキだから特  
殊召喚出来ないか……」

「行くぞ！チューニング・サポーターはレベル1だがシンクロ素材  
とする時、レベルを2として扱う事が出来る。チューニング・サポ  
ーター三体にレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！！  
自らの使命が来たりし時、究極の破壊神が蘇る！！シンクロ召喚！  
粉碎せよ、ジャンク・デストロイヤー！！」

「ジャンク・デストロイヤー！？」

「ジャンク・デストロイヤーのシンクロ召喚時素材にしたチューナ  
ー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを破壊出来る！  
！トライデント・ドラギオンと伏せカードを破壊する！！」

ジャンク・デストロイヤー（ATK2600）の放った衝撃波によ  
り三ツ首の竜、トライデント・ドラギオンと伏せカードは破壊され  
た。

「更にチューニング・サポーターがシンクロ素材になった事で三枚ドロー!!!」

行けっ!!!ジャンク・デストロイヤー!!!デストロイ・ナックル!!!」

「ぐあああああああ!!!」

翔夜LP6300 3700

「ターンエンドだ!」

瞬矢LP2000

場：ジャンク・デストロイヤー（ATK2600）

「・・・僕の・・・ターン。モンスターをセットして・・・ターン終了」

翔夜LP3700

場：裏側守備モンスター

翔夜は自分の一番信頼していたモンスターを破壊され、ほとんど戦意を喪失していた。

「俺のターン!死者蘇生発動!お前のダークエンド・ドラゴンを特殊召喚。そして効果発動!攻守を500ポイント下げることです!そのモンスターを破壊する!ダーク・フォッグ!!!」

翔夜が伏せていたのは戦闘破壊耐性を持つモンスター、マシユマロンだったがダークエンドの効果の前には無力であった。

「とどめだ!!!ジャンク・デストロイヤーとダークエンド・ドラゴ

ンでダイレクトアタック！！ダークネス・デストロイ・ナツクル！！！！」

ダークエンドの力を受けたジャンク・デストロイヤーの拳が翔夜に直撃し、決闘に終止符を打った。

翔夜LP37000

決闘が終了した瞬間、翔夜はその場に倒れ込んだ。

「くっ……………負けた。流石だなあ。本当のデツキじゃないのにこんなに強いなんて」

「お前、知ってたのか？サイバー流の事を？」

「これでも遊城十代の子孫ですよ。色々な情報が手に入ります」

「そうか……………お前強いな。久しぶりに追い詰められたよ」

「僕の方こそ。アカデミアに来て初めて敗北しましたよ」

「……………そうか」

「あゝあ。傷ついちゃったなあ。ドロパン三つで許してあげますよ」

「何で勝った俺が下級生に奢るんだよ！？」

「いいじゃないですか。かわいい後輩のためですよ」

「俺だって財布は厳しいんだよ、少しは先輩の事を敬え！」

「ハハハハッ。何か可笑しいや！」

「・・・おかしな奴だな、お前も」

二人の言い合いによりお互いに自然と笑顔がこぼれていた。

「何か結構気が合いますね、僕達。もう割り勘でもいいからどっか食べに行きませんか？」

「いいな、俺も久しぶりだよ。こんなに笑った日は」

「じゃ今日の5時に寮の前に集合でどうです？」

「いいだろう。遅刻するなよ」

「そちらこそ」

「須崎瞬矢、遊城翔夜。決闘は終了したんだから早くこっちに来て整列しろ！」

「あつ、やべ！」

「今行きます」

二人は他の生徒が整列しているのに気づかず今まで話していた。

「じゃ、時間通りに」

「ああ。(・・・懐かしいな。二年前までこんな風に笑ってたんだっけかな)」

そう思いながら瞬矢は三上教諭の所へと走って行った。

それから二人は授業以外の行動を共に過ごし、親友と言われてもおかしくない間柄になった。

その年の卒業式の日、翔夜と瞬矢はとある約束をして瞬矢はプロの舞台へと上がって行った。

- - 現在 - -

「うっ……」

瞬矢が目を覚ますと深夜の病院のベッドの上だった。

(懐かしい夢だったな……………ん?)

瞬矢が横を見ると看病していたのか、四つ葉が椅子の上で寝ていた。

(ずっといてくれたのか……………やはり奴の言う通り……………俺は死んでは駄目だな。)



今も昔も隣にいる掛け替えのない人達を思いながら瞬矢はもう一度眠りについたのであった。

## 大切なもの（後書き）

次回、IDGP一回戦の第三試合に陰達が登場！  
果たしてその実力は・・・

次回もよろしくお願いします。

謎多き事と使い手の格差・・・1（前書き）

最近、更新速度が遅くなってきました蒼空です（＾|＾；）

今回は短めです。陰達VS氷川のドラゴン対決の行方は……………

それではお楽しみ下さい。

謎多き夢と使い手の格差 - 1

瞬矢は三年前の事件を思い出し出していた。未だに頭から離れないミツバや総司の遺体。陰達の非情な行動。それらが一つ一つ鮮明に蘇ってくるのだがどうもおかしい。

道場の地下で目覚める直前の記憶が無い。自分が何をしていたのか  
が思い出せない。

(覚えていない?・・・いや、違う。確かあの日は父さんと話を  
して・・・その後は・・・)

「ああああああああっ!!!!!!・・・はあっ・・・はあっ・・・夢・・・  
か。」

瞬矢は三年前を夢の中で思い出していたが直前の記憶が無い。それは前々から分かっていたことなのだが今はなぜか思い出してはいけないように思えた。

「わっ!?!?.....だっ大丈夫ですか!?!?」

すぐ側にいた四つ葉はいきなり飛び起きた瞬矢に驚いた。

「ああ.....ちよっと悪い夢を見てた」

「相当うなされてましたよ。汗もかいてますし」

「・・・大丈夫だ。それより今日の試合は？」

「あと二時間ぐらいで第三試合が始まりますけど……………まさか行くつもりですか？」

「今日は陰達や翔夜が決闘するんだ。生で見ない手は無い。左肩なら大丈夫。今日は決闘しないし」

「……………分かりました。痛くなったら言ってくださいよ」

「ありがとう。そういえば昨日の応援……………」

瞬矢は昨日憂司と決闘していた時……………意識が朦朧としていた時の事を思い出した。

「／／…あつ、あれは瞬矢さんが危険な決闘をしていると聞いたので……………瞬矢さんがどこか遠くに行っちゃう気がして気がついたら応援してました……………」

「／／…ありがとう。おかげで勝つことが出来たよ。それで…憂司君は？」

「あの子は今も意識が戻らないまま入院しています。決闘の傷はたいたことないんですが極度の栄養失調らしくて」

「そうか……………まあ意識が戻るのを待てばいいか。じゃ行くか」

「はい！」

こうして二人は病院から抜け出しタクシーを拾って荷物のあるホテルへ行き身支度を整えてからエンペリアルドームに向かった。

### 決闘10分前

「やった。間に合った!!！」

「全く……化粧と髪セットするのに一時間も掛けるから」

「いいじゃないですか……間に合ったんですし！」

「……………そうだね。」

(やっぱり俺、この娘に弱いわ……………)」

「あれ、瞬矢先輩？」

「おっ、翔夜か」

「いいんですか？病院にいらなくて？」

「大丈夫だよこれくらい。ところで決闘は？」

「……今丁度始まるところです」

決闘場ではすでに陰達と氷川が対峙していた。客席に瞬矢の姿を見つけた瞬間、陰達はクスリと笑った。

（やっと来たね。まあ僕の決闘を見て少しは強くなってくれればいいけど）

「おい小僧！準備はいいな？」

「当たり前だよ。僕は君の方を待ってたつもりなんだけどな」

「その減らず口黙らせてやる。行くぞ！！」

「「決闘！！」」

「僕の先攻、ドロー。モンスターをセットしカードを二枚伏せてターンエンド」

陰達LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「俺のターン！！俺はスピア・ドラゴンを召喚。セットモンスターに攻撃！スピア・ハリケーン！！」

スピア・ドラゴン（ATK1900）は口から衝撃波を放ち陰達の

裏守備モンスター、ボルト・ヘッジホッグ（DEF800）を体中切り刻んだ。

「貫通効果持ちか………フフッ………」

陰達LP8000 6900

「スピア・ドラゴンは攻撃した時、守備表示になる。カードを伏せターンエンド。」

氷川LP8000

場：スピア・ドラゴン（DEF0）

伏せカード一枚

「僕のターン。相手の場にのみモンスターが存在することにより、手札のサイバー・ドラゴンを特殊召喚！」

陰達のフィールドに、現在では瞬矢しか持っていないはずのモンスターであるサイバー・ドラゴンの色違い、漆黒のサイバー・ドラゴンが現れた。

「サイバー・ドラゴンだと？須崎しか所持してないと聞くがなぜ貴様が？」

「君に言う訳ないだろう。今から絶望を味わう者にね………」



「漆黒のサイバー・ドラゴンだと!?!」

「そんな・・・サイバー・ドラゴンで今では瞬矢先輩しか持って  
いないんじゃない?」

「そのはずだが……………なぜ奴が?」

「あゝあ。あんなカードあるんなら昔のデッキにバイス・ドラゴン  
の代わりに入れたのに……………」

「……………そういう問題じゃないと思いますけど……………」

「絶望か……………面白い。見せてみる、貴様のカードを!?!」

「言われなくとも。チューナーモンスター、デルタフライを召喚。  
レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル3のデルタフライをチュー  
ニング!

大いなる星々が輝く時、古より伝承されし伝説の竜が蘇る。聖なる  
光を放て!シンクロ召喚!舞い上がれ、スターダスト・ドラゴン!  
!?!」

「何だと!?!」

陰達の場に、現在では伝説でしかない白銀の翼を纏った美麗なモン  
スター、スターダスト・ドラゴン（ATK2500）が姿を現し会  
場の雰囲気が一瞬にして変わっていくのだった。

謎多き夢と使い手の格差 - 1 (後書き)

次回、スターダストを召喚し、猛攻をかける陰達に対し氷川は……

……

何とか早めに更新したいなとは思いますがf^\_^ ;

それでは次回もお楽しみに(^o^)/

謎多き夢と使い手の格差・・・2（前書き）

やっと更新出来ました〇（＾－＾）〇

・ スターダスト・ドラゴンを出され、追い詰められた氷川は・・・

それではお楽しみ下さい！

謎多き夢と使い手の格差 - 2

「バカな!?!..... スターダスト・ドラゴンだと!?!」

「どうだい?今も昔も色褪せることのない我が僕は?」

「なぜ貴様が伝説の決闘者、不動遊星の..... シグナーの竜を持っている!?!」

「さっきも言っただろう。お前ごときに言う訳がない」

「綺麗.....」

「スターダスト・ドラゴン!?!なぜあいつが?」

「俺にも分からない。だが奴は少なくともレッド・デーモンズ・ドラゴンも持っている」

「レッド・デーモンズも!?!不動遊星やジャック・アトラスの代名詞とも言えるドラゴンをなぜあんな子供が?」

「分からない。だけどあのスターダスト.....辛そうだ.....」

「行くよ！スターダスト・ドラゴンでスピア・ドラゴンを攻撃！シユーティング・ソニック！！！！」

スターダスト・ドラゴン（ATK2500）が放った白い光のエネルギーが防御体制をとっていたスピア・ドラゴン（DEF0）に直撃し、為す術なく破壊された。

「僕はこれで終わりにするよ。君のターンだ」

陰達LP6900

場：スターダスト・ドラゴン（ATK2500）

伏せカード二枚

「くっ……俺のターン！俺はバイス・ドラゴンを攻守を半分にして特殊召喚！更にバイス・ドラゴンを除外！現れよ！シリーズ最強の竜！！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！！」

氷川場に真紅眼の黒竜の最終進化形態である体を機械化されたモンスター、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（ATK2800）が降臨した。

「へえ〜。レッドアイズか。なかなかレトロなカードを使うんだね」

「まだまだ！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンのモンスター効果発動！１ターンに一度、自分の手札又は墓地のドラゴン族モンスターを特殊召喚する！俺は手札より真紅眼の黒竜を特殊召喚！」

全てのレッドアイズシリーズのモンスターのベースとなる漆黒の翼に特徴的な紅い眼をしたドラゴン、真紅眼の黒竜（ATK2400）が場に君臨した。

「真紅眼の黒竜か……………デュエルモンスターズができて間もない頃、プレミア価格で数十万円したモンスター。そのレートは上がり続け今では1000万はくだらないと言われているカード。なぜ君がそんなレッドアイズシリーズを持っているんだい？」

「……………こいつは俺の家、氷川家に代々伝わってきたカード達だ。親父も祖父もプロ決闘者でありこいつを使っていた。それが俺に譲られた。それだけだ。」

そして俺は真紅眼と共に氷川家の名誉の為に小僧、貴様を倒す！！」

「何だ……………失望したよ」

「何っ!?!」

陰達は本当に落胆した表情で氷川を見ていた。

「所詮親の七光りでプロになってもお前のような奴は真の決闘者の境地には辿り着けない。絶対に……」

「フン、そんな台詞は俺に勝利してからほざけ！行くぞ！！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでスターダスト・ドラゴンを攻撃！ダークネス・メタル・フレイム！！」

「畏発動、バスター・モード！スターダストをリリース、デッキからスターダスト・ドラゴン/バスターを特殊召喚するよ」

スターダストは粒子状になり新たに再構成されスターダスト・ドラゴン/バスター（ATK3000）へと進化した。

「くっ。モンスターをセットしターンエンドだ」

氷川LP8000

場：レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン（ATK2800）

真紅眼の黒竜（ATK2400）

裏側守備モンスター

伏せカード一枚

「僕のターン。バトルだ！スターダストでレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを攻撃。アサルト・ソニック・バーン！！」

スターダストドラゴン/バスターの放ったプレスによりレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンはその機械の体を粉々にされた。そして……………

「ぐあああああつー！！」

粉々になった機械の破片が氷川に直撃し、体中を激痛が走った。



氷川LP8000 7800

「くっ…………この痛みは…………これが昨日須崎が行っていた決闘か……………」

「その通りだ。この決闘盤、千年盤【ミレニアム・ディスク】により決闘が始まった時から闇のゲームが始まっていたんだよ」

「……だが、貴様は先程ダメージを受けた筈……なぜ痛みが？」

「あれ位の痛みで声を上げる訳ないだろう。君が大袈裟過ぎるんだよ」

（くっ…………何なんだ……何なんだこいつは…………）

「僕はカードを二枚伏せターンエンド」

陰達LP6900

場：スターダスト・ドラゴンノバスター（ATK3000）  
伏せカード二枚

（何なんだ……ガキと思って甘く見ていたが奴の目……同じ人間とは思えない……ましてやあんな16歳の少年に……この俺が恐怖を抱いているだと……）

氷川は自分よりかなり年下の、年端もいかない少年に恐怖を感じ、自分でも知らない内に体中が奮え、本能的に目の前にいる少年に危険を感じた氷川は……

・ 自分のデッキにそつと手を置き・・・サレンダーしたのだった・・・

謎多き夢と使い手の格差 - 2 (後書き)

次回、意外な形で決着が着いた第三試合。そして始まる第四試合の  
行方は・・・

次回も遊戯王 - 真相の果て - をよろしくお願いします (^ ^ )ノ

四つ葉への想い・・・（前書き）

氷川のサレンダーにより幕を閉じた一回戦第三試合。

放たれていた陰達の殺気により四つ葉は・・・・・・・・・・

それではお楽しみ下さい。

## 四つ葉への想い・・・

氷川は自分のしたことが未だに理解できなかった。ただ一つ分かっていること、それは自分がサレンダーしたことであった。なぜサレンダーしたか、それは氷川自身よく言葉で表せない。自分の決闘者としての本能が陰達に危険を感じ、サレンダーすることを強制させた……………そんな感覚であった。

「やはり……………所詮この程度か……………君のように何もかもが最初からあつた人間など精神の限界が高が知れてるんだよ……………  
……………絶望を味わえ」

陰達は冷淡な口調でそう告げた後、氷川に背を向け決闘場から去るうとしていた。

「……………何なんだ？……………何なんだよお前は!？」

氷川は陰達に恐怖を感じながらも恐る恐る聞いた。

「何なんだって言われてもねえ……………言うなれば……………『破滅の導き手』……………かな?」

そう言い残し陰達は駆将のいる客席へと戻って行った。

「瞬矢先輩……あいつは……本当に人ですか？奴の目……  
・あれは完全に狂っている化け物じみた目。奴のプレッシャー……  
・人間の為せる技じゃないですよ……」

翔夜は陰達の尋常ではない殺気を感じ、顔を青ざめ膝が震えていた。

「まさかここまでとは……だがあのスターダスト……  
……悲しい目をしていた。俺はあのカード達を救う」

「………そうですか。でもその役目は僕が準決勝で引き受けま  
す……」

そう言いながら翔夜は決闘盤を腕に取り付け、その場に立ち上がった。

「お前………」

「じゃ、僕はこれから第四試合やってきますから、先輩は彼女をな  
んとかしててください」

翔夜は瞬矢にそう言って決闘場へと向かった。

「（彼女……………？）  
……………四つ葉大じょ……………」

瞬矢がふと横を見ると四つ葉はさつきと同じく座席に座っていたが  
……………全身が震え唇は真つ青になり、目は虚ろで人の生きて  
いる姿とは到底言えない状態だった。

「四つ葉！！しっかりしろ！！四つ葉！！！！」

瞬矢が四つ葉の名を呼びながら肩を揺さぶったが四つ葉は何の反応も示さなかった。

この時瞬矢は気づいていなかったが会場内では四つ葉のように体中の震えが止まらなかつたり、泣きわめく子供や過呼吸になる者がいたり中には嘔吐する観客もいた。

「（くっ……………昨日三邪神に降雷皇のプレッシャー、更に今日陰達の殺気に当てられた影響か……………）  
おい！！しっかりしろ！！四つ葉！！四つ葉！！！！」

何度叫んでも四つ葉の状態は変わらなかった。

この時瞬矢の脳裏にある映像が浮かんだ。三年前、陰達に殺され自分が最期を看取り自分が恋心を抱いていた女性……………藤堂ミツバ。彼女が亡くなった時の顔は今でも忘れられない。瞬矢はミツバが亡くなった時と今の状況を重ね……………もう何も失いたくない……………そんな感情が込み上げた。

「（俺はもう……何も!!）  
四つ葉!!!」

瞬矢は四つ葉を自分の所へ強く抱き寄せた。

「四つ葉!!俺の声が聞こえないのか!?四つ葉!!俺はもう……  
……これ以上大切な人を失いたくない!!四つ葉!!四つ葉!!」

（……この声……瞬矢さん?……何だろう?……  
……優しい……暖かい感じがする。これは瞬矢さんの?……）

「うっ……瞬矢……さん?」

「四つ葉!?大丈夫か?」

四つ葉「あれ?……私今まで何を?」

「陰達の殺気を受けてたんだよ。死ぬのかと思った。本当に……  
良かった」

「そうだったんですか……それで、あの……この状況  
は?」



四つ葉は瞬矢に抱きしめられていることに気づき、瞬矢は抱きしめていることに気づいた。

「あっ……っ……ごめん」

瞬矢は抱きしめている腕をほごうとした……が、

「……四つ葉？」

瞬矢がほごうとした腕を四つ葉が掴んでいた。

「……もう少し……もう少しだけ……このままでいて下さい……」

「……四つ……葉……」

瞬矢はときかけていた腕を元に戻し、再び四つ葉を抱きしめるのだった……

(……やっとか。これで瞬矢も自害するという考えを完全に無くしただろう。)

瞬矢には……生きてもらわなければな……あいつの為に)

以前瞬矢と四つ葉に会ったフードを被った謎の男は、瞬矢と四つ葉のやり取りを見届けていたのだった。

四つ葉への想い・・・（後書き）

次回、ついに開始される一回戦第四試合。

アカデミア生徒枠で出場した翔夜が使うデッキは・・・

今後の執筆の参考にしたい為、出来れば率直な感想をお聞かせ下さい。  
f ^ | ^ ;

それでは次回もお楽しみ下さい。( ^ | ^ ) v

**宿命のHERO対決！ 勝者と敗者を分かつものとは……1（前書き）**

更新が遅れてしまい申し訳ありません（-\_-#）

タイトルから分かる通りHERO対決ですが使用者は……

それではお楽しみ下さい（^o^）／

宿命のHERO対決！ 勝者と敗者を分かつものとは・・・1

「……もう大丈夫か？」

「はい！すいません、わがまま言ってしまっ

「いや、大丈夫だよ。君が無事で良かった……本当に」

この会話の間、二人は一度も目を合わせなかった。無理も無い。お互いに気持ちを伝えてもないうちに抱きしめ合ってしまったのだから。二人とも純情だからというのもあるが。

記憶喪失の四つ葉は勿論、瞬矢も親しかった女性はミツバ位で兩人共に異性に免疫が無かった。

「……あっ、そろそろ翔夜の決闘始まるから見ないと……」

「あっ、はい                    そうですね                    」

結局そんな会話しか出来ない二人であった。

――決闘場――

「全く、貴様もくじ運が悪かったな。俺と一回戦で当たるとは」

「くじ運が悪いのは君の方だよ。僕は決勝で瞬矢先輩と当たる予定になってるからね。それに年上と会話するときは敬語を使えよ。常識だろ？」

「フン、今から負ける奴に敬語など使うか！強ければ年齢も称号も関係無い！！」

「強気だね。まあいいや、始めようか」

「行くぞ！」

「決闘！！」

「俺の先攻、ドロ―！俺はモンスターをセット、カードを一枚伏せてターン終了だ！」

駆将LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード一枚

「僕のターン。僕はE・HERO エアーマンを召喚！」

「けっ、やはり遊城十代の子孫はE・HEROか？」

「それはどうかな？エアーマンの効果発動。デッキからHEROと名のつくモンスターを手札に加える。」

「僕が手札に加えるのはこいつ……………D・HERO ディアボリックガイを手札に加える」

「D・HEROだと!？」

「駆将は翔夜がD・HEROを使うのに驚きを隠せなかった。」

「更に魔法カード、デステニー・ドロー発動!ディアボリックガイを墓地に送りデッキから二枚ドローする!」

「ほお。翔夜の奴D・HEROを……………」

「?……………何ですか……………そのD・HEROって?」

「……………かつてプロ決闘者だったエド・フェニックスが使用したモンスター群で、彼一人だけが所持していたカード。デステニー、つまり

り運命を司るHEROでありその効果も未来に効果を及ぼすものが多い。

確かあのデッキは翔夜が去年デュエルアカデミア内での大会で優勝した記念に贈られたレプリカのデッキだって聞いているけど………  
………翔夜の事だ、色々と改良してかなり強くなってるはずだよ。」

「えっ………デュエルアカデミアって倍率が半端じゃない所ですよね………翔夜さんそこでトップだったんですか!？」

「……まあ俺が卒業した後だからだしね。公式決闘じゃあいつには一回も負けてないよ」

「……やっぱり……瞬矢さんすごいです!!」

「／／………ありがとう

(無自覚なのだけれども上目遣いって………武器だな………)

「魔法カード、トレード・イン発動!手札のドレッドガイを捨て二枚ドロ!。バトルだ!エアーマンで攻撃!ウイング・スラッシュ!」

E・HERO エアーマン(ATK1800)が起こした突風により駆將のセットモンスターが表になり攻撃を受けたが………



「!!…そのカード…まさか…君のデッキは…」

「ご想像の通りだ。皮肉なものだな。遊城十代の子孫とHERO対決をするとは。俺の守備モンスター、E・HEROフォレストマンの守備力は2000、よって反射ダメージを…実際のダメージで喰らえ!!!」

駆将の、陰達や瞬矢が持っているのと同じ様な形状の決闘盤、千年盤はその中心から光を放ち闇のゲームが開始されようとした……  
……が……

「なっ……!?!」

いきなり翔夜の方から放たれた別の光により千年盤の光は途切れ、始まりかけていた闇のゲームは不発になり決闘場の雰囲気も変わらなかつた。

「貴様………一体何をした!?!」

「これだよ。これにより君の闇は破られたんだ」

そう言つて翔夜は首から掛けていたペンダントを手に取つて駆将に見せた。

「何だ……そのペンダントは!?!闇のゲームが破られるなど、今まで無かつたはず!?!……」

「このペンダントは今から百年以上に僕の先祖……遊城十代がこの世界とは違う異世界へ行った時に手に入れた闇のアイテム。」

千年盤のようなまがい物を使った闇のゲームは通用しないよ!」

「ちっ……まあいい。戦闘ダメージは受ける!」

「くっ……………」

翔夜LP8000 7800

「だがまだ僕のターンだ。メインフェイズ2で僕は魔法カード、オーバー・デステニー発動!墓地のレベル6のディアボリックガイのレベルの半分、レベル3以下のD・HERO ダイハードガイを特殊召喚!!」

更に墓地のディアボリックガイの効果発動!墓地のこのカードを除外してデッキから同名カードを特殊召喚する!」

「フン、雑魚が寄せ集まったところで次からの俺のE・HEROの猛攻は止められんぞ」

「…………こいつらを壁にするつもりはないよ。僕は……………三体のモンスターをリリース!!」

翔夜の場の三体のモンスターは光を放ちながら粒子状になり、その中から大きな翼を持った何かが現れた。

「三体のモンスターをリリースだと!?…………まさか!?!」

「その通りだよ。現れよ、最上級のD・HERO、D・HEROD  
グマガイ!!!」

大きな漆黒の翼を持ち巨大な刀剣を携え、悪魔の様な外見をしたモ

ンスター、D・HERO ドグマガイがその姿を現し、その眼光は  
真っすぐに対戦相手である駆将を捉えていたのであった。

**宿命のHERO対決！ 勝者と敗者を分かつものとは・・・1（後書き）**

次回、DVSEのHERO対決の行方は・・・

5D'sではWRGPが盛り上がってますが、蒼空は今でも龍亞の  
パワー・ツールが本物の竜になることに期待してます。（^| ^）  
スタッフ、龍亞にアクセルシンク口を・・・無理かな（-o-；  
）

蒼空の戯れ事でした。（-.-；）

それでは次回もお楽しみ下さい（^ ^）ノ

**宿命のHERO対決！ 勝者と敗者を分かつものとは・・・2（前書き）**

どうも、蒼空です（＾o＾）ノ

最近模試などが忙しくてなかなか更新出来ず申し訳ありません（  
- #  
）

何とか更新出来ましたのでどうぞお楽しみ下さい。（＾|＾）v

宿命のHERO対決！ 勝者と敗者を分かつものとは……2

「くっ………D・HERO ドグマガイ……確かD・HEROの中で最上級のランクに属しているモンスター。だが何故バトルフェイズ前に召喚しなかった？」

駆将は翔夜が何故わざわざドグマガイをメインフェイズ2で召喚したか理解出来なかった。

「見てれば分かるよ。カードを二枚伏せてターン終了」

翔夜LP7800

場：D・HERO ドグマガイ（ATK3400）  
伏せカード二枚

「どこまでも馬鹿にしやがって！！俺のターン、ドロー！」

「このスタンバイフェイズ、ドグマガイの効果発動！相手のライフを半分にする！ライフ・アブソリュート！！」

「バカな！？ライフ半分だと！？」

ドグマガイが体中から放ったオーラが駆将に直撃し、駆将の気力を一気に喪失させた。

「ぐあああああああああ！！！！………ライフ半分だと……ふざけんじゃねえよ………」

「貴様……絶対に許さん!!!このスタンバイフェイズにフォレストマンの効果も発動する!!!俺はデッキから融合を手札に加える。」

「……………貴様が何故ドグマガイを召喚しなかったか……………それはドグマガイの効果を実に通す為。もし俺の守備モンスターや伏せカードによりドグマガイが除去されれば貴様の場は伏せカード一枚のみ。だからまずエアーマンの攻撃で俺の様子を伺い、エアーマンが万が一破壊されてもドグマガイを召喚して俺のライフを半分にする。」

「そう考えるとまだ手札にリリースするためのモンスターを召喚する手筈が整っていた事になるな……………」

「ふ〜ん。そこまで僕の戦術を見極められるんだ。感心するよ……………陰達に洗脳されていなかったらね」

「フン、今の俺には力がある。洗脳などは関係無い!!!総てを薙ぎ倒す力さえあれば俺は十分だ!!!」

「力に溺れるなよ。いつの時代も力を求めた先にあるのは破滅だけだよ」

「黙れ!!!そんな事、貴様に言われる筋合いは無いわ!!!」

「俺は魔法カード、融合を発動!手札のワイルドマンと沼地の魔神王を融合!!!来い、E・HERO ネクロイド・シャーマン!!!」

「駆将の場に、古来から伝承されてきた祈祷師の風貌をしたモンスター

「E・HERO ネクロイド・シャーマン（ATK1900）が召喚された。」

「ネクロイド・シャーマンのモンスター効果により、貴様のドグマガイを破壊して墓地のディアボリックガイを貴様の場に特殊召喚する！！デスアンドリボン！！！」

ネクロイド・シャーマンが手にした杖がドグマガイを強制的に冥府へと送り、墓地にいたD・HERO ディアボリックガイ（ATK800）を新たに呼び戻した。

「なかなかだね。まあ大したことないけど」

「けっ、その余裕を吹き飛ばしてやる！行けっ、ネクロイド・シャーマン！ディアボリックガイに攻撃！！アドバンスド・スペル！！」

ネクロイド・シャーマンは呪文を唱え始め、その力を杖に宿し一気にディアボリックガイの体を一閃した。

「フン、この程度かい？E・HEROの実力は？」

翔夜LP7800 6700

「舐めやがって！！ターンエンドだ」

「エンドフェイズに速効魔法、終焉の焰を発動。攻守0の黒焰トクンを二体特殊召喚する」

「新たなリリース要員だと！？貴様何を……」



駆将LP8000

場：E・HERO ネクロイド・シャーマン（ATK1900）

E・HERO フォレストマン（DEF2000）

伏せカード一枚

「流石翔夜だ。あいつ、俺が卒業してからまた一段と決闘の腕を上げたみたいだ」

「そうなんですか？なんか追い込まれてる様に見えますけど……」

「いや、翔夜は恐らく次のターンにあるモンスターを出して形勢を逆転する筈……」

「？ 何なんですか？そのモンスターって？」

「見てれば分かるよ。D・HEROデッキ最強の切り札をね」

「僕のターン、ドロ！。D・HERO ダイヤモンドガイを召喚！」

全身にダイヤモンドを装着したD・HEROの一体、D・HERO  
ダイヤモンドガイ（ATK1400）が召喚された。

「ダイヤモンドガイの効果発動！デッキの一番上のカードをめくり、  
それが通常魔法ならば墓地に送って次の僕のメインフェイズに効果  
を発動する」

翔夜はデッキの一番上のカードを確認した。

「ラッキー！！トレード・インを墓地に送って次のターン発動する」

「ちっ、運のいい奴め・・・」

「行くよ、僕はこの三体をリリース！！」

「またしても三体のリリースだと！？」

先程のターンと同じく翔夜の場の三体のモンスターが粒子状になり  
ながらリリースされていき、その中からドグマガイをも超えるオー  
ラを放つモンスターが次第に姿を現していった。

「なっ・・・こいつは！？」

「今こそフィールドに君臨する最強のHEROとなれ！！降臨せよ  
！究極のD・HERO、D・HERO BLOOD！！！！」

翔夜のフィールドに、ドグマガイと同じく悪魔の様な外見で右手に  
二つ目の口があり、全身を血の様に真っ赤な色をした究極のDの力  
ード、D・HERO BLOOD（ATK1900）が召喚され、

駆将にその鋭い眼差しを向けるのだった……

**宿命のHERO対決！ 勝者と敗者を分かつものとは……2（後書き）**

次回、D・HERO BLOOD・Dを召喚され、窮地に陥る駆将は・  
・  
・  
・  
・  
・

このような小説にお気に入り登録して下さい方もいらっしやり、本  
当に感謝しております。o(^-^o

それでは次回もお楽しみ下さい(^-^)

宿命のHERO対決！勝者と敗者を分かつものとは……3（前書き）

今回は翔夜VS駆将戦の決着です。D・HEROとE・HEROの  
対決の行方は……

それではお楽しみ下さい。( ^ o ^ ) /

宿命のHERO対決！勝者と敗者を分かつものとは……3

「なっ……このモンスターは……」

駆将は翔夜が召喚したモンスター、D・HERO B100-Dに未だに感じたことの無い恐怖を感じずにいられなかった。

「これがD・HEROデッキの最強の切り札だよ。D・HERO B100-Dのモンスター効果、このカードがいる限り相手のモンスター効果は全て無効になる。

更に、1ターンに1度相手モンスター1体を装備し、そのモンスターの攻撃力の半分を得る！僕が対象とするのはE・HERO ネクロイド・シャーマン！！」

「何だと!?!」

ネクロイド・シャーマンはB100-Dに吸い寄せられて行き、B100-Dの翼の中へ幽閉された。

D・HERO B100-D

ATK1900 2850

「バトルだ！D・HERO B100-Dでフォレストマンへ攻撃！ブラッディ・フィアーズ！！」

D・HERO B100-Dがその漆黒の翼から放った血の雨により、E・HERO フォレストマン（DEF2000）は為す術無く破壊された。

「くっ……なんつつ効果だ……」

「更に、ダイヤモンドガイで直接攻撃。ダイヤモンド・ブロー!!!」  
D・HERO ダイヤモンドガイ（ATK1400）はそのダイヤモンドの拳により駆将の腹部を思いつきり殴った。

「ぐはっ……貴様……絶対にブツ潰す!!!」

駆将LP8000 6600

「君じゃ絶対に僕には勝てないよ。洗脳された強さには必ず限界がある……そんな強さよりも、楽しく決闘していった方が強くなっていくと思うよ。瞬矢先輩や僕の様だね」

「くっ……貴様に……そんな説教される謂れは無いわ!!!」

「（通じないか……）」

カードを一枚伏せてターンエンド」

翔夜LP6700

場：D・HERO BLOOD（ATK2850）

D・HERO ダイヤモンドガイ（ATK1400）

E・HEROネクロイド・シャーマン（D・HERO BLOODに装備）

伏せカード二枚

「俺のターン!!!来た!フツッ、フハハハハハハハハ、行くぞ

「E・HEROスパークマンを召喚！」

リバー魔法発動！ミラクル・フュージョン！！墓地の沼地の魔神王と場のE・HERO スパークマンを除外！現れよ、E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン！！！！」

神聖な光を体中から放ちながら駆将の場にE・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン（ATK2500）が降臨した。

「ふ〜ん。なかなかのHEROだね。でもD・HERO B100-Dの効果でシャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力アップの効果は無効だよ」

「フン、今にその余裕に満ちた表情を歪ませてやるわ！！魔法カード、融合発動！手札のE・HERO ネオスと……………究極宝玉神レインボー・ドラゴンを融合！！」

「レインボー・ドラゴン！？」

これには翔夜も驚いた様子だった。

「フハハハハハハハ！いでよ、レインボー・ネオス！！！！」

駆将の場に先に召喚されていたシャイニング・フレア・ウイングマンをも超える聖なる虹色の光を放つモンスター、レインボー・ネオス（ATK4500）が光臨した。

「そのカード……………昨日決闘していた雪代憂司が使用していたモンスターか」

「そうだ！あいつもめでたく、俺の勝利の為の糧となった訳だ。」



効果を無効にされたとしてもレインボー・ネオスの攻撃力は4500ポイント！貴様のD・HERO B100-Dを破壊するには十分！！

行け！レインボー・ネオスでD・HERO B100-Dを攻撃！  
！レインボー・フレア・ストリーーム！！！！」

レインボー・ネオスは翔夜に向けて虹色の強力なエネルギー波を放った……その時だった。

突如レインボー・ネオスのエネルギー波が消滅し、レインボー・ネオスは元の体勢へと戻った。

「なっ！？いつ、一体何が！？」

突然のことに駆将は現状が理解出来なかった。

「全く……伏せカードには細心の注意を払う、それすら君は分からないのか。

僕が発動した永続罠、強制終了により僕の場のネクロイド・シャーマンを墓地に送ることでバトルフェイズを終了したんだよ。惜しかったね」

「くっ……だが次の俺のターンで貴様は……まさか、このコンボは……」

「その通り　もう君に逃げ場は無いよ」

「……翔夜の奴、恐ろしいコンボだな」

「?……………どういう事ですか?」

「D・HERO BLOOD-Dの効果で装備できるモンスターは一体のみなんだ。そこでBLOOD-Dが戦闘で破壊されそうな時に強制終了の効果で装備モンスターを墓地に送りバトルフェイズを終了、更に次の自分のターンにその相手モンスターを装備する。」

この繰り返しで行けばBLOOD-Dはバトルでは破壊されず相手モンスターを次々と除去出来るんだ。

おそらくは効果破壊の事も翔夜は考えてると思うよ」

「成る程。お二人とも流石です!!」

「さて……………このまま行けるか…」

「ターン……エンドだ……」

駆将LP6600

場：レインボー・ネオス（ATK4500）  
E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン（ATK2500）

「僕のターン、ドロ！D・HERO B100-Dの効果により、レインボー・ネオスを装備する。クラブティ・ブラッド！」

再びD・HERO B100-Dは相手モンスター、レインボー・ネオスを装備してそれを自らの攻撃力へと変えた。

D・HERO B100-D  
ATK1900 4150

「くっ・・・攻撃力4150・・・」

「更にダイヤモンドガイの効果により、トレード・インの効果を発動。デッキから二枚ドロする。バトルだ！B100-Dでシャイニング・フレア・ウィングマンへ攻撃！ブラッティ・ファイアーズ！  
！！」

今度はB100-Dの右腕の第二の口からレインボー・ネオスの力を纏ったエネルギーが放たれ、E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマンを一撃で粉碎した。

「ぐああああっ！！」

駆将LP6600 4950

「まだまだよ。ダイヤモンドガイ、ダイヤモンド・ブロー！！」

D - HEROダイヤモンドガイは先程のターンと同じく駆将の胸部を殴った。

「グハツ・・・」

駆将LP4950 3550

「ターンエンド！」

翔夜LP6700

場：D - HERO B L O O - D (ATK4150)

D - HERO ダイヤモンドガイ(ATK1400)

強制終了

レインボー・ネオス(D - HERO B L O O - Dに装備中)

伏せカード一枚

「俺のターン、ドロー！！カードを一枚伏せターンエンド。

(ここでミラフォを引くとは、俺にもまだツキが残ってるようだな……)」

駆将LP3550

場：伏せカード一枚

「僕のターン！！とどめだ。D - HERO B L O O - Dでダイレクト・アタック！！」

「残念だったな。リバースカードオープン、聖なるバリア・ミラーフォース……！！これでてめえのモンスターは全滅だ！！！！」

ミラーフォースによりD・HERO B100-Dの放った攻撃は反射され、翔夜の場のカードは全滅かと思われた。

「残念。リバースカード発動！リビンゲテッドの呼び声！僕が呼び戻すのはD・HERO ドレッドガイ！」

翔夜のフィールドに全身が傷だらけで顔には鉄仮面を付けた囚人の様なD・HERO、ドレッドガイが現れた。

「今そいつが出てきて何になる！？共に破壊されるだけだ！」

「D・HEROドレッドガイのモンスター効果発動！このカードが特殊召喚されたターン、僕の場のD・HEROはあらゆる破壊から免れる！！ドレッド・バリア！！！」

翔夜の場のD・HERO達の前に半透明なバリアが生じ、いかにミラーフォースと言えど不発にならざるを得なかった。

「なっ！？ バカな！？ こんな事が……」

「終わりだ！D・HERO B100-Dのダイレクト・アタック！！ブラッディ・フィアーズ！！！」

D・HERO B100-Dによる血の雨の様な攻撃により、決闘に終止符が打たれたのであった……………

駆将LP35500



宿命のHERO対決！勝者と敗者を分かつものとは……3（後書き）

次回、駆将に勝利した翔夜は駆将に対して……

準決勝は瞬矢VS海馬、陰達VS駆将になりますが番外編なんかも執筆していきたいと思います。O(^-^ )O

次回もよろしくお願いします。( ^ | ^ ) v

絶望の前の幸福なひと時(前書き)

約一週間ぶりの更新です (^| ^ ;)

一回戦で駆将に勝利した翔夜は……………

ちなみに翔夜が作中で使用しているペンダントは十代が墓守の長と決闘した時の戦利品です。 (^ - ^ )。〇

それではお楽しみ下さい (^ ^ )ノ



## 絶望の前の幸福なひと時

(……………バカな！？……………致命的なミスプレイも無く……………ドローの運も、最初の手札も良い……………自分の全力を出した、そんな決闘だったはずなのに……………)

「とどめだよ。D・HERO BLOODでダイレクトアタック！！ブラッディ・フィアーズ！！！」

駆将LP3550 0

「負けた・・・だと!？」

駆将は自分の敗北が信じられなかった。いくら敗因を考えても分からない。もしかしたらこの決闘は最初から翔夜に弄ばれていたのではないかと思うほどだ。

「これで分かっただろう」

翔夜は決闘盤を外しながら駆将に近づいてきた。

「洗脳されて得た力なんてなんの価値も無い。そんなドーピングが通用するのは二流まで。一流の決闘者にはただの小細工でしかないんだよ」

「俺の力が……………小細工……………陰達に引き出されたこの力が？」

「人に引き出された力なんて、そんなものは真の実力じゃない。自分で作成したデッキで数々の決闘を経験し、多くの試行錯誤をした

末に行き着く境地……………今の君にはそこには辿り着けない、絶対に！」

「っ……………くそおおおお！！！」

駆将は自分の全てが否定され、翔夜に対して憤りを感じずにはいられなかった。

その時突然、翔夜が決闘中に使った闇の力を持ったペンダントから光が放たれ、二人がいるスペースを優しく包み始めた。

「君はまだまだ強くなれる。僕や瞬矢先輩と肩を並べられるくらいにね。その為に……………その洗脳、今ここで解く！」

二人を包んでいた光が段々と駆将の方に近づいて行き、光が駆将を完全に覆った。

「くっ……………俺は……………俺は……………」

突如光と闇が螺旋状に混ざり合ったエネルギーが放たれ、駆将を覆っていた光を消滅させた。

「止めてくれないかな？そいつは僕の駒だ」

決闘場の入口付近に立って先程のエネルギー波を放ったのは、駆将

を洗脳していた張本人である無月陰達であった。

「 駆将にはまだ僕の駒として働いてもらうんだ。邪魔しないでくれ。」

「

「（今は……………このペンダントの力を圧倒的に上回っていた……………）」

……………約束しろ。次の準決勝でもし僕が君に勝ったらこの子を解放すると……………」

翔夜は陰達の殺気に気圧されながらも一人の決闘者として駆将を助けたいという想いから陰達に交渉し始めた。

「……………良いだろう。僕が負けたら駆将を解放するよ。まあ、そんな事は有り得ないけどね」

「 自信满满だね。せいぜい明日まで楽しんでいなよ」

そう言って翔夜は陰達と駆将を残し、決闘場から去って行った。

決闘場から出ると瞬矢と四つ葉が翔夜が来るのを待っていた。

「 流石だな翔夜。D・HEROをあそこまで使いこなすとは……………」

「 そりゃあ僕だってアカデミアで遊んでる訳じゃないですから。来年はプロの舞台で決闘する気なんですよ！」

「そうだったな……だがさっきの陰達との賭け……本当に大丈夫か？」

「……大丈夫ですよ。たとえスターダストが来ても、レッド・デーモンズが来ても返り討ちにしますよ……」

そう言った翔夜だったが内心では先程の決闘での陰達の殺気やそれに負けてサレンダーした氷川、スターダスト・ドラゴンなどが思い出され恐怖を感じていた。

「痩せ我慢は止め。何なら棄権するか？」

「本当に大丈夫ですって。このD・HEROで先輩と決勝戦を闘いますよ。ところで……」

「……ん？」

翔夜は瞬矢に近づき耳元で囁いた。

「彼女と何かありました？四つ葉さん顔赤くして先輩のこと見ようとしてもないんですけど？何か進展でもありました？」

翔夜は顔をニヤつきながら瞬矢に質問した。

「／／つ……………翔夜、そういう事はあんまり言っな。

次言ったらアカデミアのお前の彼女に一時期お前が二股掛けてたのばらすからな！」

「いや、ちょっとそれだけは勘弁して下さいよ、せっかく長続きし

てるんですから！  
それだったら先輩こそ去年俺が撮ったドッキリ映像ネットに流しま  
すよ」

「おい、あの映像まだ合ったのか！？俺が焼却処分したはずだぞ？」

「残念でした！ちゃんとコピーしておいたんですよ。こういう時に  
使えると思って」

「おい、それ今どこにあるんだ？即刻破壊しに行くからな」

「アハハハハ、久しぶりですね、こういう口喧嘩を先輩とするの」

「ハハハ、そうだな。すっかり懐かしくなった」

「アハハハハハ、二人とも必死になってておもしろかったですよ！」

「面白いって……漫才やってるんじゃないし……」

「まあ、いいじゃないですか。そういえば僕らが泊まってるホテル  
の隣のレストラン行きました？芸能人御用達の高級レストランらし  
いですよ」

「ふん。それじゃこれから行くか？」

「ええ行きましょう。プロ決闘者の奢りで」

「おい、お前払うんじゃないのか？お前ん家トップスの住民の中で  
五本の指に入るほど金持ちだろうが？」

「まあ良いじゃないですか。瞬矢さんだってプロで結構稼いでるんだし」

「……………今回だけだからな」

「先輩、彼女に対して甘すぎですよ」

「／／……………別にいいだろ。そんな事言っんなら奢ってやらないぞ」

「分かりましたって。早く行きましょ」

「いいですね瞬矢さん。こんないいお友達がいて」

「ふっ……………ただの悪友だよ……………」

そんなこんなで三人の会話は弾み、闇のゲームや陰達の事を忘れて楽しい時を過ごした。

翌日の準決勝が三人にとって忘れられない悲劇となることも知らずに

……………

絶望の前の幸福なひと時（後書き）

次回、準決勝でそれぞれ海馬と陰達と対戦する二人は・・・

時々各登場人物の過去編なども書きたいと思っています～（＾ー＾）  
/

それでは次回もお楽しみ下さい（＾ー＾）v

**波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・1（前書き）**

準決勝第一試合、瞬矢VS海馬戦が始まります。

果たして決勝へと進む決闘者はどちらになるのか……………

それではお楽しみ下さい（＾o＾）／



波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・1

・・・翌日・・・

エンペラードームの選手控室では瞬矢と翔夜がそれぞれデッキ調整をしていた。四つ葉はというと二人の邪魔はしたくないからと一人で客席に行ってしまった。

「いよいよ準決勝ですね、瞬矢先輩」

「ああ。できれば俺の方が陰達と当たりたかったが……………」

「僕が勝って先輩も海馬さんに勝って、決勝戦が終わった後で決勝すれば良いじゃないですか。どうせあいつ逃げも隠れもしなさそうですし……………」

「そうならばいいが……………」

瞬矢は陰達との決闘を目的にこの大会に出場したのによりによってアカデミア時代からの友である翔夜が陰達と対戦、しかも恐らくは千年盤による闇のゲームが発動するだろうと思ひ、瞬矢は翔夜の身を案じていた。

「大丈夫ですって。そういえば昨日陰達と決闘したプロ決闘者……………氷川さんでしたっけ？あの人重症らしいですよ」

「重症だと？……………それ程大した傷ではなかった筈だが？」

「外傷はほとんどありませんが、何か決闘に対して恐怖を感じるらしいです」

「恐怖だと？」

「はい。多分昨日の陰達の殺気が原因だと思いますが……………また決闘出来るかどうか……………」

「……………そうか」

瞬矢はリーグで何度か対戦した氷川の状況を聞き、些かがっかりした様子であった。

「それで先輩、肩は大丈夫ですか？」

翔夜は一昨日瞬矢が憂司のサファイア・ペガサスから受けた傷について尋ねた。

「心配するな。これ位の傷で決闘出来ないんじゃ、三年間待った甲斐がない」

「そうですか。じゃあお互いに準決勝で勝てばどうせ先輩には勝てるから僕が優勝ですね！」

「おい、何で決勝で俺が負ける前提で話すんだよ。全く 決闘中はしっかりしてる癖に……………」

「そりゃあ決闘とプライベートではきちんと切替えてますから。ところで先輩、そろそろ時間ですけど?」

翔夜が時計を見ると決闘開始予定時刻の五分程前だった。

「ああ、そんじゃそろそろ行くか。お前は四つ葉と一緒に居てくれ」

「はいはい、ちゃんと先輩が帰ってくるまで客席で待ってますよ」

「頼んだぞ。絶対決勝で決闘しような!」

「当たり前です!」

そう言つて二人は笑い合い、瞬矢は決闘場へ、翔夜は四つ葉がいる客席へと向かった。

「これは……」

瞬矢が決闘場へと入場して見た景色……それは前日迄とは違い客席に観客がほとんど無く、翔夜と四つ葉の他には闇のゲームによる命を賭けた決闘やそれによる殺し合い等を目当てとした下衆な輩しか

残っていないかった。

「遅いぞ須崎……早く準決勝を始めるぞ!!」

決闘場では先に到着していた対戦相手、海馬彼方が決闘盤を構えた。

「海馬さん……何故観客が？」

「フン、どうせ昨日や一昨日の貴様らの闇のゲームとやらに恐れをなしてドームに来ようともしないのだろう。まあ残っている物好きはいるようだがな」

「……すみません、こんなことになってしまって。これじゃあ会社の利益が……」

「フン！そんな事は関係ない!!俺はIDGPで二連覇を果たしに来たのだ!さあ、決闘盤を構える須崎!!」

「……行きますよ……」

「「決闘!!」」

「俺の先行、ドロー!!モンスターをセット、カードを一枚伏せてターンエンドだ!!」

海馬LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード一枚

「俺のターン、ドロー！サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚！！  
ツヴァイで裏側守備モンスターに攻撃！ツヴァイは攻撃するとき、  
攻撃力を300ポイントアップする。エヴォリユーション・フレア  
！！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500 1800）が放  
った青白いブレスにより、海馬の裏側守備モンスターであるダンデ  
イライオン（DEF300）が破壊された。

「フフツ、ダンデイライオンが破壊された事により、俺の場に綿毛  
トークンを特殊召喚する！！」

海馬の場にダンデイライオンが残した、フワフワと浮かぶ可愛らし  
い綿毛トークン（DEF0）が現れた。

「（ダンデイライオン……遊城十代がデザインし、神秘的な宇宙  
の波動を受けてカード化したモンスターか……）  
カードを二枚伏せて永続魔法、未来融合-フューチャー・フュージ  
ョンを発動！！対象はサイバー・エンド・ドラゴン！！よって三  
体のサイバー・ドラゴンをデッキから墓地に送る！！これでターン  
終了です」

瞬矢LP8000

場：サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）

未来融合-フューチャー・フュージョン（サイバー・エンド・ドラ  
ゴン対象）

伏せカード二枚

「俺のターン！いくぞ須崎！！俺は二体の綿毛トークンをリリース  
！！！」

綿毛トークンの姿が粒子状になり光を発しながら消えていき、巨大な羽を持った白銀の龍が段々と姿を現してきた。

「くっ………来るか、あの伝説のドラゴンが……」

「二体のリリースって……海馬さん、いきなり！？」

「先輩相手に下手な小細工は通用しないと分かってるからでしょう。究極の龍VSサイバー流ってところですかね」

「フハハハハハハッ！！いでよ、我が至高のドラゴン！！青眼の白龍！！！！」

光の中より、神々しいオーラを放つ神秘的なモンスター、青眼の白龍が君臨し、瞬矢に対して威圧的な咆哮を上げるのだった……

波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・1（後書き）

次回、青眼の白龍に対して瞬矢のプレイングは……………

5D'sのスタッフは凄いですね。今になって映画とも関連させる  
とは……………（<|>）

なんとか自分も奥深いストーリーにしたいと思っています。（^。  
^:）

それでは次回もご覧下さい（^| ^）v



波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・2（前書き）

準決勝第一試合、瞬矢VS海馬戦の中編です。青眼に対して瞬矢は

.....

【劇場版 遊戯王 ～超融合！ 時空を越えた絆～】がアンコール  
上映決定の様ですね。

新たに特別映像も加わるといふこともあり一度見に行った方もそ  
うでない方も楽しめると思います（＾o＾）ノ

それではどうぞ（＾　＾）ノ

## 波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・2

「青眼の白龍……半年ぶり位ですね、貴方と最後に決闘してから……」

「フン、この準決勝……俺にとってはプロ四年目で初黒星をつけた須崎瞬矢……貴様へのリベンジ以外の何物でも無い……！前未踏の100連勝を前にしてのあの敗北は忘れぬぞ……！」

……海馬は半年前、プロの試合で瞬矢に敗北し、それ以来海馬は瞬矢を一人の決闘者として認め、陰達についての情報などを色々と提供してきたのだった。

「……あの時はただ運が良かっただけです。最初からあれだけ揃ってる手札じゃ勝てない方がおかしい……」

「そんな事はどうでも良い……結果として俺が敗北したのは事実だ……この決闘……青眼と共にこの俺が貴様に勝利する……！」

「俺も……この決闘は勝ちを譲る気はありません……！」

「フツ、その意気だ。行くぞ須崎……！青眼の白龍でサイバー・ドラゴン・ツヴァイに攻撃！滅びのバーストストリーム……！」

青眼の白龍（ATK3000）が放ったサイバー・ドラゴンをも超えるプレスにより、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）は一瞬の内に粒子状になり消滅していった。

(くっ……この感覚……邪神程ではないがかなりの威圧感だ……)

瞬矢LP8000 6500

「フハハハハハハハハハハ！！これが青眼の実力だ！！ターンエンド  
！！」

海馬LP8000

場：青眼の白龍(ATK3000)

伏せカード一枚

「くっ……俺のターン！

(ここは耐えるしかないか……)

俺はモンスターをセットしてターンエンド」

瞬矢LP6500

場：裏側守備モンスター

未来融合・フューチャーフュージョン(1ターン経過：サイバー・

エンド・ドラゴン対象)

伏せカード二枚

「俺のターン！！須崎！防御に徹する気なら教えてやろう！！この  
俺の前にそんなものは通用せんとな！！

俺は永続魔法、未来融合・フューチャーフュージョン発動！！対象

はF・G・D！！」

海馬はデッキから……

伝説の白石×2

ドレッド・ドラゴン  
サファイアドラゴン  
スピア・ドラゴンの五体のドラゴン族モンスターを墓地に送った。

「（この流れは……）  
まさか一回戦と同じ!？」

瞬矢は数日前に見た海馬のプレイングを思い出し始めた。

「その通りだ。伝説の白石が墓地に送られたことにより、デッキから青眼の白龍を二枚手札に加える！  
悪いが行かせて貰う!!魔法カード、融合発動!手札と場の青眼の白龍三体を融合!!!」

「決闘序盤でもうあのモンスターを……  
（さすが海馬さん……無駄の無いプレイングだ……）」

瞬矢は海馬のプレイングを改めて尊敬し、同時にこれから現れるであろうモンスターに対する恐怖とそのモンスターと戦える高揚感を感じていた。

「フハハハハハハハハハ!!融合召喚!我が究極絶美のモンスター、青眼の究極竜!!!」

三体の青眼の白龍が融合し、神聖な光を放ちながら青眼の白龍の進化形態……青眼の究極竜（ATK4500）が光臨した。

「青眼の究極竜……とてつもない覇気だ……」

「行くぞ須崎!!青眼の究極竜でセットモンスターへ攻撃!!アル

ティメット・バーストオオオオオ!!!」

青眼の究極竜のそれぞれの口から放たれた青白いプレスにより瞬矢の裏側守備モンスター、シャインエンジェル（DEF800）は対抗する術も無く破壊された。

「戦闘破壊されたシャインエンジェルの効果発動。デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスター、プロト・サイバー・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚する！」

「無駄だ!!!リバースカードオープン!速攻魔法、融合解除を発動!!!青眼の究極竜をエクストラデッキに戻し、墓地の融合素材となった青眼の白龍三体を特殊召喚する!!!」

「何!?!」

海馬の場の青眼の究極竜はそれぞれ元の青眼の白龍へと三体共分離した。

「くっ・・・このイミングで融合解除か・・・」

・・・客席・・・

「まずい、瞬矢先輩のLPは6500。場にはプロト・サイバー・ドラゴンが攻撃表示で伏せカード二枚。三体の青眼による攻撃で、瞬矢先輩の負けだ……」

「そんな……打つ手は無いんですか!？」

「……青眼の究極竜の攻撃にも発動しなかった二枚の伏せカード……それに望みを託すしか……」

「……瞬矢さん……どうか……負けないで……」

「ワハハハハハハハハハハ!これで終焉だ須崎!!行け!青眼の白龍  
三体でダイレクトアタック!!トリプルバー・ストストリーム  
!……!」

三体の青眼の白龍が一斉に放ったプレスが瞬矢の場のプロト・サイバー・ドラゴン(ATK1100)とプレイヤーである瞬矢自身を襲うのだった……

波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・2（後書き）

次回、絶体絶命のピンチに瞬矢は……………

この小説サイトの遊戯王小説の中で転生ものが流行していますね。  
いくつか拝見させてもらっていますがこの小説より面白い小説がほ  
とんどです（- - - #）

それでは次回もお楽しみ下さい〇（^ - ^）〇

波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・3（前書き）

準決勝第一試合、瞬矢VS海馬戦のラストです。自分が思っていたより長くなりました（＾|＾）v

表サイバー流VS青眼の決着は……………

それではお楽しみ下さい（＾o＾）／



### 波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・3

「青眼の白龍三体で攻撃！トリプルバーストストリーム！！」

青眼の白龍三体が放ったブレスが瞬矢の場のプロト・サイバー・ドラゴンと瞬矢に向かって放たれた……………その時だった…

「リバースカードオープン！！亜空間物質転送装置！！プロト・サイバーをこのターンのエンドフェイズまで除外する！！」

「フン！血迷ったか？無意味にモンスターを除外するとは。青眼の白龍三体の攻撃でこの決闘は俺の勝ち……………」

「さらに畏発動！ゼロ・フォース！！俺の場に表側表示で存在するモンスターが除外された時、フィールドに存在する全てのモンスターの攻撃力を0にする！！！」

「何だと！？」

青眼の白龍 ATK3000 0

「青眼の攻撃力が0だと！？」

海馬は瞬矢の思いがけないカウンターに驚きを隠せなかった。

「これで青眼の攻撃は無意味！！」

「くっ……………カードを二枚伏せターンエンド……………」

海馬LP8000

場：青眼の白龍（ATK0）×3

未来融合 - フューチャーフュージョン - （F・G・D対象）

伏せカード二枚

「俺のターン！そしてこのスタンバイフェイズ、未来融合 - フューチャーフュージョンの効果発動！エクストラデッキからサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚する！！

現れよ！！表サイバー流皆伝！！サイバー・エンド・ドラゴン！！」

ニターン前に発動した未来融合によって、表サイバー流の究極竜であるサイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）が降臨した。

「くっ………攻撃力4000………表サイバー流の切り札か………」

「行きます！サイバー・エンド・ドラゴンで攻撃力が0となった青眼の白龍へ攻撃！！エターナル・エヴォリューション・バースト！！！！」

「させん、リバーズカードオープン！！速攻魔法、超融合を発動！！」

「なっ！？………超融合………だと！？」

瞬矢は海馬が超融合を発動した事に………否、所持している事に驚嘆した。

「何故遊城十代が唯一持っていたカードを貴方が!?」

「フン、驚いたか?遊城十代が超融合を創造してから百年以上も経過している。その間に何枚かのレプリカが作られていても不思議ではあるまい?」

まあ、オリジナル程の力は無く、表の世界でも出回っていないがな

……」

「……そうでしたか……まさかあの伝説の融合カードを使用するとは……」

「……続けるぞ。超融合の効果により俺は手札を一枚墓地に送り、青眼の白龍三体をもう一度融合する!!再びフィールドに現れよ!!青眼の究極竜!!!」

海馬が発動した超融合により青眼は再び融合し始め、三つの首をもつ青眼の究極竜(ATK4500)に一体化した。

「……攻撃力4500……サイバー・エンドでも届かない……だが!手札からオネストの効果を発動!!このカードを墓地に送り、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を青眼の究極竜の攻撃力分アップさせる!!」

「何だと!?!」

サイバー・エンド・ドラゴン

ATK4000 8500

「行け!サイバー・エンド・ドラゴン!!エターナル・エヴォリュ  
ーション・バースト!!」

サイバー・エンドの翼はオネストによってより神聖なものとなり、攻撃力4500の青眼の究極竜を襲った。

「ぐあああつ……………青眼が……………」

海馬LP8000 4000

「更にプロト・サイバー・ドラゴンで直接攻撃」

「通させん、リバーズカード発動！！リビングデッドの呼び声！！破壊された青眼の究極竜を場に特殊召喚！！」

「くつ……………カードを一枚伏せ、ターンエンド」

瞬矢LP6500

場：サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4500）

プロト・サイバー・ドラゴン（ATK1100）

未来融合・フューチャーフュージョン（サイバー・エンド・ドラゴン対象）

伏せカード一枚

「ドロー！俺はモンスターをセットし、青眼の究極竜でサイバー・エンド・ドラゴンへ攻撃！！アルティメットバースト！！」

青眼の究極竜が放った青白い究極のプレスにより、同じく三つ首の竜であるサイバー・エンド・ドラゴンは反撃しようとするも、攻撃力の差は及ばず無残にもスクラップ状にされた。

「くっ……サイバー・エンドが……」

瞬矢LP6500 6000

「フハハッ、ターンエンドだ！」

海馬LP4000

場：青眼の究極竜（ATK4500）

裏側守備モンスター

未来融合・フューチャーフュージョン（1ターン経過：F・G・D  
対象）

リビングデッドの呼び声（青眼の究極竜対象）

「俺のターン、ドロー！！サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚！  
ツヴァイで裏側守備モンスターへ攻撃！！エヴォリユーション・フ  
レア！！」

ツヴァイの放った光のエネルギー波によりセットされていたモンス  
ター、メタモルポット（DEF600）は破壊された。

「メタモルポットのリバース効果！互いのプレイヤーは手札を全て  
捨て、その後デッキからカードを五枚ドローする」

「やはり手札補充で来ましたか……」

二人は五枚のカードをドローした。自分が望むカードが来るように  
と願いながら……

「俺はプロト・サイバーを守備表示に変更、カードを一枚セットしターンエンド」

瞬矢LP6000

場：サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）

プロト・サイバー・ドラゴン（DEF600）

伏せカード二枚

「俺のターン！！このスタンバイフェイズ、未来融合の効果により、F・G・Dを特殊召喚する！！」

「いよいよ大詰めだな須崎……俺は青眼の究極竜をリリース！！現れよ、究極を超えし神秘のドラゴン！青眼の光龍！！！」

究極竜は神聖な光を放ちながら粒子状になりその光の中から青眼の最終進化形態である青眼の光龍（ATK3000）が降臨した。

「青眼の光龍……一回戦で邪神アバターを葬った究極のモンスター……」

瞬矢は青眼の光龍とF・G・Dの放つ独特なオーラに圧倒されていた。

「フハハハハハハハ！更に、手札の沼地の魔神王のモンスター効果発動！このカードを墓地に送りデッキから融合を手札に加える！魔法カード、龍の鏡を発動！！墓地の青眼の究極竜と沼地の魔神王を除外！！究極竜騎士を融合召喚する！！」

墓地に送られていた青眼の究極竜と沼地の魔神王が異次元に吸い込まれて行き、その中からそれらが融合したデュエルモンスターズ界最強の攻撃力を持つモンスター、究極竜騎士が現れた。

「青眼の光龍の攻撃力は俺の墓地のドラゴン族一体につき、300ポイントアップする！！俺の墓地のドラゴンは8体。よって攻撃力は2400ポイントアップ！！  
更に究極竜騎士の攻撃力は俺の場のこのモンスター以外のドラゴン族モンスター一体につき500ポイントアップする！！」

青眼の光龍

ATK3000 5400

究極竜騎士

ATK5000 6000

F・G・D ATK5000

海馬の場のドラゴンは、最低でも攻撃力5000以上とかなりの強力モンスターが並んでいた。

「攻撃力5000以上のモンスターが三体……」

瞬矢は海馬の鮮やかなプレイングに唖然としていた。

「須崎！この決闘は久々に俺の決闘者としての血が騒いだ！！だがこのターンで終わりだ！！  
行け、究極竜騎士！サイバー・ドラゴン・ツヴァイへ攻撃！ギヤラクシー・クラッシュャー！！！！」

究極竜騎士の気が震える程の雷撃がサイバー・ドラゴン・ツヴァイを焼き払った。

「くっ……なんて破壊力だ……」

瞬矢LP6000 1500

「さらにF・G・Dでプロト・サイバー・ドラゴンに攻撃……」

五つある口からそれぞれが強力な光線を放ち、守備体勢をとっていたプロト・サイバー・ドラゴンを粉々にした。

「終わりだ！ 行け、青眼の光龍！！ シャイニング・バースト！！」

青眼の光龍は青く輝く閃光を瞬矢に向かって放出した。

「……畏発動、ガード・ブロック！ 戦闘ダメージを0にし、カードを一枚ドローする！」

「フン、カードを一枚伏せてターンエンドだ。  
(これで奴のライフは風前の灯火……だが奴の切り札……あれだけに  
は警戒せねば)」

海馬LP4000

場：青眼の光龍(ATK5400)

究極竜騎士(ATK6000)

F・G・D(ATK5000)

伏せカード一枚



海馬は一回戦で憂司を葬ったサイバー流の切り札を危惧していた。

「（…………この状況を打破出来るカード…………）  
俺のターン、ドロー！魔法カード、オーバーロード・フュージョン  
発動！！俺の場と墓地からサイバー・ドラゴンを含む、機械族モン  
スターを全て除外！！キメラテック・オーバー・ドラゴンを融合召  
喚する！！」

瞬矢は海馬の三体の強力モンスターを破壊出来るキメラテック・オ  
ーバー・ドラゴンへの召喚へと繋ごうとした。

「（やはり来たか！）  
リバーカードオープン！！カウンター罠、魔宮の賄賂！！相手に  
カードを一枚ドローさせ魔法、罠の発動と効果を無効にする！！」

「なっ！？」

瞬矢が起死回生の一手として発動したオーバーロード・フュージ  
ョンであったが海馬のカウンター罠により不発に終わった。

「フハハハハ！さあ須崎！一枚ドローしろ！！」

「くっ……………」

（キメラテックが封じられた…………あのカード以外で状況を覆せるカ  
ード…………あのカードよ…………頼む！！）

瞬矢は再びあるカードをドローすることを願った。数日前、あの謎  
の男から手渡されたカードの一枚…………キメラテックに対抗出来る表

サイバー流の第二の切り札を……………

「……………ドロー!!!!!!」

来た！俺はプロト・サイバー・ドラゴンを召喚」

「（須崎め……………一体何を引いた……………）  
今更そんな雑魚を召喚して何になる!？」

「こいつはこのカードの為の布石です。

俺は全ての、場と墓地の光属性、機械族モンスターを除外!!!!!!」

「何!?!キメラテックとも違う……………何だこの召喚方法は!?!？」

「光輝く星空より降臨せよ、サイバー・エルタニン!!!!!!」

「なっ……………何だこのモンスターは!?!？」

「サイバー・エルタニンのモンスター効果発動!!!!!!特殊召喚に成功した時、このカード以外の全ての表側表示モンスターを墓地に送る!!!!!!ドラコニス・アセンション!!!!!!」

「!!!!!!バカな!?!俺の……………最強の……………青眼が……………!!!!!!」

サイバー・エルタニンが発した光線が海馬の場の三体のドラゴンの体を貫き、苦しむ間もないまま墓地へと送られていった。

「更に、サイバー・エルタニンの攻撃力・守備力は特殊召喚時に除外したモンスターの数×500ポイントとなる!!!!!!」

俺が除外したモンスターは八体!!!!!!よってサイバー・エルタニンの攻撃力は……………!!!!!!」

サイバー・エルタニン  
ATK? 4000

「攻撃力4000だと!?!」

「これで本当に終わりです!! 行け! サイバー・エルタニン!!!  
コンステレイション・シージュ!!!!!!」

サイバー・エルタニンがそれぞれの口から放った光のエネルギー波  
が海馬を直撃し、この準決勝に終止符を打った……………

「ぐああああああああ!!!」

海馬LP40000

波乱の準決勝！究極の龍VS究極の機械竜・・・3（後書き）

次回、第一試合が終了して、続く第二試合は……………

出来れば感想をいただけると幸いです（T|T）

それでは次回もお楽しみ下さいo(^-^o

翔夜の覚悟……そして始まる第二試合（前書き）

瞬矢の勝利で終わった準決勝第一試合……そして第二試合に出場する翔夜と陰達は………

約一週間振りの更新です。遅くなってしまいましたm（| |）  
m

それと今回は第一試合と第二試合の繋ぎの部分です。よって決闘は無いです。

それでは、どござ（^o^）／

翔夜の覚悟……そして始まる第二試合

「これで終わりです！！サイバー・エルタニンで直接攻撃！！コンステレーション・シージュ！！！」

「ぐああああああああ！！！！！」

海馬LP4000 0

「勝つ……た……」

瞬矢は自分が勝利した瞬間に緊張の糸が切れたのかその場に膝を下ろした。

「ぐっ……くそおお！！！！」

海馬はたまらず床に拳を叩き付けた。

そして瞬矢の後ろに客席で見ていた二人が近寄って来た。

「やりましたね、瞬矢先輩」

「本っ当に素晴らしい決闘でした！決勝進出おめでとございます！」

「くっ………須崎！！！」

海馬はデッキからカードを一枚取り出しながら瞬矢に迫ってきた。

「……俺のデッキの中の一枚だ、受け取れ」

「えっ……デッキのカードだなんて……いいんですか？」

瞬矢は海馬の意外な行動に困惑していた。

「フン！対戦前に貴様のデッキを研究した結果、このカードが貴様のデッキで使用するのに適していると考察したまでだ！！  
須崎よ！決勝での敗北は承知せんぞ！！前回優勝者のこの俺に勝つたのだ！！」

次に貴様と顔を合わせるときは貴様が優勝した時だ！！  
それ以外の対面は絶対に許さんから！敵討ちでもなんでも勝手にするがいい！！」

「（海馬さん……）」

分かりました。必ず奴に勝利してみせます」

「お二方々、僕が負ける前提で話すのやめてくれますか。」

翔夜は顔を怒りを抑えながらもこやかに話しかけた。

「……君こそそんなくたらない戯れ事を言えたものだね……  
二人が言ったのは正論だよ。君が僕に勝てる訳ないだろう……」

皆が後ろを振り向くと、準決勝第二試合で翔夜と決闘する決闘者である陰達が来ていた。

「正論？馬鹿なこと言うなよ。僕が人殺しなんかに敗北するか。それに僕の方が年上なんだし敬語で話せよ、腹立ってくるから」

「フフツ、威勢がいいね。こう見えても君との決闘も楽しみにしてたんだよ。駆将を圧倒した遊城十代の子孫の君とね……」

陰達の表情は嘘を言っているようには見え、純粹に一人の決闘者として翔夜と決闘したいと思っているようだった。

「ウォーミングアップのつもりだろうが瞬矢先輩の前に僕が君に見せ付けてやるよ、運命を司る究極のD・HEROの力を！」

「翔夜……最後の警告だ。棄権する気は無いんだな？奴との決闘は……命の保障が無いぞ……」

「……大丈夫ですよ。対策は万全にしましたから」

その言葉に瞬矢は翔夜の覚悟を感じ取り、瞬矢自身も覚悟を決めた。

「……決勝で待っている。必ず勝ち上がって来いよ！！」

「はい！それと先輩、このカードを」

翔夜は胸ポケットから一枚のカードを取り出して瞬矢に手渡した。

「！？……このカードは？」

瞬矢は翔夜のカードを見て驚愕した表情を見せた。



「勘違いしないでください。貸だけです。後でちゃんと返して下さいよ」

「……形見にはするなよ……」

瞬矢は翔夜が自分の大切なカードを貸した意図……絶対に戻って来るというメッセージを察し、改めて翔夜が自分を信頼しているのを感じた。

「今生の別れになるかもしれないというのに僕に決闘を挑む、その姿勢は大した物だ。

だけど……それじゃ僕は倒せない。僕を倒すには君の精神はまだまだ脆弱すぎる。もう少し強くなつてから挑んで来てもいいよ？」

「僕が君に負ける？……何ならそろそろ確かめてみようか？」

そう言いながら翔夜は決闘盤を構えた。

「そうするとしようか。君を見てると僕の中の闇……いや、光が騒ぐんだよ」

そう言い、陰達もまた決闘盤を構えた。

「（やはりこいつは奴に……）」

それじゃ瞬矢先輩、四つ葉さん、客席で待っていてください」

「ああ。絶対に勝てよ！」

「翔夜さん……負けしないで下さい」

そう言い残し瞬矢は四つ葉を連れて客席へと向かった。

「フン、敗者として決闘を拜見したくはなかったが仕方ない。貴様らの決闘、IDGP主催者として見届けてやる！」

そう言っつて海馬も自身専用の観覧席へと向かつて行った。

「さあ、始めようか。憂司や駆将の力を遥かに超える、究極の闇のゲームを……！」

「……どうせこのペンダントを使ってもそれを止められはしない……闇のゲームで瞬矢先輩の代わりに貴様を倒す……！」

「「決闘……！」」

こうして準決勝第二試合、遊城翔夜VS無月陰達の決闘が幕を開けたのだ……

翔夜の覚悟……そして始まる第二試合（後書き）

次回、陰達の発動した闇のゲームの中で決闘する翔夜は……………

今回は早めに更新したいと思います（T—T）

こんな小説ですがお楽しみいただけたら幸いです。

それでは次回も【遊戯王・真相の果て…】をよろしくお願いします  
O(^-^ )O

白熱する決闘・・・そして降臨するシンクロキラー（前書き）

翔夜VS陰達の決闘です。果たして翔夜に勝機はあるのか・・・

最近週一の更新になってきました（-|-#）

早く物語の核心部分に入りたいとは思っていますが・・・決闘描写が  
難しいです（T|T）

それではどごぞm（-|-）m

## 白熱する決闘・・・そして降臨するシンクロキラ

「僕の先攻、ドロー！僕はD・HERO　ダイヤモンドガイを召喚  
！」

翔夜の場に体をダイヤモンドで覆ったD・HEROの一体、ダイヤ  
モンドガイ（ATK1400）が現れた。

「ダイヤモンドガイのモンスター効果発動！デッキの一番上をめく  
り、そのカードが通常魔法ならば墓地に送って次の僕のターンのメ  
インフェイズに発動する」

翔夜は恐る恐るデッキのカードを確認した。

「ラッキー！出たカードは通常魔法のトレード・イン。よって墓地  
に送って次のターン発動する」

「なかなか運が良いね。だがいきなり攻撃力1400のモンスター  
が攻撃表示とは……何か策があるのかな？」

「見てれば分かる。カードを一枚伏せターンエンド」

翔夜LP8000

場：D・HERO　ダイヤモンドガイ（ATK1400）  
伏せカード一枚

「僕のターン。相手の場にモンスターが存在し、自分の場にモン  
スターがない時、サイバー・ドラゴンは手札から特殊召喚出来る。」

サイバー・ドラゴンを特殊召喚！」

陰達の場に瞬矢のとは違い、全身が黒いサイバー・ドラゴン（ATK2100）が姿を現した。

「いきなりサイバー・ドラゴンか・・・シンクロ召喚には持つてこいのカードだな」

「・・・そうだね。もちろんこのモンスターはシンクロ素材に使える。他にもアドバンス召喚の為のリリースや単純にアタッカーとしても役に立つ。

このカードが無ければこのデッキはこんなにも強くは無かったのかもしれないね・・・感謝してるよ、本当に……」

そう言いながらサイバー・ドラゴンを見る陰達に嘘は無い様で、その瞳は純粹という言葉を体現しているようであった。

「（…………理解出来ない。こいつは何なんだ？三年前サイバー流道場の門下生や…その当時に無敵と称された師範を全員殺害した人格なのか…………まさかまだ不完全か？）  
自分のモンスターに見惚れている場合じゃ無いだろう。早くターンを進めたら？」

「…………そうするでしょうか。チューナーモンスター、メンタル・カウンセラー リリーを召喚！」

レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル3のメンタル・カウンセラー リリーをチューニング！」

メンタル・カウンセラー リリーは光の輪になりサイバー・ドラゴンを包み込んだ。

(・・・何が来る?)

「大いなる星々が輝く時、古より伝承されし伝説の竜が蘇る。聖なる光を放て!!!シンクロ召喚!舞い上がれ、スターダスト・ドラゴン!!!」

陰達の場に白銀の翼を持つ聖なる龍、スターダスト・ドラゴンが降臨した。

「スターダスト・ドラゴン……序盤から攻めて来るか……」

「シンクロ素材にしたメンタル・カウンセラー リリーの効果発動。このカードがシンクロ素材にされた時、ライフポイントを500払う事でエンドフェイズまでこのカードがシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力を1000ポイントアップする」

スターダスト・ドラゴン

ATK2500 3500

陰達LP8000 7500

「くっ・・・攻撃力・・・3500・・・」

「行け、スターダスト・ドラゴン!!!ダイヤモンドガイに攻撃!シューティング・ソニック!!!」

「させない!!!リバーズカードオープン!!!D-シールド!!!このカードによりダイヤモンドガイを守備表示に変更し、このカードを装備する。このカードが装備されている限り装備モンスターは

戦闘によっては破壊されない!!」

ダイヤモンドガイは守備体勢になりながらもスターダスト・ドラゴンの攻撃を耐えた。

「……成る程。カードを二枚伏せてターンエンド。そしてスターダスト・ドラゴンの攻撃力は元の2500に戻る」

陰達LP7500

場：スターダスト・ドラゴン（ATK2500）  
伏せカード二枚

「僕のターン、ドロー！」

「リバースカード発動！バスター・モード！！スターダスト・ドラゴンをリリースし、デッキからスターダスト・ドラゴン/バスターを特殊召喚する！！」

陰達の場のスターダスト・ドラゴンは光に包まれて粒子状になり、スターダスト・ドラゴン/バスターとして再構成された。

「くっ……確かそのモンスターの効果は自身をリリースすることで、俺が発動したあらゆるカードの発動と効果を無効にして破壊する……だったはず。」

墓地のトレード・インの効果を発動！！デッキからカードを二枚ドロウする……!!」



「フフ……いいだろう。スターダスト・ドラゴンノバスターの効果は発動しないよ」

「（ハンデのつもりか？）」

舐めるなよ。カードを二枚伏せターンエンド」

翔夜LP8000

場：D - HERO ダイヤモンドガイ（DEF1600）

D - シールド（ダイヤモンドガイに装備中）伏せカード二枚

「……ドロー。永続罫発動、ウィキッド・リボーン！！ライフを800ポイント支払い、墓地のスターダストを効果を無効にして特殊召喚する！まあスターダストには関係ないけどね」

陰達LP7500 6700

「くっ……。スターダスト・ドラゴンとスターダスト・ドラゴンノバスターが一体ずつか……」

「さらに魔法カード、地砕きを発動。邪魔なダイヤモンドガイを破壊する！」

突如決闘場の地面が砕かれ守備表示だったダイヤモンドガイは破壊された。

「待っていたよ……この瞬間を！」

「？ どういう意味だい？」

「僕はD・シールドでダイヤモンドガイを戦闘から守っていた。そうなるとお前は必然的にカード効果で攻めて来る。それが僕の狙いだっただんだ」

(…何をやる気だ?)

「自分フィールド状に表側表示で存在するモンスターが効果によって破壊された時、手札からこのモンスターを特殊召喚出来る!!!  
現れよ!究極のシンクロキラー、機皇帝ワイゼル!!!」

翔夜のフィールドに、全身が白で覆われている巨大なロボットが現れた。

「なっ!?……………機皇帝…だと?」

流石の陰達も、翔夜が召喚したカードに驚きを隠せない様であった。

「…翔夜の奴、機皇帝のカードだと…馬鹿野郎が…」

「…瞬矢さん、機皇帝って?」

「……………第一回WRGPが開催された時に出場したチームの一組でチームニューワールドっていうチームがいたんだ。

その際チームニューワールドが使用したカードが機皇帝。だが決勝戦の後に色々あって機皇帝はこの世から姿を消した。

だけど今から20年程前、インダストリアル・イリユージョン社のカードデザイナーにより効果を調整されて機皇帝は復活した……だが機皇帝は元々超神秘的エネルギーを持っていて……常人が使用すると強制的にお互いが受けるダメージが本物の痛みに変わり、負傷者が続出した。その後インダストリアル・イリユージョン社が自主回収してお蔵入りになったカードだった。だけど……翔夜はあのカードを完全に使いこなしてはいない。闇のゲームに加えて機皇帝のダメージを受けたら翔夜の命が……」

そう言った瞬矢は翔夜を心配しているのがよく分かる様な哀しい表情をしていた。

「翔夜さん……何でそんなリスクを背負ってまで決闘を……」

「……翔夜……約束しただろ……機皇帝は使わないって……アカデミアのあの時に……」

・二年前・デュエルアカデミア本校・

卒業式を目前に控えたこの日、瞬矢と翔夜は授業をさぼって屋上で昼寝をしていた。

「瞬矢先輩、頼みがあるんですけど？」

寝っ転がりながら翔夜は瞬矢に聞いた。

「……またドローパン奢って下さいなんてのじゃないだろうな？この一年でどんだけ俺が奢ったと思ってるんだよ？」

「違いますよ。いつからそんなに金にうるさい人になったんですか？そんな性格だとプロになってから色んな人から嫌われますよ」

「お前のせいだよ！いつつ俺に奢らせやがって！！お前ん家金持ちなんだし自分で払えよ！！」

「はいはい、いつか気が向いたら考えますよ」

「全く……んで何だよ頼みって？」

「……卒業式の後……プロになる前に先輩と最後の決闘を決闘させてください」

翔夜はさっきまでとは違い、真剣な表情で瞬矢に頼んだ。

「……そんな事かよ。後で俺もお前に頼もうとした所だ。卒業式の日の午後七時、灯台の下で集合でいいか？」

「はい！！怖じけづいて逃げないで下さいよ？」

「お前こそ、卒業生成績ナンバーワンを舐めるなよ！」

……二人のそんなやり取りから数日後……

「・・・準備はいいか？」

「はい。瞬矢先輩、この決闘は僕の全ての力を出し切ります。在校生トップの決闘者として本気でいきますからね」

「俺も、卒業生トップとしてお前には負けられない！」

そう言い二人は決闘盤を構えた。

「決闘！！！」

瞬矢と翔夜、二人の決闘者が再び激突したのだった……

白熱する決闘・・・そして降臨するシンクロキラー（後書き）

次回、瞬矢や翔夜と機皇帝との間にあった出来事とは・・・

・この小説、サイトの流れに乗って転生物で書けば良かったかな  
あと今更後悔しています（T―T）

それでは次回もよろしくお願いしますm（）（）m

瞬矢VS翔夜・・・思い出のラスト決闘・・・1（前書き）

二年前、瞬矢が卒業式の後に行った翔夜との決闘。そして翔夜はあ  
るカードを・・・

今回から人が話す時に最初に名前を出すのをやめました。見やすく  
なっただと思いますが・・・

それではどうぞ。

12月28日：指摘を受けまして一部修正致しました。作者の知  
識不足を深くお詫び申し上げます。

## 瞬矢VS翔夜・・・思い出のラスト決闘・・・1

「決闘!!!」

「僕の先攻！ドロー！僕はモンスターをセット、カードを一枚伏せてターンエンド。」

翔夜LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード一枚

「俺のターン！相手フィールド上のみモンスターが存在することにより、手札からレベル・ウォリアーを特殊召喚！さらにレベル・ウォリアーがこの効果で特殊召喚された時、レベルを4として扱う！そしてチューナーモンスター、デルタフライを召喚！！

レベル4のレベル・ウォリアーにレベル3のデルタフライをチューニング!!!!」

デルタフライは光の輪になりレベル・ウォリアーを包み込んだ。

「（1ターン目からシンクロ召喚………やっぱり瞬矢先輩凄いや……）」

「雷光より生まれし気高き騎士よ、今こそその威光を放ち舞い降りよ!!!シンクロ召喚!!!輝け！ライトニング・ウォリアー!!!!」

瞬矢の場に、全身が鎧で覆われている光輝くモンスター、ライトニング・ウォリアー（ATK2400）が現れた。



「1ターンでシンクロ召喚……流石ですね……」

「行くぞ翔夜！！ライトニング・ウォリアーで攻撃！！ライトニング・ブラスト！！！」

ライトニング・ウォリアーが放った攻撃により、翔夜の裏側守備モンスターだったチューニング・サポーター（DEF300）は破壊された。

「さらに、ライトニング・ウォリアーがモンスターを破壊した時、相手の手札の数×300ポイントのダメージを与える。

今のお前の手札は4枚、よって1200ポイントのダメージを与える！！ライトニング・ペイン！！！」

「ぐっ……………」

翔夜LP8000 6800

「カードを二枚伏せターンエンド。」

瞬矢LP8000

場：ライトニング・ウォリアー（ATK2400）  
伏せカード二枚

「僕のターン！チューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚！デブリ・ドラゴンが召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下のモンスター一体を効果を無効にして特殊召喚出来ます！！」

前のターン破壊されたチューニング・サポーターを特殊召喚！！

この瞬間速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動します。僕はデッキから二体のチューニング・サポーターを特殊召喚。」

「・・・流石だな翔夜。俺のフィールドのモンスターはシンクロモンスターのみ。よって俺は特殊召喚出来ないという訳か・・・」

「先輩が僕との最初の決闘で見せてくれたプレイングです。

行きます！チューニング・サポーターはシンクロ素材になる時、レベルを2として扱う事が出来ます。一体のチューニング・サポーターをレベル2にし、三体のチューニング・サポーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！！！」

今度はデブリ・ドラゴンが光の輪となりチューニング・サポーターを包んだ。

「清らかな光を身に纏い、その光を全てを包み込む力へと変換せよ！！シンクロ召喚！！舞い踊れ！！ライトエンド・ドラゴン！！！」

翔夜の場合に、聖なる光を放つ神聖なドラゴン、ライトエンド・ドラゴン（ATK2600）が光臨した。

「ライトエンド・ドラゴン……………。Darkエンド・ドラゴンとは対となるカードか……………」

「チューニング・サポーターがシンクロ素材にされた事により、デッキから三枚ドロー！！！」

行きます！ライトエンドでライトニング・ウォリアーに攻撃！！この瞬間、ライトエンド・ドラゴンのモンスター効果発動！自身の攻撃力を500ポイントダウンすることで、戦闘を行う相手モンスター

ーの攻撃力を1500ポイントダウンさせる!!」

「何っ!?!」

ライトエンド・ドラゴン

ATK2600 2100

ライトニング・ウォリアー

ATK2400 900

「行け、ライトエンド!!ライトエンド・フォース!!!」

ライトエンド・ドラゴンが放った光のプレスにより瞬矢の場のライ  
トニング・ウォリアーは粉々になった。

「ぐああああっ!!!」

瞬矢LP8000 6800

「……カードを一枚伏せターンエンドです。」

翔夜LP6800

場：ライトエンド・ドラゴン(ATK2100)

伏せカード二枚

「やるな翔夜……俺のターン、ドロー!手札のボルト・ヘッジホ  
ツグを墓地に送り、クイツク・シンクロンを特殊召喚!

更に墓地に送ったボルト・ヘッジホツグは俺の場にチューナーモン  
スターが存在する時、墓地から特殊召喚出来る!現れよ、ボルトへ

ツジ・ホツグー！  
そしてレベル・ステイラーを召喚！！」

瞬矢の場にシンクロ素材となる三体のモンスターが並んだ。

「……本当に凄いです。あの状況からこんなにも立て直し、シンクロ召喚へと繋げて来る。

……… だけど僕は先輩を超えて行きます！！」

「やれる物ならやってみる！！」

レベル1のレベル・ステイラーとレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！！！」

「

（何が来るんだろ？）」

「……自らの使命が来たりし時、究極の破壊神が蘇る！！シンクロ召喚！！粉碎せよ！！ジャンク・デストロイヤー！！！」

「ジャンク・デストロイヤー……あの決闘に決着をつけたモンスターですね。」

「行くぞ！ジャンク・デストロイヤーがシンクロ召喚に成功した時、素材にしたチューナー以外のモンスターの数だけ場のカードを破壊出来る！！」

俺が破壊するのはライトエンド・ドラゴンと右側のリバーカードだ！！！」

ジャンク・デストロイヤーは衝撃波を放ちその二枚のカードを破壊した……が

「……自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターがカード効果で破壊された時、手札のこのモンスターは特殊召喚出来ます。」

翔夜は自分の手札から一枚のカードを掲げた。

「（このタイミングでモンスターを召喚だと？）  
何を出す気だ？」

「現れよ、機皇帝ワイゼル　！！！」

「機皇帝ワイゼル　だと！？」

瞬矢は翔夜の召喚したカードにかなり驚いてる様子だった。

「この前実家に帰った時有ったんですよ。便利な効果だしいいかと思ひまして。」

「バカ野郎……そのカードは……」

瞬矢が言い終わらない内に二人の足元に「」のマークが浮かび上がった。

「え……先輩、何なんですかこれ！？」

「……それが機皇帝の力だ。機皇帝を場に出した決闘はダメージが実際の物となる。昔から結構知られている事なのに何で分からなかったんだよ！？」

「…………… すいません瞬矢先輩。 そんな危険なカードだとは知らなくて…………… 僕はこの決闘を……………」

そう言つて翔夜はデッキの上に手を置こうとした。

「（サレンダー！？）

待て翔夜！？サレンダーするな！！」

「でも…………… 実際のダメージとなる決闘なんて…………… 先輩はもうすぐプロになるんですよ！もし怪我でもしたら……………」

「…………… 心配するな。 そんな脆い体じゃない。 むしろ、そんな伝説のカードと戦える事にワクワクする。」

「（瞬矢先輩……………）

分かりました、このまま決闘を続行します。」

「…………… ありがとよ。」

行け、ジャンク・デストロイヤー！！！機皇帝ワイゼル に攻撃！  
！デストロイ・ナックル！！！！」

ジャンク・デストロイヤーはその拳を機皇帝ワイゼル 目掛けて振りかざした。

「リバースカードオープン！！和睦の使者！！このターン、僕のモンスターは戦闘では破壊されずダメージも受けない。」

「くっ、ターンエンド。」

瞬矢LP6800

場：ジャンク・デストロイヤー（ATK2600）  
伏せカード二枚

「僕のターン！！機皇帝ワイゼル の効果発動！！1ターンに一度  
相手フィールド上に存在するシンクロモンスター一体を装備し、そ  
の攻撃力を得ます！！よってジャンク・デストロイヤーを装備！！」

ジャンク・デストロイヤーは機皇帝ワイゼル の内部から飛び出た  
触手により捕縛され機皇帝ワイゼル に吸収された。

「：ジャンク・デストロイヤー……」

「さらに機皇帝ワイゼル の攻撃力はジャンク・デストロイヤーの  
攻撃力、2600ポイント分アップします。」

機皇帝ワイゼル

ATK2500 5100

「攻撃力5100……だと!？」

「……行きます、機皇帝ワイゼル でダイレクトアタック!!!デ  
ストロイ・パニッシャー!!!」

機皇帝ワイゼル の拳が瞬矢に襲い掛かって行くのだった……

瞬矢VS翔夜・・・思い出のラスト決闘・・・1（後書き）

次回、圧倒的な力の機皇帝ワイゼル に対し瞬矢は・・・

次回もよろしくお願いします。



瞬矢VS翔夜・・・思い出のラスト決闘・・・2（前書き）

前回到引き続き、瞬矢VS翔夜（二回目）の決着です。

ジャンク・デストロイヤーを機皇帝ワイゼルに吸収された瞬矢は・  
・

それではどうぞ！

m 1 / 7 ・ 間違いに気づいたので修正致しました。 m ( | | )

瞬矢VS翔夜・・・思い出のラスト決闘・・・2

「行きます！機皇帝ワイゼル でダイレクトアタック！！デストロイ・パニツシャー！！！」

機皇帝ワイゼル (ATK5100) は自らの拳を瞬矢目掛けて振りかざした・・・

その刹那、二人が決闘している周りにどこからともなく光が放たれ、二人の足元の【 】のマークが消えた。

「何っ!？」

「この光は!？」

やがてその光は機皇帝ワイゼル にも当たったが、機皇帝ワイゼル はそのまま瞬矢に直接攻撃した・・・が、

「・・・痛く・・・ない？」

瞬矢は機皇帝ワイゼル の攻撃を受けても通常の決闘と同様に痛みは感じなかった。

瞬矢LP6800 1700

「(痛みをかんじていない?)

「・・・まさか今の光の影響で!？」

「みたいだな。今の何かは知らないがこれで怪我しなさそうだ。」

「じゃあ思いつきりやって大丈夫ですね、カードを一枚伏せてターンエンドです。」

翔夜LP6800

場：機皇帝ワイゼル（ATK5100）

ジャンク・デストロイヤー（機皇帝ワイゼル に装備中）  
伏せカード一枚

「（ライフが1700、ちょっとやばいな。）

俺のターン、ドロー！

カードを一枚伏せ、モンスターをセットしてターン終了。」

瞬矢LP1700

場：裏側守備モンスター

伏せカード三枚

「僕のターン！

機皇帝ワイゼル で裏側守備モンスターに攻撃！！デストロイ・パ  
ニッシャー！！！」

機皇帝ワイゼル は瞬矢の場の裏側守備モンスター、メタモルポツ  
ト（DEF600）を叩き潰した。

「メタモルポツトのリバーブス効果発動！互いのプレイヤーは手札を  
全て墓地に送り、デッキからカードを五枚ドローする！！！」

「手札補充されちゃったか……カードを二枚伏せターンエンドです。」

翔夜LP6800

場：機皇帝ワイゼル（ATK5100）

ジャンク・デストロイヤー（機皇帝ワイゼル に装備中）  
伏せカード三枚

「ドロー。リバーズカードオープン！！速攻魔法、禁じられた聖杯を発動！機皇帝ワイゼルの効果を無効にして攻撃力を400ポイントアップさせる！」

「やらせません！！機皇帝ワイゼルのモンスター効果発動！1ターンに一度相手の魔法カードの発動を無効にする！！」

「それでいい、機皇帝ワイゼルの効果を使えるのは1ターンに一度。リバーズマジック発動、地砕き。機皇帝ワイゼルを破壊する！！」

「破壊させません！！リバーズカードオープン、デストラクション・ジャマー！！手札を一枚捨て、フィールド上のモンスターを破壊する効果をもつカードの発動を無効にし、破壊する！！」  
デストラクション・ジャマーにより地砕きは破壊され機皇帝ワイゼルは守られた。

「……ならば、自分のフィールドにモンスターが存在せず、相手フィールド上にモンスターが存在することにより手札からバイス・ドラゴンを特殊召喚！」

そしてチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを召喚！！」

瞬矢の場に紫色の屈強な竜と戦闘破壊耐性を持つダーク・リゾネーターが現れた。

「さらにレベル5のバイス・ドラゴンにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング!!!」

戦士を束ねる白き巨人よ、同胞の力を受けてここに降臨せよ!!! シンクロ召喚!!! 守り抜け!!! ギガンテック・ファイター!!!」

瞬矢の場に、全身が白く、幾つもの修羅場をくぐり抜けてきたかのような強靱なモンスター、ギガンテック・ファイターが召喚された。

「ギガンテック・ファイターのモンスター効果。墓地の戦士族モンスター一体につき攻撃力を100ポイントアップする。

墓地の戦士族モンスターは三体! よって300ポイントアップ!!!」

ギガンテック・ファイター

ATK2800 3100

「攻撃力3100・・・でもまだ機皇帝には届かない!」

「手札より装備魔法、巨大化を発動!!! ギガンテック・ファイターに装備!

相手よりライフポイントが低いことによりギガンテック・ファイターの攻撃力に元々の攻撃力をプラスする!!!」

ギガンテック・ファイターの体は巨大化し、さらなるパワーアップを果たした。

ギガンテック・ファイター  
ATK3100 5900

「……攻撃力……5900!?!」

「行けっ!!ギガンテック・ファイター!!機皇帝ワイゼル に攻撃!オーバーリミット・ナックル!!!」

ギガンテック・ファイターと機皇帝ワイゼル は互いに拳を出し合ったが、攻撃力で勝るギガンテック・ファイターが機皇帝ワイゼルの粉砕した。

「くっ……機皇帝が……」

翔夜LP6800 6000

「どうだ翔夜!?俺はこれでターンエンド!!」

瞬矢LP1700

場：ギガンテック・ファイター(ATK5900)  
伏せカード一枚

「……僕のターン、ドロー!!来た!

僕はハネワタを攻撃表示で召喚。」

翔夜の場に、ワタポンに羽根が生えた可愛いモンスター、ハネワタ(ATK200)が現れた。

「(……ハネワタを攻撃表示?)

どういうつもりだ?」

「僕の勝利の為です。リバーズカード発動！！デストラクト・ポーション！！」

ハネワタを破壊してその攻撃力分ライフを回復する！」

ハネワタはその身を翔夜に捧げた。

「ハネワタ・・・お前の犠牲は無駄にはしない！！  
ハネワタがカード効果で破壊された事により、手札よりこのモンスターを特殊召喚します！！」

「（……この召喚方法は！？）  
まさか新たな機皇帝か！？」

「その通りです！！現れよ！！機皇帝グランエルを特殊召喚！！」

翔夜の場に、左手に銃口を携えた巨大なロボットの様なモンスター、機皇帝グランエルが姿を現した。

「……これが、新たな機皇帝……」

「機皇帝グランエルの効果発動！機皇帝ワイゼルと同じく、1ターンに一度相手フィールド上に存在するシンクロモンスターをこのカードに装備する！！」

機皇帝グランエルの胸部の【】の部分から触手が飛び出し、瞬矢の場のギガンテック・ファイターを捕獲した。

「くっ、ギガンテック・ファイター・・・」

「さらに、機皇帝グランエル の攻撃力は僕のライフポイントの半分だけアップし、装備したギガンテック・ファイターの攻撃力分上昇します!!」

機皇帝グランエル

ATK 5900

「これで終幕です!!機皇帝グランエル でダイレクトアタック!  
!グランド・スローター・キャノン!!!」

機皇帝グランエル は左手の銃口からエネルギーを溜め、瞬矢目掛けて放った。

「・・・翔夜、確かにこのターンでこの決闘は終わる。

だが!お前の敗北でだ!!」

畏発動!魔法の筒!!!相手モンスター一体の攻撃を無効にし、その攻撃力分のダメージを与える!!!これで俺の勝ちだ!!!」

瞬矢の前に攻撃を跳ね返す筒が現れた。

その時・・・

「リバーズカード発動!!!トラップ・スタン!!!」

「なっ!?!」

「トラップ・スタンによりこのターンこのカード以外の罠カードの効果は無効にします!!!」

瞬矢の前に存在していた魔法の筒はトラップ・スタンによって無効



にされて消滅した。

「……流石だ、翔夜。」

「……先輩……今まで生きてきて……最高の決闘でした……」

機皇帝グランエル（ATK5900）のダイレクトアタックにより決闘が終焉を迎えた。

瞬矢LP17000

- 決闘後 -

「……………負けたよ、翔夜。凄いな機皇帝って。」

「……………いえ、今回僕が勝てたのは機皇帝のおかげです。もしもこのカードが無かったら……………」

「そう言うな。俺もまだまだだな……………機皇帝にも勝てるぐらい強くなんなきゃな。」

「……………瞬矢先輩、僕はもう機皇帝は使いません……………あの光が無ければ今頃どうなっていたか……………」

翔夜にしては珍しく、本気で気落ちしている様だった。

「気にするな。プロになる前に今の決闘をしていて良かった。ありがとよ、翔夜。」

「先輩……」

翔夜は右手を前に出してポーズを決めた。

「ガツチャ！！最高の決闘でした！！」

「？………何の決め台詞だ？」

「遊城十代の時から代々家に伝わってる台詞です。」

「そうか………そろそろ本土行きの船が出るんだ。いい体験が出来たよ。じゃあな！」

「瞬矢先輩！！」

翔夜は船の下に行こうとする瞬矢を呼び止めた。

「………何だ？」

「………約束して下さい、僕は機皇帝を使わない新しいデッキを作ります。だから、またいつか二人で最高の決闘をするって！」

「………当たり前だろ。お前は俺にとって最高の好敵手であり………親友だ。」

今度は瞬矢が右手を前に出し、ポーズを決めた。

「ガツチャ！！また楽しい決闘しような！！」

瞬矢は翔夜に向かって笑顔で言った。

「……ありがとうございます……」

翔夜は目に涙を堪えながら答えた。

「今度会う時は今日のリベンジだ。今の決闘みたいになると思うなよ！！俺は今よりもずっと強くなるからな！！」

「僕も……機皇帝無しでも先輩に勝てる位強くなります！！」

「……またな！！」

「……はい！！」

そう言つて二人は別れ、瞬矢はプロへ、翔夜はまたデュエルアカデミアの生徒としての生活を送っていったのだつた……

- 二年後：現代 -

「（……あの時約束したのに、どうして使つた……）  
翔夜……勝てよ……」

瞬矢は目の前の状況にそう願うしかないのだった・・・

瞬矢VS翔夜・・・思い出のラスト決闘・・・2（後書き）

次回から翔夜VS陰達戦に戻ります。機皇帝ワイゼル に対して陰達のプレイングは・・・

次回もよろしくお願いします！

破滅への序章・・悪しき光と闇と絶望・・・1(前書き)

機皇帝ワイゼル、スターダスト・ドラゴンに続き今回伝説のカードが登場し、激化していく決闘の行方は・・・

それではどうぞ！

破滅への序章 - 悪しき光と闇と絶望・・・1

・・・陰達は翔夜が場に出した機皇帝ワイゼルを見て驚いていたが、やがて落ち着きを取り戻して翔夜に話し掛けた。

「・・・機皇帝ワイゼルか。まさか君が持っているとはね、もうこの世には無いと思っていたよ。」

「…………お前を倒すにはこのカードしか無いと思ったからね…………た  
とえ痛みが倍になっても…………」

翔夜がそう言い終わらない内に二人の足元に【 】のマークが浮かび上がった。

「…………これが、機皇帝の能力か…………」

「そうだ、これでダメージは実際の物となる。」

「闇のゲームに加えて機皇帝か…………面白いね。  
行け！スターダスト・ドラゴンノバスター！！機皇帝ワイゼルに  
攻撃！アサルト・ソニック・バーン！！」

スターダスト・ドラゴンノバスター（ATK3000）は口に大気  
中のエネルギーを溜め、機皇帝ワイゼル（ATK2500）目掛けて放った。

「させない！リバーカードオープン！！聖なるバリア・ミラーフ  
オースー！！」

相手が攻撃してきた時、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを  
全て破壊する！！」

「破壊効果は通用しないよ。スターダスト・ドラゴンのモンスター  
効果発動！このカードをリリースすることでフィールド上のカード  
を破壊する効果を持つカードの発動を無効にする。ヴィクテム・サ  
ンクチュアリ！」

聖なるバリア・ミラーフオースーによって張られたバリアは、粒子  
状になっていくスターダスト・ドラゴンによって阻止されようとし  
ていた。

「（掛かった！！）」

カウンター罫、天罰を発動！！手札を一枚捨て効果モンスターの効  
果の発動を無効にする！！」

「！？・・・そういう事が・・・」

スペルスピード3である天罰によりスターダスト・ドラゴンの効果  
は無効化され、聖なるバリア・ミラーフオースーは有効となりスタ  
ーダスト・ドラゴンノバスターの攻撃を跳ね返し、スターダスト・  
ドラゴンノバスターを破壊した。

「・・・流石だね。僕のプレイングを読んでそれを利用して僕のモ  
ンスターを全滅させるとはね・・・称賛に値するよ。」

陰達は翔夜のプレイングに正直な感想を漏らした。



「そりゃどーも、だけどさ。自分のエースモンスターが除去されたのに何でそんな無表情？少しは焦ったら？」

「……スターダスト・ドラゴンノバスターの効果発動。このカードが破壊された時、墓地のスターダスト・ドラゴンを特殊召喚出来る。フィールドに舞い戻れ！スターダスト・ドラゴン！！」

陰達の場に墓地からスターダスト・ドラゴンが現れ、フィールドを駆け上がった。

「（……機皇帝ワイゼル がいるのにどうして蘇生させたんだ？）再びスターダストを呼び戻しても僕の機皇帝の前には無力だ！」

「……モンスターをセット、カードを一枚セットしてターンエンド。」

陰達LP6700

場：スターダスト・ドラゴン（ATK2500）

裏側守備モンスター

伏せカード一枚

「僕のターン、ドロー！」

機皇帝ワイゼルのモンスター効果を発動！相手のシンクロモンスター一体をこのカードに装備する！

僕はスターダスト・ドラゴンを選択する！」

機皇帝ワイゼル は自身の胸部から触手を発射してスターダスト・ドラゴンへ迫った。

「チェーンしてリバーズカード発動。畏カード、デモンズ・チェーン。  
機皇帝ワイゼル を選択する。これにより、機皇帝ワイゼル は効果を無効にされ攻撃も封じられる！」

機皇帝ワイゼル は突如現れた鎖により身体の内を奪われた。

「くっ……ならばモンスター一体をセットしてターン終了。」

翔夜LP8000

場：機皇帝ワイゼル (ATK2500)

裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「……ドロー。」

カードを一枚伏せ、メタモルポットを反転召喚。リバーズ効果発動、互いのプレイヤーは手札を全て墓地に送り、五枚のカードをドローする。」

「ここで手札補充か……」

陰達と翔夜は互いにカードを五枚ドローした。

「手札のボルト・ヘッジホッグを捨て、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。デッキからチューニング・サポーターを特殊召喚。  
チューナーモンスター、エフェクト・ヴェーラーを通常召喚。自分の場にチューナーがいる時、墓地のボルト・ヘッジホッグは特殊召喚出来る。現れよ、ボルト・ヘッジホッグ！」

そしてこのターン自分がモンスターを召喚した事により、手札のワンショット・ブースターを特殊召喚！」

陰達はコンピューターのように淡々とカードをプレイした。

「あつという間に四体のモンスター……またシンクロ召喚か……」

「悪いがやらせてもらうよ。チューニング・サポーターはシンクロ素材になる時、レベル2として扱う事が出来る。

レベル1のワンショット・ブースター、レベル2のメタモルポットとチューニング・サポーターとボルト・ヘッジホッグにレベル1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

エフェクト・ヴェーラーは光の輪になり三体のモンスターを囲んだ。

「紅蓮の炎より具現されし森羅万象を司る覇者よ、今一度伝説を甦らせよ！」

シンクロ召喚！燃え尽くせ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

大量の炎と共にスターダスト・ドラゴンと並び称される伝説のモンスター、レッド・デーモンズ・ドラゴンが姿を現した。

「……これが伝説のレッド・デーモンズ・ドラゴン……凶々しいオーラだ……」

「チューニング・サポーターの効果で一枚ドロ。」

まだ終わらないよ。魔法カード、シールドクラッシュ発動。フィールド上に存在する守備表示モンスター一体を破壊する。僕が破壊するのは、君の裏側守備モンスター。」

何処からか出現した光の槍が翔夜の場の裏側守備モンスター、D-

HERO デイフェンドガイ（DEF2700）を貫通し、破壊した。

「くっ……デイフェンドガイが……」

「守備力2700のD・HEROか……惜しかったね。生き残っていればスターダストの攻撃を止められたのにね。」

「……来るなら来い！」

「言われなくとも。」

レッド・デーモンズ・ドラゴンで機皇帝ワイゼル に攻撃！アブソリュート・パワーフォース！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン（ATK3000）はその手に炎を溜め、機皇帝ワイゼル（ATK2500）目掛けて一気に解き放ち、機皇帝ワイゼル はその業火に焼かれ、破壊された。

「ぐあああつー！！」

翔夜LP8000 7500

レッド・デーモンズ・ドラゴンが放った炎は実体化し翔夜にもダメージを与えた。

「くっ……これ位……」

翔夜は足腰がふらふらになりながらも何とか耐えた。

「よく今の耐えたね。でも次はどうかな？」

行け、スターダスト・ドラゴン！翔夜にダイレクトアタック！！シ  
ューティング・ソニック！！」

スターダスト・ドラゴンは口の前に光のエネルギーを溜め、翔夜に  
向けて放出した。

「・・・華々しく散れ・・・遊城十代の子孫！！」

「・・・くっ！」

スターダスト・ドラゴンの攻撃が翔夜を襲った・・・

破滅への序章・悪しき光と闇と絶望・・・1(後書き)

次回、スターダスト・ドラゴンやレッド・デーモンズ・ドラゴンを  
目の前に翔夜の闘志は・・・

次回もよろしくお願いします！

破滅への序章・悪しき光と闇と絶望・・・2(前書き)

翔夜VS陰達、D・HEROはシグナーの竜を打ち崩せるのか・・・

遅くなりましたが、新年明けましておめでとうございます。今年も

【遊戯王・真相の果て・】をよろしくお願い致します。

それではどうぞー！！

破滅への序章・・・悪しき光と闇と絶望・・・2

「行け、スターダスト・ドラゴン！翔夜にダイレクトアタック！響け、シューティング・ソニック！」

スターダスト・ドラゴンは口の前に光のエネルギーを溜め、翔夜に向けて放出した。

「ぐああああああああああああ！！！」

スターダスト・ドラゴンの攻撃を受けた翔夜は吹っ飛ばされ、決闘場の壁にたたきつけられた。

「ぐっ・・・がはっ！！！」

翔夜はその衝撃で吐血し、全身の至る所に傷を負い肋骨も数本折れていた。

翔夜LP7500 5000

「まだ倒れてくれるなよ。僕はサレンダーは認めないよ。その痛みから逃れたかったら僕に勝つことだ。」

陰達は壁にもたれ掛かっている翔夜を見下して言った。

「くっ・・・こんな痛みは覚悟の・・・上だ・・・僕はお前に・・・勝利してみせる・・・」



翔夜は何とか立ち上がったが、体中に力が入らず常人には耐えられない程の痛みであった。

「翔夜……もう我慢出来ない!!!」

「瞬矢さん!?!」

客席で決闘を見ていた瞬矢は重傷を負った翔夜に居ても立っても居られず、千年盤を手に装着し決闘場に飛び降りた。

「もう止める陰達!!!この決闘は翔夜の負けでいい、だから次に決勝で俺と決闘しろ!!!」

「……瞬矢、それは無理だよ。闇のゲームに加えて機皇帝の力が発動したこの決闘はもはや解除不能。決着がつくまでそこで指をくわえて待っているがいい。」

「くっ……貴様!!!」

瞬矢は手にした千年盤で陰達に殴り掛かろうとした……

「止めてください瞬矢先輩!!!」

突然決闘場に響いた翔夜の声に、陰達に迫っていた瞬矢は動きを止めた。

「……僕はまだ戦えます。だから……こんな事で手を汚さないで下さい。」

「翔夜………何故お前がそこまでしてこいつに勝とうするんだ……」

「……僕はこれでターン終了だ。」

陰達LP6700

場：スターダスト・ドラゴン（ATK2500）

レッド・デーモンズ・ドラゴン（ATK3000）

伏せカード一枚

「……僕のターン、ドロー!!」

魔法カード発動!融合!手札のD・HERO ドグマガイとD・H

ERO B100-Dを融合!!

融合召喚!悲しい運命を終焉に導く竜騎士、Dragoon D・

END!!!!」

翔夜のフィールドに右手に大剣、左手に大きな第二の口を携えたD・HEROデッキの切り札であるDragoon D・END（ATK3000）が降臨した。

「Dragoon D・END……最上級のD・HERO同士が融合したモンスターか。」

「（スターダスト・ドラゴンがいる以上Dragoon D・ENDの効果は発動しても無意味。ならば……）」

Dragoon D・ENDでスターダスト・ドラゴンに攻撃!ア

ルティメット・D・バースト!!!」

Dragon D-ENDは右手の大剣による斬撃の衝撃波を飛ばし、スターダスト・ドラゴンを切り裂いた。

「……この程度のダメージか……」

陰達は実際のダメージを受けたものの、それを物ともせず涼しい顔をしていた。

陰達LP6700 6200

「……500ポイントとはいえダメージを喰らってたのにあの表情……」

ターンエンドだ。」

翔夜LP5000

場：Dragon D-END(ATK3000)

伏せカード二枚

「……ドロー。チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚。

ジャンク・シンクロンが召喚に成功した事により、墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する。蘇れ、エフェクト・ヴェーラー!!!」

陰達の場に二体の下級チューナーモンスターが並んだ。

「チューナーが二体……まだシンクロ召喚するのか……」

「見せてやるよ……レッド・デーモンズ・ドラゴンの究極の姿を！！  
レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル1のエフェクト・  
ヴェーラーとレベル3のジャンク・シンクロンをダブルチューニン  
グー！！！」

「ダブルチューニング!?」

ジャンク・シンクロンとエフェクト・ヴェーラーは炎の輪となりレ  
ッド・デーモンズ・ドラゴンを包み込んだ。

「竜と悪魔が交叉せし時、この世を統べる王が誕生する。覇者の力  
をここに示せ！！シンクロ召喚！！究極の破壊神、スカーレット・  
ノヴァ・ドラゴン！！！」

その昔伝説の決闘者【ジャック・アトラス】が使用していた絶対無  
敵の竜、スカーレット・ノヴァ・ドラゴン（ATK3500）が燃  
え盛る炎の中から姿を現した。

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は墓地のチューナーの  
数×500ポイントアップする。墓地のチューナーは三体。よって  
スカーレット・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

ATK3500 5000

「攻撃力5000!??Dragon D-ENDを上回った!?!」

「行け!スカーレット・ノヴァ・ドラゴン!!!バーニング・パワー

フオース!!」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは口から灼熱の炎を放ち、Dragon D-ENDは苦しみ悶えながら破壊されていった。

翔夜LP5000 3000

「ぐあああああああ!!」

「翔夜!!!」

翔夜は2000ポイントのダメージを受けた事によってまたも全身に傷を負った。

「・・・君はまだ僕を倒そうとする意志が弱いね。人間なんてその気次第で何でも出来るのに。ターンエンド。」

陰達は翔夜に向かって少し落胆した様子で言った。

「くっ・・・まだだ!!僕のターン、ドロー!!」

このスタンバイフェイズ、墓地のDragon D-ENDの効果果発動!墓地のD-HERO ダイヤモンドガイを除外してこのカードを場に特殊召喚する!!」

翔夜の決闘盤の墓地ゾーンが光だし、その中からDragon D-ENDが不死鳥の如く甦った。

「さらにリバーズカード発動!速攻魔法、禁じられた聖杯!!このターンのみスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの効果を無効にし、攻

撃力を400ポイント上昇させる!!」

「Dragoon D-ENDの効果を使っつもりだね・リバー  
ス翼発動、亜空間物質転送装置。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンをエンドフェイズまで除外する。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは不可思議な装置が取り付けられ、  
そのまま異次元へと送られていった。

「……ならば、Dragoon D-ENDでダイレクトアタック  
!!アルティメット・D・バースト!!!」

Dragoon D-END(ATK3000)は先程と同じく右  
手の大剣で斬撃を放ち、衝撃波となって陰達に直撃した。

陰達LP6200 3200

攻撃の衝撃で周りは煙が立ち込め、陰達の姿が見えなくなった……  
…その時……

「……やっとオレの出番か……待ちわびたぞ。」

何処からか悍ましい邪悪な声が翔夜や瞬矢には聞こえたが、それと  
同時にフィールドの煙の中から二人の人影が現れた。

「なっ……!?一体何が?フィールド上にはDragoon D-  
ENDしか存在しないはず……」

段々と煙も晴れていき陰達のフィールドに二体のモンスターが存在

するのが見えた。

だがそれ以上に翔夜達が驚いたのは陰達の状態であった。先程まで白髪だった陰達の髪がいつの間にか闇のように染まり、体中から闇のオーラを放出していた。

「（なんだ・・さつきまでとは違う奴の凶々しい雰囲気は！？）  
・・・陰達・・お前何をした？」

陰達の変容ぶりに状況が掴めなかった瞬矢は問いただした。

「久しぶりにオレが出て来た、それだけの事だ……と言っても通じないか。

まあいい、オレはこの決闘に決着をつけに来た……このモンスターでな！！」

…陰達のフィールドには闇と光の相対する冥府からの使者がうつすらと姿を現していた。

「くっ……そのカードだったか……闇の原因は！」

翔夜は何かを理解したかのように呟いた。

「自分の場にカードが存在せず、相手から戦闘ダメージを受けたことにより、冥界より現れし騎士が貴様を敗北に導く！手札より冥府の使者ゴーズを特殊召喚！！そして受けたダメージと同じ値の攻撃力、守備力をもつ冥府の使者カイエントークンを特殊召喚だ！！！」

陰達の声と共に二体の冥府の使者がはつきりと姿を現し、それぞれから邪悪な闇と光のエネルギーが放たれるのであった……

破滅への序章・悪しき光と闇と絶望・・・2（後書き）

次回、翔夜VS陰達戦の決着です。冥府の使者が降臨した決闘の行方は……

こんな小説でもお楽しみ頂けたら幸いです。

次回もよろしく願います！



破滅への序章・悪しき光と闇と絶望・・・3（前書き）

冥府の使者が召喚され、追い詰められる翔夜。そして決闘の果てに  
瞬矢は・・・

今回、非常に残酷な描写がございます。苦手な方は御覧にならない  
で下さい。

それではどうぞ。

破滅への序章・・・悪しき光と闇と絶望・・・3

陰達の場合には冥府の使者ゴーズと冥府の使者カイエントークンが冥界より降臨し、翔夜を威圧するように睨みつけていた。

「これが……冥府の使者……」

「受けた戦闘ダメージがそのまま冥府の使者カイエントークンの攻撃力・守備力となる！受けたダメージは3000、よって冥府の使者カイエントークンの攻撃力・守備力は3000ポイントだ！！」

冥府の使者カイエントークン

ATK? 3000

「くっ・・・カードを二枚セットしてターンエンド。」

「このエンドフェイズに亜空間物質転送装置により除外したスカレッド・ノヴァ・ドラゴンは場に戻る。」

翔夜LP3000

場：Dragoon D-END(ATK3000)

伏せカード四枚

「オレのターン、ドロー！！この決闘・・・このターンで終焉を迎える！！」

魔法カード、カップ・オブ・エース発動！コイントスを一回行い、表が出ればオレが、裏が出れば貴様がカードを二枚ドロウする！」

陰達はコートポケットからコインを取り出し、コイントスを行った。

「表が出た事によりオレが二枚ドロする！」

バトルだ！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンでDragon D

- ENDに攻撃！バーニング・パワーフォー！」

「（……今だ！）」

リバーカードオープン！！次元幽閉！攻撃してきた相手モンスター一体をゲームから除外する！！」

攻撃を行うスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの前に異次元への扉が開かれ、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンはその中に吸い込まれそうになっていた。

「手札より速攻魔法、神秘の中華鍋を発動！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンをリリースしてその攻撃力が守備力分のライフを回復する！オレは攻撃力を選択する！！」

「……だったらチェインして速攻魔法、非常食を発動。伏せカード二枚と次元幽閉を墓地に送り、ライフを3000ポイント回復する！」

翔夜LP3000 6000

陰達LP3200 8200

「（……ライフは回復されたがたとえカイエンがD-ENDと相打ちになり、ゴーズでダイレクトアタックされたとしても僕のライフは

残る。次のターンでD・ENDを復活させれば、まだ勝機はある。」

「安心するのはまだ早いぞ。言った筈だ！このターンで終わりだとい！」

手札より速攻魔法、デーモンとの駆け引きを発動！」

「なっ！？……そのカードは……」

「レベル8以上の自分のモンスターが墓地に送られたターンに発動可能！！」

手札またはデッキからバーサーク・デッド・ドラゴンを特殊召喚する！！」

全身からこの世の負のオーラを放つ漆黒の竜、バーサーク・デッド・ドラゴン（ATK3500）が陰達の場に舞い降りた。

「行け！！バーサーク・デッド・ドラゴン！！Dragon D  
- ENDに攻撃！ダークネス・スフィア・フォース！！」

バーサーク・デッド・ドラゴンは顔の前に球状の闇のエネルギーを溜め、Dragon D・END（ATK3000）に向けて放った。

「ぐあああああ！！」

翔夜LP6000 5500

「翔夜！！……これ以上は止める陰達！！翔夜はもう身体が限界なんだ！この決闘を止めてくれ！！」

「…邪魔だ!!」

「ぐああっ!!」

瞬矢は陰達が放った殺気により金縛りに遭い身体の自由を奪われた。

「そこで大人しく見ている!!」

カイエントークンでダイレクトアタック!ルインシャイニング・セイバー!!」

冥府の使者カイエントークン(ATK3000)は自身の剣に光のエネルギーを帯びさせ、翔夜に斬撃を放った。

「翔夜ああああ!!」

・瞬矢が叫んだ瞬間、瞬矢の胸ポケットから何かが光りだした。

「!?!?!こいつは……」

「何だその光は!?!」

「……お前……出て来るな……何の為に瞬矢先輩にお前を預けたと思っ……」

三人がそれぞれの反応をする中、その光は翔夜を包み込み冥府の使者カイエントークンの実際のダメージを防いだ。

翔夜LP5500 2500

そして三人には見えた……光の中に翔夜が決闘前に瞬矢に預けた

モンスターであるハネワタのカードが翔夜を護ろうとしているのを・

「ちっ、カードの精霊か！邪魔をするな！！」

陰達はその手から光と闇の入り混じったエネルギー波を放ち、翔夜を護っていたハネワタを消滅させた。

「ハネワタあああああ！！！」

「精霊の心配をする前に自分の事を心配したらどうだ？

死ね、遊城翔夜！！冥府の使者ゴーズで貴様に直接攻撃！！！！ヘル・  
ダークネス・セイバー！！！！」

「翔夜あああああああああ！！！！」

「ぐっ……」

迫り来る冥府の使者ゴーズを目の前にして翔夜は咄嗟に目を閉じ、左手に装着している決闘盤を前に出して盾のようにした。

次の瞬間、翔夜は決闘場に金属音が響くのを感じた。目を開くと決闘盤が床に落ちている。先程の金属音は決闘盤が落下した音だと理解するのにそう時間は掛からなかった。

だが決闘盤には傷が付いておらず、ゴーズが切り裂いた跡は無かった。不審に思った翔夜は決闘盤を拾おうとしたが、その時翔夜は初めて気づいた……左手の感覚が無い事に……自分の左手が決闘盤に装着したままである事に……周りに自分のものであるう鮮血が飛び散っている事に……



が、皆はその前に既に亡くなっていたというのを警察から聞いた。それらを考慮に入れると瞬矢の頭に一つの考えが浮かんだ。

「…あれは、お前じゃ無いのか？」

「君はどうやらあの日の大事な記憶を無くしているようだね。僕が思い出させてあげるよ、あの日の忌まわしい出来事を………」

そう言うと陰達は瞬矢の頭に光と闇の入り混じった球体を作り出して瞬矢に放った。

その刹那、瞬矢は思い出した・・・三年前のあの日を・・・何が起こったのかを・・・

瞬矢の顔は一瞬にして青白くなり、目は輝きを失った。絶望を感じている瞬矢を見ていた陰達は言った。

明日の決勝戦、君がその絶望を乗り越えて僕と決闘するのを待っているよ

それからいつまで経っても瞬矢は動こうとしなかった。客席から四つ葉が来て話し掛けても変わらなかった。



瞬矢はずっと同じ事ばかり呟いていた。  
何かに取り付かれた様に淡々と・・・

あの日、皆を・・・父さんやミツバ姉さん、  
総司兄さんが死んだあの  
日・・・・・・・・

『殺したのは俺だ』

破滅への序章・・悪しき光と闇と絶望・・・3 (後書き)

次回、三年前に起きた事件の真相とは・・・

この間の遊戯王5D'sはずっと私が望んでいた龍亞のシグナー化  
が起こりました。感無量です(T-T)

次回もよろしくお願い致します！

傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・1（前書き）

更新遅くなってしまい申し訳ありませんでした。m（| |）m

何とか更新出来ましたのでこれからもよろしくお願い致します。

それではぶっぞー！

傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・1

「…知ってしまったか」

まだ早い・・・あいつらめ・・・長い間俺が封印していた物を解放するとは・

瞬矢に何とかこれ乗り越えさせなければ・・・“アイツ”の為に・・・

それが俺がこの世で果たすべき使命なのだから……………

・・・決勝戦当日・・・

この日は瞬矢が心の底から望んでいた陰達とのIDGP決勝戦当日であった。しかし……………

「……………」

出場決闘者控室で瞬矢は決闘盤を抱えたままぴくりとも動こうとし

ていなかった。床に座り込んで壁に背中を預けている瞬矢の表情は、到底生きている人間の表情とは言えない物であった。

何より変わっていたのはその目であった。以前は決闘者としての闘争心溢れる様な目をしていた瞬矢の目は光を失い、死人の様であった。

…絶望・悲しみ・恐怖……それら負の感情全てを超越したかのような瞬矢の表情には昨日までの面影が無かった……

「……やっぱり、出来なかった……」

瞬矢を何とか立ち直らせようと昨日から必死に努力していた四つ葉だったが、決勝には間に合わず依然として瞬矢の表情は変わらなかった。

「……一体どうしてこんな事に……」

四つ葉がそう呟いた時に部屋のドアが乱暴に開けられた。中に入ってきたのは瞬矢が決闘場に来ないのを不審に思った海馬コーポレーション総帥、海馬彼方であった。

「……海馬さん……今瞬矢さんは……」

四つ葉の言っている言葉を無視し、海馬は怒りを露にした表情で瞬矢の所に行き、瞬矢の胸倉を掴んだ。

「……何だその為体は！！この俺に勝利した決闘者が、何だその様は！！！」

昨日貴様には優勝の報告をしると行つたはずだ！敗北どころか決闘もせんとは・・貴様を真の決闘者として認めたこの俺が間違いだつたわ！！！！」

そう言うと海馬は瞬矢の頬を思いつ切り殴り付けた。

「…瞬矢さん！！」

四つ葉が叫ぶも、瞬矢は殴られた痛みも感じていない様で何の反応もしなかった。

「…失望したぞ……貴様となら生涯互いに渡り合える好敵手となれると思つたのだがな……」

海馬は少し寂しそうにして言うとそのまま瞬矢に背を向けた。

「…明日のこの時間まで待つてやる……決勝戦は明日に延期と報道しておくからな……」

そう言い残し海馬は控室から退出していった。

「ほう……海馬彼方……なかなか粋な所のある男だな。」

「！！……貴方は！？」

突然四つ葉の背後から声が聞こえ、驚いた四つ葉が振り向くと、大会前に瞬矢に数枚のカードを渡した黒いフードを被つた男が立っていた。

「いつの間にも此処に？」

「つい今し方な。それより今は瞬矢だ。少し厄介な事になった……地獄に堕ちたかのような苦しみ、まるで生き地獄を味わっている様だな……」

男は殴られて床にうつ伏せになっている瞬矢を起き上がらせ、先程と同じ様に壁にもたれさせた。「……こいつは三年前の事件の記憶を取り戻してしまった。何とかしてそれを乗り越えさせなければ……」

「？……三年前何があつたんですか？」

「……言うより見た方が早いな、あの日何が起こつたのかを」

男は自分の決闘盤に罫カード、真実の眼をセットした。

「この部屋に、瞬矢の取り戻した記憶を映し出す！！」

「……瞬矢さんの取り戻した記憶……？」

「そつだ。この真実の眼が奴の記憶を照らし出す」

男が言い終わらない内に真実の眼が実体化し、部屋中に光が放たれた。

「うう……」

あまりの眩しさに四つ葉は思わず目を閉じた。

数秒後に目を開いた四つ葉だったが周囲の光景に戸惑いを隠せなか

った。

「此処は……………」

「…三年前のサイバー流道場。かつて瞬矢が決闘を学んでいた場所だ……………」

二人の居る近辺にはサイバー・ドラゴンを始めとするサイバー流モンスターのモニュメントや、歴代のサイバー流師範の写真等が飾られており、その歴史の深さを物語っていた。

そしてその部屋の奥には……

「瞬矢……さん!？」

部屋の奥にはまだあどけなさが残る三年前の瞬矢がいた。そして瞬矢の横には四つ葉が知らない男の人が瞬矢と何やら話していた。

(瞬矢さんの横にいる人……誰だろ?)

「…あれは須崎 俊矢【すぎき としや】、瞬矢の父でありサイバー流道場の講師だった男だ……」

四つ葉の気持ちを察してか、男は説明した。

「……一体貴方は誰なんですか?どうしてこんな事が出来て私にこれを見せようとするんですか?」

四つ葉は先程からずっと疑問に思っていた事を思い切って聞いてみた。

「……………今はまだ全ては言えんがな……………西上東渡【にしうえ とつとど】とでも名乗っておくか。お前には瞬矢を救うのに一役買って貰うぞ」



「…一体どうすれば？」

「そう焦るな。まずはこれから起こる事をしっかり見ることだ」

そう言うと西上と名乗った男は二人が話している所の階段を指差した。

「…見ている。もうすぐ現れる筈だ……」

「…えっ……！？」

四つ葉は目を見開いた。目の前の光景が信じられなかったのだ。瞬矢達がいるすぐ側の階段から姿を現したその人は……

「あれは……私？」

現れた人物は四つ葉と同じく肩まで掛かった亜麻色の髪に端正な顔立ちをした、四つ葉と瓜二つの容姿の女性であった。

「違う、あれはお前ではない」

「…じゃああの私に似てる人は誰なんですか？」

「あの女は藤堂【とうどう】ミツバ……瞬矢の幼なじみであり、当時のサイバー流道場の師範を務めていた元プロ決闘者、藤堂縁【とどう えにし】の娘でありそして……」

西上は四つ葉に改めて向かい合った。

「…四つ葉、お前は藤堂ミツバの実の妹であり、藤堂縁の実子だ。」

傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・1（後書き）

次回、三年前にサイバー流道場で起こった事件の真相……そして瞬矢の生き地獄の訳は……

次回もよろしくお願いします!!

傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・2（前書き）

西上が見せる瞬矢の記憶、その中で起こったサイバー流の惨劇とは・  
・

それではどうぞー！

## 傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・2

「…………私が、藤堂ミツバの妹でサイバー流道場師範の娘？」

「そつだ、まあ覚えていないのも無理は無いか。お前は記憶を失ったからな。お前はサイバー流よりも天使族で戦いたいと言って道場では学ばず、デュエルアカデミアネオ童実野校に通っていたんだ」

そう言われても四つ葉は合点がいかなかった。何故自分は記憶を失ったのか、何故誰も自分を搜索してくれなかったのか…

「焦るな、これからそれをお前に見せる、」

「！！…………心が読めるんですか？」

自分の考えている事が相手に露見されている事に四つ葉は驚嘆した。

「…結果的にそうせざるを得ないんだ、俺が存在する為にはな」

そんな話をしていると父と話していた瞬矢は何やら怒りの表情を浮かべてこちらに走ってきた。

そして四つ葉にぶつかつた・・・かに見えたが瞬矢は四つ葉をすり抜けた。

「えっ？今、私ぶつかられたはずじゃ……………」

「言つただろ、瞬矢の取り戻した記憶を映し出すと。簡単に言えば部屋全体にソリッドビジョンを映しているような物だ。人や物との接触は出来ない」

西上がそう言った瞬間、周りの風景が薄暗くてただっ広い所へと変化した。

「!!…ここは!？」

「サイバー流道場の地下にあるあらゆるカードの保存がされていた場所、瞬矢が向かっていた所だ。」

瞬矢は地下室まで来ると持っていたIDカードでロックを解除し一つのデッキを取り出した。  
その時……

「!?!?…あつ、ああ……あれは……何？」

「この道場に封印されていた異次元よりの闇……瞬矢はその封印を解いてしまった」

瞬矢が手にしたデッキから闇のエネルギーが放たれ、人の様相ではない何か瞬矢の体内に入ってしまった。  
驚く間もなく闇に支配された瞬矢はデッキからカードを一枚取り出し取り付けていた決闘盤にセットした。

「…いよいよか……」

西上はそう呟いた瞬間、闇に洗脳され悍ましい形相の瞬矢は言った。  
『ライトニング・ボルテックス』と。

「またも周囲の光景が変化し、たくさんの決闘盤を付けた門下生が決闘をしている場所に移った。」

「ここは……決闘場？」

「そうだ、そして第一の惨劇が起こった場所だ。」

「ここから先はお前には耐えられんかもしれん、それを承知で頼むぞ」

二人が見ていた先には多くのサイバー流門下生や講師が決闘盤を身につけ、プロリーグで使用されるかのような巨大な決闘場で皆決闘をしていた。だが……

「…ん？…おつ、おい！何だありやあ！？」

「なんだよお前、劣勢だからつてごまかす気か？」

「いいから見て見るよ！天井に雷が溜まってんだよ！」

「何寝ぼけた事言つてんだよ。天井に雷が有る訳……何だありやあ！？」

決闘していた二人の門下生が気付いたのを皮切りに、他の門下生も天井付近の雷の存在に気がつき始めた。

「…くっ……四つ葉、やはりお前は見るな！！」

「……分かりました」

四つ葉は今後の出来事を予想し、西上の言葉に素直に従った。そして……

「あつ、うわあああああああああああああああ！……！」

「斎賀！！！！ぐっ……ぐあああああああああああああああ  
あ！！！！」

突如天井付近から墜ちてきた雷により決闘場にいたほとんどの人が感電死した。

ただ二人の門下生を除いては……

そして更に場面が変わった。

「……此処は……地下への階段？」

「そうだ、そして第二の惨劇がもうすぐ始まる」

ライトニング・ボルテックスの攻撃を防いだ二人の決闘者、藤堂ミツバと哀川総司【あいかわ そうじ】は悲嘆に暮れながらもセキユ



リテイに連絡し、異変を確かめるべく道場の地下へと進んでいた。

「・・・瞬ちゃん、無事かな」

「大丈夫だつて。瞬矢ならどうにかして生き延びてるよ。だが、俊矢さんの事を知ったらどうなるか……」

そんな事を話していると地下室に辿り着き、扉を開けた二人は絶句した。

闇の気配を感じて地下室へと赴いていたがそこで待ち構えていたのは他でも無い、凄まじい闇のオーラを放つ瞬矢であったからだつた。

「…瞬……ちゃん？」

恐る恐るミツバが聞いた。

「ほう、まだ生き残っていた人間がいたか。どうやって生き延びたのかは知らんが、オレの計画の障害になる故、今此処で死んでもらうぞ」

瞬矢のものとは思えない悍ましい声でそう言うと瞬矢は闇のオーラを放つデッキからカードを取り出し、先程と同じく決闘盤に魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動させた。

「くっ……ミツバ！あいつは瞬矢じゃない！恐らくはあのデッキに宿っている闇の意思によって操られている……！」

「瞬ちゃん……私、絶対助けるからね……！」

「行くぞミツバ！」

ミツバと総司はそれぞれ自分のエクストラデッキからカードを引き、決闘盤にセットした。

「お願い、サイバー・エンドー!!」

「頼んだぜ、サイバー・ダークー!!」

二人はそれぞれ表サイバー流と裏サイバー流の究極モンスターであるサイバー・エンド・ドラゴンと鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを召喚した。

「ミツバ、すぐにあの闇払ってやるよ!!」

「任せる総司!!」

実体化した二体の機械龍は二人に語りかけた。

「頑張つて、サイバー・エンド! エターナル・エヴォリユーション・バースト!!」

「行けサイバー・ダーク! フル・ダークネス・バースト!!」

サイバー・エンドとサイバー・ダークは口からエネルギー波を放ち、ライトニング・ボルテックスを打ち消した。

「…成る程、カードの精霊か。道理で一筋縄ではいかない訳だ、ならば!!」

瞬矢を洗脳した闇の意思は右手を左手首に翳すとそこに全身が黒で

塗り固められた決闘盤が出現した。

「決闘か………始める前に教える。貴様は誰、いや何だ!？」

「オレか?……オレの名はデザスター。かつて12個存在する次元の内1つを支配していた者。しかしオレは今の今まで封印されていた。正しき闇の力を持つ者の手によってな。

だがオレは今日復活した!ヤツを亡き者にした今、この瞬矢とか言う餓鬼を僕に使わせて貰おうか」

「瞬ちゃんは好きにさせない!デザスター、言ってる事訳分かんないけど瞬ちゃんの為に貴方を倒す!」

「…俊矢さんや皆の弔いの為、この裏サイバー流デッキでお前をぶっ倒す!」

二人はそれぞれの決闘盤を構えた。

「始めようか、究極の闇のゲームを!!」

「『決闘』」

瞬矢に憑いたデザスターと若き二人のサイバー流決闘者が決闘を開始するのだった……

傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・2（後書き）

次回、ミツバ&総司VSデザスターの決闘が始まります。果たして闇のゲームの行方は……………

週一ペースの更新ですが次回もよろしくお願いします!!

傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・3（前書き）

瞬矢に取り憑いたデザスターVSミツバ&総司戦になります。

プレイングミスや誤字脱字等ありましたらご報告をお願い致します。

それではごっぞー！

## 傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・3

「「「決闘!!!」」」

「オレの先攻、ドロー！」

モンスターをセット、カードを二枚伏せターンエンド」

デザスターLP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「俺のターン、ドロー！」

速攻魔法、手札断殺を発動！全てのプレイヤーは手札二枚を墓地に送り、デッキから二枚ドローする！」

「いきなり手札交換か。こちらにとっても有り難いな」

三人はそれぞれ手札を交換した。

「さらに俺はサイバー・ダーク・ホーンを召喚！」

総司の場に鋭い触角を持つサイバーダークの一体、サイバー・ダーク・ホーンが現れた。

「サイバー・ダーク・ホーンのモンスター効果発動！召喚に成功した時、墓地のレベル3以下のドラゴン族モンスター一体を装備し、そのモンスターの攻撃力分攻撃力をアップする！」

手札断殺で墓地に送ったハウンド・ドラゴンを装備する」

サイバー・ダーク・ホーンは墓地からハウンド・ドラゴン（ATK 1700）を引きずり出し、自身の触手からエネルギーを吸収した。

サイバー・ダーク・ホーン

ATK 800 2500

「レベル4で攻撃力2500・・・これが裏サイバー流のモンスターか・・・」

「永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョンを発動！鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを選択し、デッキから融合素材となるサイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールを墓地に送る。

そして発動後二ターン後の自分のスタンバイフェイズに選択したモンスターを特殊召喚する！

カードを一枚伏せ、ターンエンド」

総司LP 8000

場：サイバー・ダーク・ホーン（ATK 2500）

ハウンド・ドラゴン（サイバー・ダーク・ホーンに装備）

未来融合・フューチャー・フュージョン（鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン対象）

伏せカード一枚

「私のターン！サイバー・ヴァリーを攻撃表示で召喚！

そして私も永続魔法、未来融合・フューチャー・フュージョン発動

！対象はサイバー・エンド・ドラゴン！よってデッキからサイバー・ドラゴンを三体墓地に送るわ！カードを一枚伏せてターン終了」

「貴様のエンドフェイズに速攻魔法、終焉の焔を発動。オレの場に二体の黒焔トークンを守備表示で特殊召喚！」

「くっ……闇属性のリリース専用のトークン…何を出す気なの……」

場：サイバー・ヴァリー（ATK0）

未来融合・フューチャー・フュージョン（サイバー・エンド・ドラゴン対象）

伏せカード一枚

「オレのターン！！行くぞ、二体の黒焔トークンをリリース！！クリアー・バイス・ドラゴンをアドバンス召喚する！！」

二体の黒焔トークンは粒子状になり、巨大な水晶に身を納めるクリアー・バイス・ドラゴン（ATK0）が召喚された。

「…攻撃力0の最上級モンスター……一体どんな効果を……」

「小娘よ、教えてやろう。このカードの真骨頂はこのカードとのコンボにある。手札よりフィールド魔法、クリアー・ワールドを発動！！」

突如上空に巨大なクリスタルが出現し、その中から鋭い光が放たれ、周囲の光景が一変した。

殺風景だった地下室は果てしない青空へと変わり、床は延々と続く雲へと変化した。

「…此処は……雲の上？」

「その通りだ。貴様らの最期を飾るのに相応しいフィールドだろう。」



汚れの無いこの地で死ねる事を光栄に思っただな！

クリアー・バイス・ドラゴンでサイバー・ダーク・ホーンに攻撃！  
！」

「馬鹿な！？攻撃力0のモンスターでサイバー・ダーク・ホーンに攻撃だと！？」

総司はデザスターが攻撃力0のクリアー・バイス・ドラゴンで攻撃する意図が分からなかった。

「クリアー・バイス・ドラゴンのモンスター効果発動！攻撃を行う時、ダメージ計算時のみクリアー・バイス・ドラゴンの攻撃力は攻撃対象モンスターの攻撃力の倍となる！！」

「何！？」

クリアー・バイス・ドラゴン

ATK 5000

「攻撃力5000だと！？」

「行け、クリアー・バイス・ドラゴン！！クリーン・マリシャス・ストリーム！！」

クリアー・バイス・ドラゴンの口から放たれた闇の波動がサイバー・ダーク・ホーンを飲み込んだ。

「ぐあああああ！！」

「総司！！」

総司LP8000 5500

「ぐっ・・・何だ・・・この痛みは・・・」

総司は今まで感じたことの無い衝撃にひどく驚いた様子であった。

「始めに言った筈だ、闇のゲームだと。ライフポイントのダメージはそのままプレイヤーへの実際のダメージとなる。

そしてライフが0となる時は決闘と同じく、そのプレイヤーの人生も終焉という訳だ」

「闇のゲーム・・・そんな決闘・・・私、絶対認めない!!」

「……………俺もだ。生死を懸けて行う決闘など、それは最早決闘ではない!!この俺が裏サイバー流の奥義を以て貴様を消し去る!!」

「やれる物ならやってみろ!キサマらごとき若僧にこのオレを止められる物か!!」

「サイバー・ダーク・ホーンは装備モンスターを墓地に送る事で戦闘による破壊から守られる!ハウンド・ドラゴンを墓地に送る!!」

サイバー・ダーク・ホーン

ATK2500 800

サイバー・ダーク・ホーンはエネルギーを吸収していたハウンド・ドラゴンがいなくなり弱体化した。

「その様な効果があったとはな……………オレは装備魔法、ミスト・ボデ

イを発動。クリアー・バイス・ドラゴンに装備させる事で装備モンスターは戦闘によっては破壊されない！」

クリアー・バイス・ドラゴンの全身は霧状になり、戦闘破壊耐性を身につけた。

「守りを固めてきたか……」

「オレはこれでターン終了だが発動中のフィールド魔法、クリアー・ワールドの効果によりオレは自分のエンドフェイズ毎に500ポイントの維持コストを支払う」

デザスターLP8000 7500

「ライフを払ってまでクリアー・ワールドを維持した……」

「それ程あのカードは強力な効果を持つてるみたいね……」

デザスターLP7500

場：クリアー・バイス・ドラゴン（ATK0）

ミスト・ボディ（クリアー・バイス・ドラゴンに装備中）

伏せカード一枚

クリアー・ワールド

「俺のターン、ドロー！」

俺はサイバー・ダーク・キールを召喚！モンスター効果発動！ホーンと同様にキールが召喚に成功した事で、墓地からハウンド・ドラゴンをこのカードに装備させる！」

サイバー・ダーク・キールは先程のホーンのようにハウンド・ドラゴ

ンを装備して強化された。

サイバー・ダーク・キール

ATK800 2500

「よし！そのまま行っちゃえ総司！」

「戦闘破壊が駄目でもダメージは受けてもらうぜ！行け、サイバー・ダーク・キール！！クリアー・バイス・ドラゴンに攻撃だ！！」

サイバー・ダーク・キールは自身の尾の部分で鞭のようにデザスターを攻撃しようとした。

「残念だったな！！貴様の場に闇属性モンスターが存在する事によりフィールド魔法、クリアー・ワールドのネガティブエフェクトが発動される！！」

「ネガティブエフェクトだと！？」

「闇属性モンスターをコントロールしているプレイヤーは自分フィールド上のモンスターが二体以上の時、攻撃宣言を行う事が出来ない！！」

「何だと！？」

攻撃しようとしたサイバー・ダーク・キールは元の位置へと戻ってきた。

「くっ……だがお前はモンスターを二体以上コントロールしているにも関わらず、何故さっきのターンで闇属性であるクリアー・バイ

ス・ドラゴンで攻撃を行う事が出来た？」

「クリアー・バイス・ドラゴンがオレの場にいる限り、オレはクリアー・ワールドの効果を一切受けない。ネガティブエフェクトを受けるのは貴様ら二人のみだ！！」

「…………ならばサイバー・ダーク・ホーンを守備表示に変更。カードを一枚セットしてターンエンド」

総司LP5500

場：サイバー・ダーク・ホーン（DEF800）

サイバー・ダーク・キール（ATK2500）

未来融合 - フューチャー・フュージョン（サイバー・エンド・ドラゴン対象）

ハウンド・ドラゴン（サイバー・ダーク・キールに装備中）

伏せカード二枚

「私のターン、ドロー！手札よりサイバー・ラーバアを召喚！！」

「言い忘れていたが、クリアー・ワールドのネガティブエフェクトが発動。サイバー・ラーバアとサイバー・ヴァリーは共に光属性。光属性モンスターをコントロールしているプレイヤーは己の手札を公開しなければならない！！」

「！！…………手札を！？」

「これじゃあ、ミツバの手の内がさらけ出されてしまう…………」

「さあ小娘！手札を見せて貰おうか！！」



ミツバは俯きながら答えた。

「ああっ？」

「絶対諦めない。瞬ちゃんも総司と約束したんだもん。昔の父さんみたいなプロ決闘者になって皆で最高の決闘をしようって。」

「……そうだな。瞬矢は可能性を秘めた奴だ。こんな所でそれを潰させる訳にはいかないし、それに……」

「?……………何？」

総司はミツバの方を見て言った。

「近い将来、このサイバー流道場を継ぐかもされない男だからな」

「ノノノ……………こっ、こんな状況で何言うのよ総司!!」

急速に顔を赤らめたミツバは恥ずかしそうに手札で顔を隠した。

「ハハハハ、すまんすまん。だが実力差があるにしても俺達はまだフェイバリットモンスターを出して無いんだ。サレンダーは絶対にしない!」

「…面白い、この状況でまだオレに屈しはしないか。ならば見せてみる!! 貴様らの足掻きを!!」

「嫌と言うほど見せ付けてやるよ! 俺達のサイバー流の力を!!」

「私もあの丸藤亮の様な決闘者になる為に貴方を超えてみせる！」

自分達の描いた夢の為にミツバと総司は再び闘志を燃やすのだった。



傷心の瞬矢・・・生き地獄の原因は・・・3（後書き）

次回、クリアー・バイス・ドラゴンやクリアー・ワールドとのコンボに対して二人の出すモンスターは・・・

次回もよろしくお願いします!!

大切な者のため……炸裂する二大サイバー流奥義（前書き）

タイトルの通りあのモンスター達が出ます。そして最後にはあのモ  
ンスターが……

それではどうぞー！

## 大切な者のため……炸裂する二大サイバー流奥義

「私はサイバー・ラーバアでクリアー・バイス・ドラゴンに攻撃！」

サイバー・ラーバア（ATK400）は身体が霧状になったクリアー・バイス・ドラゴン（ATK0）に攻撃した。

「ぐっ……だがクリアー・バイス・ドラゴンは装備魔法、ミスト・ボディの効果で戦闘では破壊されない！」

デザスターLP7500 7100

「……サイバー・ヴァリーを守備表示に変更し、カードを一枚セツトしてターンエンド」

ミツバLP8000

場：サイバー・ヴァリー（DEF0）

サイバー・ラーバア（ATK400）

未来融合・フューチャー・フュージョン（サイバー・エンド・ドラゴン対象）

伏せカード二枚

「オレのターン！オレはメタモルポットを反転召喚！リバース効果発動！全てのプレイヤーは手札を全て墓地に送り、デッキからカードを五枚ドローする……！」

「メタモルポットだと！？1ターン目から伏せていたとは……」

三人は手札を全て捨て新たに五枚ドローした。

しかしデザスターの場にはふわふわと宙に浮く可愛らしいモンスターが出現していた。

「…ダンディライオンの効果か……」

「そうだ！オレが手札から捨てたカードはダンディライオン！このカードが墓地に送られた時、場に二体の綿毛トークンを守備表示で特殊召喚されるのだ！

そしてフィールド魔法、クリアー・ワールドにより光属性モンスターのコントローラーは手札を公開しなければならない！手札を見せる小娘！」

ミツバの手札は

シャインエンジェル、プロト・サイバー・ドラゴン、リビングデッドの呼び声、パワー・ボンド、サイバー・ドラゴン・ツヴァイだった。

「なかなかの手札だな。オレはメタモルポットをリリース、邪帝ガイウスをアドバンス召喚！！」

デザスターの場に強大な闇の力を放つ帝の一体、邪帝ガイウス（ATK2400）が降臨した。

「邪帝ガイウスのモンスター効果を発動！！アドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード一枚を除外出来る！！オレが除外するのは、サイバー・エンド・ドラゴンを対象にした未来融合・フューチャー・フュージョン！！エクスクルード・ダーク・スフィア！！」

デザスターがそう宣言すると邪帝ガイウスは体の前に闇の力が詰め込まれた球状の物質を造りだし、ミツバの未来融合・フューチャー・フュージョンに向けて放った。

「リバーズカードオープン！カウンター畏、天罰を発動！！私は手札のプロト・サイバー・ドラゴンを捨てて邪帝ガイウスの効果を無効にし破壊する！！」

「何だと！？」

何処からともなく雷が墜ち、邪帝ガイウスは破壊された。

「……ならばクリアー・バイス・ドラゴンでサイバー・ダーク・キールに攻撃！クリーン・マリシヤス・ストリーム！！」

「総司！！」

「畏カード発動！和睦の使者！！このターン、俺が受ける戦闘ダメージは0となりモンスターも戦闘によつては破壊されない！！」

「ちっ、カードを一枚伏せターンエンドだ。そしてエンドフェイズにクリアー・ワールドの維持コストとして500ポイントのライフを払う」

デザスターLP7100 6600

デザスターLP6600

場：クリアー・バイス・ドラゴン（ATK0）

綿毛トークン（DEF0）×2

ミスト・ボディ（クリアー・バイス・ドラゴンに装備中）

クリアー・ワールド  
伏せカード二枚

「そろそろ反撃いくぜ！俺のターン、ドロー！」

このスタンバイフェイズ、未来融合・フューチャー・フュージョンの効果により裏サイバー流最強の龍が解き放たれる！！降臨せよ、  
鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン！！」

総司の宣言と共にホーンの角、エッジの羽、キールの胴体が融合した裏サイバー流奥義のモンスター、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン（ATK1000）が姿を現した。

『よっしゃ！速攻でケリ付けるぞ総司！！』

「鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンのモンスター効果発動！召喚に成功した時、墓地のドラゴン族モンスター一体を装備しその攻撃力分攻撃力をアップする！！」

俺が装備させるのは、手札断殺によって墓地に送ったヘルカイザー・ドラゴンだ！！」

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンは墓地からヘルカイザー・ドラゴン（ATK2400）を引きずり出しその精気を吸い取った。

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK1000 3400

「出た！総司のフェイバリットモンスター！！」

「鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力は墓地のモンスター

ー 一体につき100ポイントアップする。俺の墓地のモンスターは融合素材にしたサイバー・ダーク三体。よって300ポイントアップだ！」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK3400 3700

「ほう、これが裏サイバー流最強のモンスターか。確かに強い闇の力を感じる。

だが…… オレのような怨念の詰まった闇とは違うな。オレを封印しやがったあの野郎…… 周りからは鬼や悪魔と呼ばれたあの偽悪者と似た感覚だ」

「? …… それが誰だかは知らねえけど俺はこいつと共に貴様をブツ倒す！」

「愚かな。オレの場のフィールド魔法、クリアー・ワールドのネガティブエフェクトを忘れたか? 闇属性モンスターのコントローラーは自分フィールド上のモンスターが2体以上の場合、攻撃宣言できない。いくらモンスターを召喚しても無駄だという事が分かるのか?」

「分かってるさ。だからこうする! 炎龍を攻撃表示で召喚! レベル4のサイバー・ダーク・ホーンにレベル2の炎龍をチューニング!」

「シンクロ召喚か!!」

炎龍は光の輪となりサイバー・ダーク・ホーンを包み込んだ。

「氷塊より目覚めし龍神が、世界の総てを凍てつかせる。この世を更地に戻せ！！シンクロ召喚！刮目せよ！氷結界の龍 ブリユーナク！！」

体中を氷で覆われた神聖なドラゴン、氷結界の龍 ブリユーナク（ATK2300）がシンクロ召喚された。

「ブリユーナク！！このモンスターならいける！」

「けっ、厄介なモンスター出しやがって」

「ブリユーナクの効果発動！！手札を任意の枚数墓地に送り、送った枚数分フィールド上のカードを持ち主の手札に戻す。

俺は手札三枚を墓地に送って貴様のリバースカード二枚とクリアー・ワールドを手札に戻す！ブリザード・ハリケーン！！」

ブリユーナクが起こした吹雪がデザスターの場のカードを襲撃した。

「チエーンして畏カード発動！威嚇する咆哮！このターン、貴様のモンスターの攻撃宣言を封じる！！」

「くっ、だが二枚のカードは手札に戻した。そして俺が墓地に送ったのは仮面竜、ダーク・ホルス・ドラゴン、デルタフライの三枚。さらにシンクロ素材にした二体のモンスターにより、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力はさらにアップする！！」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK3700 4200

「俺はこれでターンエンド。頼んだぞミツバ！」



総司LP5500

場：氷結界の籠 ブリユーナク（ATK2300）

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン（ATK4200）

サイバー・ダーク・キール（ATK2500）

ハウンドドラゴン（サイバー・ダーク・キールに装備中）

ヘルカイザー・ドラゴン（鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンに  
装備中）

未来融合 - フューチャー・フュージョン（鎧黒竜 - サイバー・ダ  
ーク・ドラゴン対象）

伏せカード一枚

「任せて総司！私のターン、ドロー！」

このスタンバイフェイズに私も未来融合 - フューチャー・フュージ  
ョンの効果が発動される。現れよ！表サイバー流最強のモンスター、  
サイバー・エンド・ドラゴン！！！」

総司の持つ鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンと対を為す表サイ  
バー流奥義、サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）が雷  
鳴と共に召喚された。

『やつと俺の出番か。早い事瞬矢を救出するぞ！』

「頼むわよ、サイバー・エンド・ドラゴン！！！」

「…忌ま忌ましい精霊め……」

「私は手札のサイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚。バトルよ！サ  
イバー・ドラゴン・ツヴァイでクリアー・バイス・ドラゴンに攻撃  
！ツヴァイは相手モンスターに攻撃する時、攻撃力を300ポイン

トアップする！エヴォリユーション・フレア！！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイが放った壮絶なエネルギーにより、  
クリアー・バイス・ドラゴンは破壊されないまでも戦闘ダメージが  
生じた。

「ぐっ……小娘ごときが……」

デザスターLP6600 4800

「さらに、サイバー・エンド・ドラゴンで綿毛トークンに攻撃！！」

「クリアー・バイス・ドラゴンじゃないだと！？」

「サイバー・エンド・ドラゴンは守備表示モンスターを攻撃した時、  
攻撃力が守備力を超えていれば貫通ダメージを与える！！エターナ  
ル・エヴォリユーション・バースト！！！」

サイバー・エンド・ドラゴンは三本ある首からそれぞれが青白く輝  
くブレスを吐き、綿毛トークンを跡形も無く滅した。

「ぐああああああああああああああああ！！！！！」

デザスターLP4800 800

「よし！私はサイバー・ラーバアを守備表示にし、カードを一枚セ  
ットしてターンエンド！」

ミツバLP8000

場：サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）  
サイバー・ラーバア（DEF600）  
サイバー・ヴァリー（DEF0）  
未来融合 - フューチャー・フュージョン（サイバー・エンド・ドラ  
ゴン対象）  
伏せカード二枚

「ぐううう・・・小娘ごときが！！・・・いや、訂正しよう。今  
で貴様らを侮っていた。認めてやろう、アイツと同じ様に一流の決  
闘者として！！  
オレのターン、ドロー！！！」

デザスターは先程のそれを遙かに凌駕する闇を体中から放出した。

「ぐっ・・・これが奴の本気の闇か!？」

「なんて威圧感なの・・・今まで感じた事の無い位・・・怖  
い」

「行くぞ貴様ら！！俺は魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！  
！手札のレベル・ステイラーを墓地に送り、デッキより黄泉ガエ  
ルを特殊召喚！！」

背中に羽根の生えた愛らしいモンスター、黄泉ガエルがデザスター  
のデッキから姿を現した。

「見せてやろう・・・曾て破壊神と呼ばれ恐れられた至高のモンス  
ターを！！黄泉ガエル、綿毛トークン、そしてクリアー・バイス・ド  
ラゴンの三体をリリース！！！」



大切な者のため・・・炸裂する二大サイバー流奥義（後書き）

- ・ 次回、神を目の前にしてミツバと総司が取った策とは……………

次回もよろしくお願ひします!! m ( ) m

哀しい決闘の結末・・・破壊神VS絆！！（前書き）

読者の方々大変申し訳ありませんでしたm（| |）m

多忙で二週間以上空けてしまいましたですが漸く投稿出来ました！

それではごっごぞー！

哀しい決闘の結末・・・破壊神VS絆！！

「オベリスクの巨神兵のレベルを1下げること、墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚する！」

さらに魔法カード、デビルズサンクチュアリーを発動！オレの場にメタルデビル・トークンを一体特殊召喚する！！」

「二体のモンスター……だが何故このタイミングで……」

「グハハハハハハ！！見せてやろう！！崇高なる神の力を！！オベリスクの巨神兵のモンスター効果。二体のモンスターをリリースすることにより、相手フィールド上の全てのモンスターを破壊する！！ゴッドハンド・インパクト！！！！」

オベリスクの巨神兵は胸の前で手を合わせ、そこに強大なエネルギーを溜めて一気に放出した。

『ぐわあああああああ！！！！』

『ぐわわわわわ……済まぬ総司……』

サイバー・エンド・ドラゴン、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン等全モンスターは破壊され、その衝撃が二人にも伝導していった。

「ぐわあああああああ！！！！ぐわ……サイバー・ダーク・ドラゴン達が……」

「きゃあああああああ！！！！……そんな……サイバー・エンドが……」

二人は神の放つこれ以上無いプレッシャー、そして自分達が最も信頼する精霊達を失った喪失感が二人を支配していった。

「更なる絶望を味わせてやろう！魔法カード、死者蘇生を発動！自分か相手の墓地にあるモンスターを一体特殊召喚する。俺が召喚するのは……葬ったばかりのサイバー・エンド・ドラゴンだ！」

ほんの数秒前までミツバが使用していたサイバー・エンド・ドラゴンが今度はデザスターのフィールドに召喚された。

「……サイバー・エンド・ドラゴン……ミツバのフェイバリットカードが……」

「サイバー・エンド・ドラゴンでミツバ、貴様にダイレクトアタックだ！！エターナル・エヴォリューション・バースト！！！」

迫り来るサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃を前にミツバはただ呆然と立ち尽くしているだけであった。

「！？何してんだ！早く避けるミツバ！！」

「……………」

「無駄だ。もはやその女の心に決闘者としての闘志は皆無だ！我が神の前に並大抵の精神力では正気を保つ事すら無理なんだよ！！」

サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃はミツバに直撃し、そのまま吹き飛ばされて数メートル後方の壁まで叩き付けられた。





「…愚かな。まだ神に抗おうというのか…」

「鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンが特殊召喚した事により、墓地のドラゴン族モンスター一体を装備する！合体せよ、ダーク・ホルス・ドラゴン！！！」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンは墓地よりダーク・ホルス・ドラゴンを引きずり出し、その触手からエネルギーを吸収した。

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK1000 4000

「そして俺の墓地のモンスターの数×100ポイント攻撃力をアップする。俺の墓地のモンスターは八体！よって800ポイントアップだ！！！」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン

ATK4000 4800

「鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンで、オベリスクの巨神兵に攻撃！！フル・ダークネス・バーストオオオ！！！！！」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンの持つ闇のエネルギー波がオベリスクの巨神兵に向けて放たれた。

「速攻魔法、月の書を発動！この効果により、鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンを裏側守備表示にする！」

「なっ……………カードを一枚伏せ、ターンエンドだ……………」

総司LP5500

場：裏側守備モンスター  
伏せカード二枚

普通ならここでミツバのターンだが、先程のダメージにより決闘続行は難しそうであった。

「あの小娘はもう無理だな。オレのターンに移らせてもらおう!!」

「……勝手に……決めないで!! 私……ターン!!」

壁まで吹き飛ばされたミツバは残りの力を振り絞り絞り力強くカードを引いた。

「ミツバ!!」

「ほう、まだやれるのか。だがサイバー・エンド・ドラゴンはオレのフィールドにある。精霊を失った今貴様に勝機は無い!!」

「……私は……手札のパワー・ボンドを捨てて……魔法カード……ライトニング・ボルテックスを発動!!……相手フィールド上の表側表示モンスターを……全て破壊する!!」

デザスターのフィールド上空に雷雲が現れ、オベリスクの巨神兵、サイバー・エンド・ドラゴンに向けて雷が墜ちて行った。

「残念だが、リバーズカードオープン!! カウンター畏、神の宣告発動!! ライフを半分支払う事でライトニング・ボルテックスの発動を無効にする!!」

オベリスクの巨神兵は両手を天に翳し、その手に青白いエネルギーを纏ってライトニング・ボルテックスを打ち払った。

「本物の”神の宣告だ。有り難く受け取るがいい！」

デザスターLP800 400

「くっ……………ターン…エンド……………」

ミツバLP4000

場：伏せカード二枚

「オレのターン！！サイバー・エンド・ドラゴンのレベルを1下げること、墓地からレベル・ステイラーを特殊召喚！そしてレベル・ステイラーをリリース、E・HERO マリシャス・エッジをアドバンス召喚！！」

「…マリシャス・エッジ……………貫通効果を持つ悪魔族の最上級モンスター……………」

「この決闘、このターンで終焉を迎える！！サイバー・エンド・ドラゴンでミツバ、お前にダイレクトアタックだ！エターナル・エヴオリューション・バースト！！」

サイバー・エンド・ドラゴンの絶大な破壊力の攻撃がミツバに向かって放出された。

「まだ終わらせません！！手札のアルカナフォー스XIV - TEM



「仕留め損なつたか……ターンエンドだ」

デザスターLP400

場：オベリスクの巨神兵（ATK4000）

サイバー・エンド・ドラゴン（ATK4000）

E-HERO マリシヤス・エッジ（ATK2600）

「ハア・ハア・ハア・ハア・ミツバ、まだ戦えるか？」

「……当たり前・前・でしょ。みんなの仇・取らないと  
ところで総司。あんた、本気で瞬ちゃん助ける覚悟・ある？」

「当然だ。今更なんでそんな事を聞く……」

「……一応……ね」

「……俺のターン、ドロ」

ミツバの言動を不審に思いながらも総司はカードをドロした。

「…手札より速攻魔法、融合解除を発動！……サイバー・エンド・  
ドラゴンをエクストラデッキに戻す！」

『忝ない、総司』

サイバー・エンド・ドラゴンは元々の持ち主であるミツバのエクストラデッキに戻って行った。

「……だが今更サイバー・エンド・ドラゴンを戻した所で、オベリスクの巨神兵やマリシヤス・エッジがいる以上オレの勝利は揺るぎはしない！！無駄だということが分からのか！！」

「……………デザスター、俺には弟が……………憂司が俺の事を待っていてくれてんだよ……………」

総司は目を閉じて静かに語り始めた。

「……あいつは色々と世話の焼ける奴だが、自分の信じる事を貫き通すいい弟なんだ……………今はデュエルアカデミアに通っていて離れて暮らしてはいるが、俺がプロ決闘者になったらまた一緒に暮らそうって約束したんだ。……………だから俺は……………自分の手で未来を掴み取ってみせる！！」

「下らん！！情に流されてプレイングミスもする貴様らにそのような未来は永久に来はせん！！ミツバ、貴様の場のリバースカードの一枚は次元幽閉の筈だ！にも関わらずサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃時には発動しなかった。自分の命より精霊を優先する愚か者にオレは倒せん！！」

確かに先程のサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃をミツバはアルカナフォー스XIV・TEMPERANCEの効果で凌ぎきったが、次元幽閉を発動すれば簡単にフィールドから除去する事が可能であった。

「……………確かにさっきのは明らかかなプレイングミスだけど……………サイバー・エンドは私の大切なパートナーだから……………除外なんて出来なかった……………」

「低俗な。精霊との絆が何になる？ただ勝利が遠ざかって行くだけだ！！」

「……確かにそうかもしれない。だがカードを信じれば、自ずと道は開けて来るんだ！！それを俺が証明してみせる！」

二枚のリバー・スカードを発動！畏カード、強欲な瓶！カードを合計二枚ドロロー！！」

再び闘志を取り戻した総司は二枚のカードを引いた。

「…裏サイバー流のモンスター。そしてこれが俺の信じたカードの力だ！！サイバー・ダーク・エッジを召喚！！」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンの融合素材であるサイバー・ダークの一体、サイバー・ダーク・エッジ（ATK800）が現れた。

「エッジが召喚された事で、墓地のハウンド・ドラゴンを装備して攻撃力を上昇させる！！」

サイバー・ダーク・エッジ

ATK800 2500

「その程度の攻撃力では、オベリスクの巨神兵は勿論マリシヤス・エッジも倒せはしない！！」

「サイバー・ダーク・エッジは攻撃力を半減させて、相手にダイレクトアタックが出来る！！お前のライフは残り400。これで終わりだ！！」



サイバー・ダーク・エッジの巻き起こした突風が直接デザスターに向かつて放たれた。

「……これが通れば、私達の勝ち……」

「やはり無様な決闘者だよ貴様らは。相手の直接攻撃宣言時、手札よりバトルフェーダーを特殊召喚！！そして強制的にバトルフェイズを終了させる！！」

突如バトルフェーダーがサイバー・ダーク・エッジの前に出現し、攻撃が中断された。

「……そんな……カードを一枚伏せ、ターン……エンド……」

総司LP2600

場：サイバー・ダーク・エッジ（ATK2500）  
ハウンド・ドラゴン（サイバー・ダーク・エッジに装備中）

「……私のターン、ドロ。サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚。そして効果発動！手札の魔法カード一枚を相手に見せる事で、このターンのみツヴァイをサイバー・ドラゴンとして扱う。私が見せるのはこのカード、エヴォリユーション・バースト！そしてエヴォリユーション・バーストを発動！！私のフィールドにサイバー・ドラゴンが存在するとき、フィールド上のカード一枚を破壊する！！」

「残念だがオベリスクの巨神兵はあらゆるカードの対象にならない」

「……なら、マリシャス・エッジを選択！行け、エヴォリユーション・バースト！！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイは最後の悪足掻きだと言わんばかりの表情でE・HERO マリシヤス・エッジを破壊した。

「……ターンエンドよ」

ミツバLP4000

場：サイバー・ドラゴン・ツヴァイ（ATK1500）  
伏せカード二枚

「それがお前らの言うカードとの絆を信じた結果か？オレのマリシヤス・エッジしか倒せぬとは所詮この程度だったという訳か。…オレのターン！」

「リバースカードオープン！スケープ・ゴート！！俺の場に四体の羊トークンを特殊召喚する！！」

「今更そんなカードを発動しても無駄だ！！オベリスクの効果で一掃してくれる！！オベリスクの巨神兵のレベルを1下げること、墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚！

オベリスクの巨神兵の効果発動！！バトルフェーダーとレベル・ステイラーをリリースし、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！！ゴッドハンド・インパクト！！！！」

オベリスクの巨神兵はその強靱な両腕で羊トークンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイを粉々にしようとしたその時、総司がミツバに語りかけた。

「……今だミツバ、そのリバーズカードを発動しろ。そうすればあのカードの効果でこの決闘を終わらせる事が出来る」

「…気付いてたの!?まさかそれでスケープ・ゴートを?」

「ずっとさっきのお前の不審な言動を考えていた。それで思いついたのがそのカードだ。さあ、早く発動しろ!」

「……でもそんな事すれば……」

「俺はいいから。覚悟は出来てる」

「……分かったわ」

意を決した様にミツバは決闘盤のボタンを押した。

「……罨カード、リビングデッドの呼び声を発動。私が復活させるモンスターは…プラネットシリーズの一角、The big SATURN!」

ミツバが宣言すると同時に土星を象った輪が装着されてあるプラネットシリーズの一体、The big SATURNがフィールドに姿を現した。

「プラネットシリーズのカードだと!?……だが我がオベリスクの巨神兵の前では塵芥に等しい!!オベリスクよ!The big SATURNも粉碎してしまえ!!!」

プラネットシリーズとも言えどオベリスクの巨神兵によって纏めて

瞬殺された。

「これでいい……」

「…The big SATURNはお父さんが私にくれたカード。私には土星、四つ葉には金星のカードを与えてくれた。このカードもまた私の信じるカードの一枚……The big SATURNが相手のコントロールするカードによって破壊された時、全てのプレイヤーはSATURNの攻撃力分のダメージを受ける……TRI  
PLE・IMPACT!!」

「攻撃力分て事は・・・2800ポイントだと!?!」

「行け!The big SATURN!!」

The big SATURNの全身が紅く輝き出した。

「…ぐっ……そんな…馬鹿なああああ!!」

The big SATURNの起こした爆発の衝撃が三人を包み込んでいったのだった……

哀しい決闘の結末・・・破壊神VS絆!! (後書き)

次回、決闘に決着が着いたその後は・・・

更新がどうなるかわかりませんが (オイ) 次回もよろしくお願  
いします!

闇の行き着く先

堕ちし者の求める物とは（前書き）

またも更新が遅れてしまい、真に申し訳ありませんm（| |）m

今後のストーリーを決めるのに時間が掛かってしまっていました。

（| | | | #）

それでは、どうぞー！！

闇の行き着く先

堕ちし者の求める物とは

「…そんな…馬鹿な…」

「行け、The big SATURN!! TRIPLE・IMP  
ACT!!!」

The big SATURNの体は紅く輝きだし大爆発を起こす  
寸前であった。

「……オレはまた阻まれるのか……あの男と同じ……サイバー流に……」

デザスターの咳きはThe big SATURNの爆音によって  
掻き消された……

デザスターLP4000

総司LP26000

ミツバLP4000 1200

決闘に終止符が打たれた所で過去の映像が終了した。

「……………これが、瞬矢さんの……………三年前の記憶……………」

これまでの映像を見終えた四つ葉と西上はその場に立ち尽くしたままだった。

「これで分かっただろう。奴が……………瞬矢が何故このような状態なのかを」

西上は覇気を失った瞬矢の前に移動して語り始めた。

「こいつは三年前、サイバー流道場の地下に封印されていた闇の意思が宿るデッキの封印を解いた。だがその闇の意思は瞬矢自身に憑依し、サイバー流門下生や父である俊矢を殺害した。

お前の姉の藤堂ミツバと一回戦で瞬矢に敗れた雪代憂司の兄、哀川総司はその闇の意思と決闘した末何とか勝利した……………だが……………」

「……………ミツバ……………いや……………お姉ちゃんはその決闘の後どうなったんですか？」

「……………決闘後総司は間もなく亡くなり、ミツバも意識を取り戻した瞬矢に看取られながら息を引き取った。その直後にあの男……………陰達が出来て瞬矢と会った訳だがミツバは最期に精霊であるサイバー・エンド・ドラゴン達に一つ頼み事をした……………」

「頼み事って何を？」



「……いつまでも、瞬矢を見守り続けて欲しい」とな。その願いが通じ、瞬矢はその後の火事から一命を取り留めた。

それから瞬矢は無月陰達が皆を殺害したと思い込み復讐を考えていたが……その原因が自分だと思いついたこいつは今みたいな生き地獄の状態という訳だ……」

「……………こんな抜け殻みたいな瞬矢さん、私は見たくありません。どうしたら救えますか!？」

四つ葉の返答に西上は表情を暗くした。

「……簡単にはいかんだろうな。一抹の希望さえ見えない深い絶望の中から這い上がるのは本人にとって至難の業だ。何かきっかけがあればな……………」

西上の言葉に四つ葉は何かを思い出したかの様に自分のポケットの中を探り始めた。

「そういえば瞬矢さんに渡しておかなきゃいけ……」

四つ葉が言いかけた瞬間に部屋のドアが力強く開かれ、一人の少年と一人の青年が入って来た。少年は部屋を見渡すと何かを納得した様子であった。

「……………成る程。陰達の言った通りか」

「貴方は確か……………一回戦で翔夜さんに負けた……………」

「河上 駆将だ。陰達からの命令を果たしに来た」

「…命令？」

「そこにいる抜け殻をこいつの様にするんだよ。なあ……氷川！！」  
駆将の背後に立っていた人物は一回戦で陰達と決闘した真紅眼の黒竜を主軸としたデッキを扱うプロ決闘者、氷川 涼だった。

「！！…一回戦で敗退したプロ決闘者の氷川さん！？何故貴方がこんな所に？」

「……………」

氷川は四つ葉の問いには答えずただ瞬矢を睨みつけていた。

「こいつに話し掛けても無駄だ。陰達に敗北した事でこいつは今までない絶望を味わい、そこで生まれた心の闇を俺達は利用した。この千年盤を使ってな！」

「…心の…闇？」

「心の闇に囚われた人間を洗脳するのは千年盤を用いれば訳無い事だ。同様に今の瞬矢もな……」

そう言った駆将は装着していた自身の千年盤のある一点に手を置いた。その瞬間そこから目映ゆいばかりの光が放出し、それらは瞬矢の全身を包み込んだ。

「うう……この光は一体……」

「氷川にやったのと同じ事だ。千年盤に埋め込まれた千年アイテム

の欠片の力により、瞬矢もまた陰達の手駒の一つとなる」

駆将が言い終えた瞬間、瞬矢を覆っていた光が消滅し、瞬矢は駆将達がいる方に歩み寄って来た。

「……瞬矢……さん？その目は……一体……」

四つ葉が驚愕した瞬矢の目は今までと様子が違い、銀色を帯びていた。

「目が銀色になっただと？まあいい、陰達からの命令はこれで遂行された。行くぞ瞬矢」

「……良いだろう。この闇の力、貴様らと共に使ってやる……」

「……待て瞬矢」

駆将らと一緒に行くとした瞬矢だったがその前に西上が立ちはだかった。

「お前を行かせる訳にはいかなくてな、どうしても通るといふなら俺を倒してから行け！」

「誰だ貴様？そんな決闘、何の意味も「良いだろう！！」……瞬矢？」

「駆将、氷川。お前らに見せてやろう。闇の力を受けた俺の新たな力を！」

「……ちっ、仲間になったってのにいけ好かない奴だぜ。好きにし

な」

「…行くぞ瞬矢!!」

西上はそう言っつて決闘盤を構えたが瞬矢は突然装着していた自身の決闘盤を取り外し、床に投げ捨てた。

「……何のつもりだ瞬矢」

「こんな普通の決闘盤はもう俺には必要ない。必要なのは千年盤、そしてこの新しいデッキだ」

瞬矢はテーブルに置いてあった自分の千年盤を腕に付け、デッキをセツトした。

「……その決闘盤とデッキは、お前の父や友が託した形見じゃないのか？」

「言った筈だ、俺にはもうそんな物は必要無い」

「…そうか……ならばそのサイバー流デッキ、俺が使わせて貰おう」

西上は床から決闘盤を拾い上げ、自分の左腕に取り付けた。

「元々自分のデッキだ。どんなカードで構成してあるか全て把握してある。その時点で俺にアドバンテージがあるがいいんだな？」

「そんな事は承知の上だ。今のお前程度、俺のデッキを使うまでもない」

「大した自信だな。だがそれはただの思い上がりに過ぎない。敗北と同時に貴様にも俺が陥った生き地獄を味あわせてやる」

「……始めるぞ」

「「決闘!!」」

決闘の行く末を案ずる四つ葉、傍観する駆将与氷川を余所に闇に堕ちた瞬矢と西上の決闘が幕を開けるのだった……

闇の行き着く先

落ちし者の求める物とは（後書き）

次回、闇に堕ちた瞬矢VS西上の決闘が始まります。果たして瞬矢の新しいデッキとは……………

次回もよろしくお願い致しますm（）（）m

激突する紅と銀 - 両者の眼が示す力は・・1 (前書き)

今回、西上は瞬矢のサイバー流デッキ、瞬矢は5D、Sで登場した  
あのカード達を使用しますが…

今更感が半端ないですm ( | | ) m

それではどうぞー!!

激突する紅と銀 - 両者の眼が示す力は・・1

「決闘!!!」

二人が叫んだと同時に瞬矢の千年盤から翔夜のペンダントや駆将や憂司の千年盤の力を遙かに凌駕する闇が辺り一面に放出された。

「これで決闘のダメージは実際の物となり、敗者は勝者の糧となる」

瞬矢の声は以前よりも低くて冷酷な様に感じられた。

「千年盤による闇のゲームという訳か……………だが」

西上は自身の右目に手を触れた。その瞬間、右目から紅く美しい光が放たれ、一瞬にして周囲の闇を取り払った。

「!……………貴様、何をした？その目の光は一体……」

「お前と闇のゲームなどしたら死んでしまっだろう、お前が」

「……余裕を持てるのも今の内だ。俺から行かせてもらっ、ドロー!」

瞬矢は力強くカードを引いた。

「……モンスターをセット。場にカードを二枚伏せてターンを終了する」

瞬矢LP8000



場：裏側守備モンスター  
伏せカード二枚

「（…懐かしいな、このデッキは……）  
俺のターン、ドロロー。相手フィールドにモンスターが存在し、自分のフィールドにモンスターがない為、手札よりサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！」

西上のフィールドに、普段は瞬矢が使用している表サイバー流のベースとなるモンスター、サイバー・ドラゴンが姿を現した。

「そしてサイバー・ドラゴンをリリース、ホルスの黒炎竜LV6をアドバンス召喚する。」

ホルスでセットモンスターに攻撃！ブラック・フレイム！！」  
ホルスの黒炎竜LV6（ATK2300）の闇のエネルギーが瞬矢の場の裏側守備モンスター、スーパイを包み込み消滅させた。

「スーパイか……カードを一枚伏せ、永続魔法、未来融合・フュージチャー・フュージョンを発動。鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを対象に発動し、デッキから融合素材となるサイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールを墓地に送る。」

俺はこれでターンエンドだがホルスの黒炎竜LV6がモンスターを破壊した事により、このカードを墓地に送ってデッキからホルスの黒炎竜LV8を特殊召喚する」

エンドフェイズを迎え、ホルスの黒炎竜LV6はLV8へとレベルアップした。

西上LP8000

場：ホルスの黒炎竜LV8（ATK3000）  
未来融合・フューチャー・フュージョン（鎧黒竜・サイバー・ダイク・ドラゴン対象）

「…ドロー。駆将、氷川。見せてやろう、この銀の眼の力を得た我がモンスターを！」

瞬矢の白銀の両目はより一層輝きを放ち、それは凶々しいとも美しいとも感じてしまう異様な輝きであった。

「相手のフィールドにのみモンスターが存在する事により、手札から太陽の神官を特殊召喚する。そしてチューナーモンスター、赤蟻アスカトルを通常召喚。レベル5の太陽の神官に、レベル3の赤蟻アスカトルをチューニング！」

赤蟻アスカトルは輝きを放つ光の輪になって太陽の神官を包摂した。

「陽と陰重なりし時、神々の威光が現世の全てを照らし出す。光明すら見出だせん世界を見よ！！シンクロ召喚！絶望せよ、太陽龍インティ！！」

赤く燃える四つの首を持つ太陽の化身のドラゴン、太陽龍インティ（ATK3000）が瞬矢の場に降臨した。

「太陽龍インティか…：攻撃力3000ならば俺のホルスと同じだが、まだ終わりではあるまい」

「そつだ。永続畏、リミット・リバースを発動。墓地の攻撃力1000以下のモンスター、太陽の神官を特殊召喚する。そして墓地か

らモンスターが特殊召喚された事により畏カード、死神の呼び声を発動。墓地より甦れ、スーパイよ!!!」

次の布石となるべく太陽の神官が再びフィールドに現れ、同時に1ターン前に葬られたスーパイも墓地より呼び戻された。

「行くぞ。レベル5の太陽の神官に、レベル1のスーパイをチューニング!!!」

スーパイは一輪の光となり太陽の神官はその中心に入り込んだ。

「陽と陰重なりし時、闇然が現世の全てを包み込む。生きながらにして地獄を味わえ!!!シンクロ召喚!希望を断ち切れ、月影龍クイラ!!!」

太陽龍インティと対となる四つ首の藍色のモンスター、月影龍クイラ(ATK2500)が先に召喚されていた太陽龍インティの隣に並んだ。

「...太陽の次は月をモチーフにした龍か」

「行け、太陽龍インティ!!!イクスプロード・メテオ!!!」

「迎え撃て、ホルスの黒炎竜LV8。ブラック・メガフレイム!!!」

太陽龍インティの放った炎の息吹とホルスの黒炎竜LV8の黒い炎が衝突し合い、死力を尽くした二体は互いに消滅した。

「これで道は開けた。月影龍クイラでダイレクトアタック!フリージング・ブラスト!!!」

冷気を纏った月影龍クイラのブレスが西上に直撃した。

「……この程度の攻撃か……」

西上LP8000 5500

「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

瞬矢LP8000

場：月影龍クイラ（ATK2500）

伏せカード一枚

「…俺のターン、ドロ。畏発動、リビングゲットの呼び声。墓地のサイバー・ドラゴンを攻撃表示で特殊召喚。」

手札より融合呪印生物 - 光を通常召喚。そしてモンスター効果を発動！」

融合呪印生物 - 光とサイバー・ドラゴンは共に光輝く粒子となり、墓地へと埋葬されて行った。

「融合呪印生物 - 光はフィールド上のこのカードと融合素材モンスターをリリースし、その融合モンスターをエクストラデッキから特殊召喚出来る。」

融合呪印生物 - 光とサイバー・ドラゴンをリリース！いでよ、サイバー・ツイン・ドラゴン！！」

本来ならサイバー・ドラゴン同士が融合した双頭の機械竜、サイバー・ツイン・ドラゴン（ATK2800）が融合呪印生物 - 光の効果により召喚された。

「サイバー・ツイン・ドラゴンで月影龍クイラに攻撃。エヴォリュ  
ーション・ツイン・バースト!!」

「只では死なない。月影龍クイラの効果発動!!このカードが攻撃  
対象にされた時、攻撃モンスターの攻撃力の半分だけライフを回復  
する。オフエンシブ・ゲイン!!」

瞬矢LP8000 9400

「それでも、月影龍クイラは破壊され、戦闘ダメージは発生する」

「フン……………」

瞬矢LP9400 9100

「この瞬間、月影龍クイラのもう一つの効果が発動される。月が沈  
みし時は太陽が、太陽が没する時は月がまたその姿を示すのだ!!  
このカードが破壊された場合、墓地に存在する太陽龍インティを特  
殊召喚する!!」

月影龍クイラに導かれ、太陽龍インティが再びその姿を現した。

「…………成る程。お互いの破壊が復活のトリガーになっているという  
訳か。手札より速攻魔法、収縮を発動。太陽龍インティの攻撃力を  
エンドフェイズまで半分にする」

太陽龍インティ

ATK3000 1500

「サイバー・ツイン・ドラゴンは一度のバトルフェイズに二回攻撃する事が可能だ。太陽龍インティに追撃、エヴォリューション・ツイン・バースト!!」

「ぐっ……」

瞬矢LP9400 8100

「だが戦闘破壊された太陽龍インティの効果発動!このカードを破壊した相手モンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。」

太陽龍インティよ、サイバー・ツイン・ドラゴンを滅せよ!!」

太陽龍インティの放った炎がサイバー・ツイン・ドラゴンの回りを囲み、そのままサイバー・ツイン・ドラゴンは燃え尽きていった。

西上LP5500 4100

「…厄介だな。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

西上LP4100

場：未来融合・フューチャー・フュージョン（鎧黒竜・サイバー・  
ダーク・ドラゴン対象）  
リビングデッドの呼び声  
伏せカード一枚

厄介と言う割には西上の表情は依然として余裕に満ち溢れていた。

「…ドロー。このスタンバイフェイズ、太陽龍インティの効果発動。」

このカードが破壊された次のスタンバイフェイズに墓地の月影龍クイラを特殊召喚する。太陽の力を受け甦れ！月影龍クイラよ！！」

瞬矢の千年盤の墓地ゾーンが輝き出し、月影龍クイラがそこからフィールドに現れるという時にクイラの姿が消え、エクストラデッキに戻っていった。

「!?!?.....何故クイラが...!」

「俺は太陽龍インティの効果にチェーンして罨カード、転生の予言を発動した。

この効果により、俺はお前の墓地の太陽龍インティと月影龍クイラをお前のエクストラデッキに戻した。よってインティの蘇生効果は不発だ」

「.....ダブルコストーンを攻撃表示で召喚。ダブルコストーンで貴様にダイレクトアタック！ゴースト・シヨック」

ダブルコストーン（ATK1700）はその小さな体で西上目掛けて突進していった。

「悪いが通す事は出来ない。相手の直接攻撃宣言時、手札の速攻のかかしを墓地に送り、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する」

ダブルコストンの前に全身が機械で構築されたかかしが出現し、その攻撃を強制的に終了させた。

「くっ.....カードを一枚伏せターンエンド」

瞬矢LP8100

場：ダブルコストーン（ATK1700）  
伏せカード二枚

「俺のターン。このスタンバイフェイズ、未来融合・フューチャー・フュージョンの効果発動。発動後2ターン経過した事により、エクストラデッキから降臨せよ！鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン  
！！」

亡き総司の形見である裏サイバー流皆伝のモンスター、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンが瞬矢を闇から救うべく西上のフィールドに舞い降りるのだった………



激突する紅と銀 - 両者の眼が示す力は・・・1 (後書き)

次回、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンを召喚された瞬矢が出  
すカードとは・・・

次回もよろしくお願ひしますm ( ) ( ) m

番外編 - 今生の転機と受け継がれた魂（前書き）

今回は番外編です。三年前の瞬矢がアカデミアに編入した切っ掛けは

それではどうぞ！

番外編 - 今生の転機と受け継がれた魂

三年前：サイバー流道場での事件から約一ヶ月後

この日瞬矢は入院していた病院を漸く退院出来る様になり、瞬矢は自分の荷物を纏めていた。

「…ふう、こんなもんかな……んっ？」

一通り荷作りをした所で部屋の自動ドアが開き、藍色のコートに身を包んだ長躯の男性が入って来た。

「…久しぶりだね、瞬矢君。君のお母さんのお葬式以来だから……五年振りかな…」

「（…五年振り？）

…失礼ですがどなたでしたっけ？」

「……まあ、覚えていなくて当然か。あの時は軽い挨拶しか出来なかったからね」

そう言うと男は名刺を取り出し瞬矢に手渡した。

「私は三上徹哉【みかみ てつや】。デュエルアカデミア本校で実技担当最高責任者をしている者だよ」

「アカデミアの教諭が俺に何の用です？」

「単刀直入に言おうか。瞬矢君、君をデュエルアカデミア本校に編

入させに来た」

「アカデミアへの編入？……でも唯一の肉親だった父さんも死んでしまつてそんな金は……」

「お金の事は心配しなくてもいい。ジュニア大会からの君の実力を考慮させ、私からアカデミアに無償で済むように掛け合つてみるよ。もしそれが駄目なら、私が払おう！」

「（私が払うつて……）」

…何故そこまでして貴方は俺にアカデミアを？それに俺と貴方と一体どんな関係なんです？」

突然現れて編入を勧める三上に瞬矢は困惑気味であつた。

「君のお父さんの……俊矢さんはデュエルカレッジ時代の先輩でね、卒業後も色々世話になつてたから少しでもその恩を返したくて、今日ここに來たんだ」

「父さんの……編入の件ですが、少し考えさせて下さい。やっぱり簡単に答えは出せません」

「そうか……返事はいつでも良いが…これを渡しておこう」

「それは……デッキですか？」

三上が懐から取り出したのは使い古された感じのするデッキとエクストラデッキだつた。

「俊矢さんの形見だ。私がデュエルカレッジを卒業した際に俊矢さ

んに頂いた記念品なんだが、私はもう使わないし君が持っている方がそのデッキも俊矢さんも喜ぶだろう。

それと取り敢えずこいつらに目を通しておいてくれ。じゃあ私は急ぎの用があるので失礼するよ」

そう言い残し三上はアカデミアの資料と連絡先を渡して退出した。

「…デュエルアカデミア……父さんの母校だったかな……」

一言漏らした後、瞬矢は渡された資料等を鞆にしまいそれらを持って部屋を出た。

#### 数時間後

病院からタクシーに乗って瞬矢が赴いた先はネオ童実野シティ郊外の墓地であった。入院生活を余儀なくされていた瞬矢は遠縁の人らが開いた父の葬儀には行けず、拳げ句の果てには父の残した遺産も彼らが根こそぎ奪い、瞬矢の下に入って来たのは生活に必要最低限の金額のみであった。

「…何で俺だけが…」

皆の墓の前まで来ると耐えていた涙が頬を伝った。

「とうさん……ミツ姉……総兄……おれは……おれは……あの時何も……何も出来なかった……」

その場に座り込んだ瞬矢は溢れる涙を抑えられず、只哀しみに暮れる一方だった。

「……おれが……おれがもつと強ければああああ!!!」

それから1時間、瞬矢は何も出来なかった自分の無力さに泣き喚いた。そして何も出来なかった自分が唯一生き残っているのがとつもなく耐えられなかった。自分も今すぐ死んで楽になると考えた程だった。

そんな中、悲嘆に暮れている瞬矢に花束を持った一人の少年が近付いて行き、その肩をポンと叩いた。

「……貴方が……須崎瞬矢さん……ですか？」

泣いている瞬矢に気を遣っているのか少年は恐る恐る話している様子だった。

「……キミは……誰？何故おれの名を……」

「……ボクはサイバー流道場門下生、哀川総司の弟の哀川憂司と申します。生前は兄がお世話になりました」

「！！……キミが憂司君……」

流石に年下の前で涙を見せなくなかったのか瞬矢は袖で涙を拭いた。

「…時々総司さんから話を聞いたよ、『正義感が強い俺の大事な弟』ってね」

「…そう でしたか。五年前の“あの事件”が起きて両親を失ったボク達が路頭に迷った時にあの人が 俊矢さんがサイバー流道場で兄さんを預かり、ボクは自分の希望でデュエルアカデミア小等部に編入しました。

アカデミアは道場から遠いからボクだけ学生寮に住み、兄さんと離れて生活していました。兄さんは『俺がプロ決闘者になったらまた一緒に暮らそう』って言うてくれたのに……こんな事に……」

俯く憂司の肩を瞬矢が優しく掴んだ。

「（知らなかった……）」

…そうだったのか。総司さん、あまり自分の過去を話さない人だったから」

「兄さんが死んだ……その知らせを聞いてから毎日泣き続けました。離れていても心の拠り所に使っていた兄さんを失うなんて……ボクにとってはこれ以上ない悲報でした……」

「…キミも……やっぱり悲しいんだね……」

「でもボク、悲しむのは止めたんです。人は悲しむだけでは何も進まない。何も事態は好転しないと分かって。」

だから、生きる目標を考えたくんです。兄さんが果たせなかったプロ

決闘者の夢を、ボクが引き継ぐって!!」

(!!……この子は………)

瞬矢が驚愕したのは憂司の発言もあるがその表情でもある。兄の死を完全に乗り越えてはないのを隠しきれていないが、それに負けないう位未来への希望を見出だしている様であった。

「(……彼になら………)

憂司君、これをキミに託すよ……」

「ええっ!?!……こ、これってあの伝説の?」

瞬矢がケースから取り出したのは以前から使用していた宝玉獣デッキのレプリカだった。

「キミは将来、きっと強い決闘者になる。総司さんにも負けない位に。だからこのデッキがキミの強くなる契機にしてほしいんだ」

「……でっ、でもこんな高価なデッキを無料で受け取る訳には………」

「謙虚だね……じゃあ俺と決闘してくれないかな。願わくば、その宝玉獣デッキで」

「決闘……ですか?」

「勿論今すぐって訳じゃない。将来キミが強くなったらで構わないんだ。総司さんが言っていたよ、成績優秀で中等部に飛び級したってね」



「……分かりました。この宝玉獣デッキ、有り難く頂戴致します！  
！」

「ああ！！……強くなるうな、キミも……俺もな……」

その後憂司は総司達の墓の花を取り替え、瞬矢に別れを告げて帰って行った。

「（……あんな子供でさえ……）  
俺も……踏み出してみようかな……」

そう呟き瞬矢は携帯を取り出し三上の元に電話を掛けたのであった

……

番外編 - 今生の転機と受け継がれた魂 (後書き)

次回は本編に戻ります。西上と瞬矢の決闘の行く末は……

次回もよろしくお願いいたします!! m ( ( m

激突する紅と銀 - 両者の眼が示す力は・・2 (前書き)

瞬矢VS西上の決着です。西上は瞬矢を闇から救えるのか……………

それではどうぞ!!

激突する紅と銀 - 両者の眼が示す力は・・・2

「未来融合・フューチャー・フュージョンの効果により、エクストラデッキより降臨せよ、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン！」  
総司が切り札としていた裏サイバー流皆伝、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンが西上のフィールドに召喚された。

「さらに鎧黒竜の効果発動。融合召喚に成功した時、墓地のドラゴン族モンスター一体を装備し、そのモンスターの攻撃力分鎧黒竜は攻撃力をアップする。」

墓地よりホルスの黒炎竜LV8を装備させる！」

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンはその触手でホルスの黒炎竜LV8（ATK3000）を墓地から引きずり出し、そのエネルギーを吸収した。

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン  
ATK1000 4000

「そして墓地のモンスター一体につき、攻撃力を1000ポイントアップする。俺の墓地のモンスターは五体！よって500ポイントアップだ！」

鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン  
ATK4000 4500

「鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンでダブルコストンに攻撃！」

フル・ダークネス・バースト!!」

鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンは自らが持つ果てしない闇のエネルギーをダブルコストン（ATK1700）に向けて一気に放出した。

「図に乗るな。畏発動、ガード・ブロック。発生する戦闘ダメージを0にする」

鎧黒竜の闇は瞬矢には届かず、見えない壁に阻まれた。

「そしてカードを一枚ドロウする」

瞬矢はドロウしたカードを見て表情には出さなかったが西上にはそのカードが直感的に瞬矢の待ち望んだカードだと分かった。

「（何らかのカードを引いたか……）  
カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

西上LP4100

場：鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン（ATK4500）

未来融合 - フューチャー・フュージョン（鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴン対象）

ホルスの黒炎竜LV8（鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンに装備中）

伏せカード一枚

「俺のターン!!! 永続畏、リビングデッドの呼び声を発動。墓地よりダブルコストンをフィールドに呼び戻す。」

ダブルコストーンは闇属性モンスターをアドバンス召喚する時、一体で二体分のリリースとする事が可能。ダブルコストーンをリリース！

ダブルコストーンは粒子状となって消滅し、その上空に巨大な影が出現した。

「！……そいつは……」

「漆黒の太陽よ、この世を闇で照らし出せ！現れる、The supremacy SUN！！」

先程の様に瞬矢の目が銀色に輝くと同時にThe supremacy SUN(ATK3000)が姿を現し、フィールド全体を闇で覆い尽くした。

「これが最凶のプラネットシリーズ、そして我がデッキの最強の切り札、The supremacy SUNだ！！」

「プラネットシリーズのカードか……だが攻撃力は俺の鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンには劣る」

「貴様に言われなくとも分かっている。速攻魔法、サイクロン発動。俺が破壊するのは未来融合・フューチャー・フュージョン」

フィールドに旋風が吹き荒れ未来融合は遙か上空に飛ばされて行った。

「未来融合が破壊された事で、鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴンは破壊される」

「ちっ……」

「行け、The supremacy SUN！エブニー・ソーラ  
ー・バースト！！」

The supremacy SUNの放つ強烈な闇の波動が西上  
を直撃した。

「ぐっ……………」

西上LP4100 1100

「ターンエンドだ。大口を叩く割には大した事は無いな」

瞬矢LP9100

場：The supremacy SUN（ATK3000）

「ぐっ……闇に染まった太陽のモンスターか……まるで今のお前だ  
な」

「どういう意味だ？」

「昔のお前は総司やミツバ、おと……父親の周りを太陽の様に明  
るく照らす天真爛漫な少年だった。

だが今は自らの心の闇に堕ち、この世を滅しようとしている」

「っ……止める……」

一瞬だけが瞬矢はその表情をはっきりと歪ませた。

「瞬矢よ、お前は今逝ってしまった皆に対して胸張って顔向け出来るのか？」

「・・・止める・・・」

「皆がお前に望む事はそ」止めるおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

先程のクールな雰囲気から一転し、瞬矢は頭を押さえて煩悶し始めた。

「止めるおお・・・俺の・・・人格が・・・崩れ・・・」

そんな瞬矢を見て改めて西上は自身の右目に触れた。

「・・・俺のこの目が……オリハルコンの眼がはつきりと教えてくれている。お前は瞬矢じゃない。瞬矢の中の心の闇が具現化された存在、言わば瞬矢の第二人格！！」

「止める・・・俺の・・・精神が・・・崩か・・・い」

「瞬矢…俺はお前を救う！！あいつの……俊矢の為にもな！！……ドロー！！」

手札より魔法カード、オーバーロード・フュージョン発動！」

西上は墓地から・・・

サイバー・ドラゴン

サイバー・ツイン・ドラゴン

融合呪印生物 - 光



鎧黒竜・サイバー・ダーク・ドラゴン  
サイバー・ダーク・ホーン、エッジ、キールの計七体を異次元へと飛ばした。

「降臨せよ！合成獣、キメラテック・オーバー・ドラゴン！！」

七つの首を持つ表サイバー流の切り札とも言うべきモンスター、キメラテック・オーバー・ドラゴンが咆哮を挙げながら西上のフィールドに出現した。

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの攻撃力は融合素材にしたの数×800ポイントとなる」

キメラテック・オーバー・ドラゴン

ATK? 5600

「そして装備魔法、ミストボディを発動、The supremacy SUNに装備。このカードが装備されている限り、装備モンスターは戦闘によっては破壊されない」

The supremacy SUNの全身が霧状となりあらゆる攻撃に対して耐性を持った。

「これで終幕だ。キメラテック・オーバー・ドラゴンは融合素材にしたモンスターの数まで相手モンスターに攻撃出来る。

キメラテック・オーバー・ドラゴンで、The supremacy SUNに連続攻撃！！エヴォリューション・レザルト・バースト！！七連打アア！！！！」

キメラテック・オーバー・ドラゴンの七つの首が瞬矢に向けられ、

青白いエネルギー波を一斉に放出した。

「ぐっ……ぐあああああああああやややあああああああ  
ああ……!!!!!!」

瞬矢LP91000

攻撃の衝撃で瞬矢は壁まで吹き飛ばされ、その目からは銀色の輝きが消滅していったのだ……

激突する紅と銀 - 両者の眼が示す力は・・2 (後書き)

次回、敗れた瞬矢、傍観していた四つ葉達、そして西上が取る行動は……

5D'sの最終回はかなり感動しました(TOT)

特に龍亞や龍可の成長ぶりに涙が……(<|>)

次回もよろしくお願いいたしますm┐┌( )m

お知らせ!!

お知らせと言ってもこの小説を消去しますとかではないので御安心下さい (^\_^;)

この小説を自分で読んでいて、やはり中盤までやっていた台詞の前にキャラの名前を出していたのが読みにくいと感じました。

最近は止めましたが、初めて読んでくださる読者の皆様の事も考え、名前の部分を削除し、同時にストーリーとは関係ありませんが誤字脱字や表現等も少々変更していきます。

勿論本編の続きも更新しますので御安心下さい。

作者の力不足を深くお詫び申し上げます m(\_ \_) m

それでは次回も『遊戯王・真相の果て』をよろしくお願い致します!! m(\_ \_) m

失意と願いの果てに（前書き）

今回、決闘がありますが途中経過を省略しております。

それではどうぞー！

## 失意と願いの果てに

「ぐああああああああやああ!!!」

瞬矢LP91000

キメラテック・オーバー・ドラゴンの連続攻撃に生まれた爆風によって瞬矢は背後の壁の方に吹き飛ばされていた。

「!!!…瞬矢さん!」

頭で考えるより速く四つ葉は壁の前まで駆けて行き、飛ばされて来る瞬矢を受け止め、そのまま壁と衝突した。

「四つ葉!!!」

ソリッドビジョンが消滅した後、西上もすぐに瞬矢の方に駆け寄った。

「大丈夫か、四つ葉?」

「っ……………私は…平気です。私より瞬矢さんは?」

「……………どうやら、また戻ってしまったらしいな……………」

西上が見た瞬矢の表情……………それは生き地獄に陥っている死人の様な表情だった。

「……………まさか、瞬矢が負けるとはな…」

そう言いながら迫って来たのは傍観していた駆将だった。

「一体お前は誰だ？瞬矢を打ち負かす程の決闘テクニク、そして闇のゲームすら無効にさせるあの紅い目……………確かオリハルコンの眼とか言ったか。

だが貴様に構ってる暇は無い、今は瞬矢をこちらに渡して貰おうか？また闇に引きずり落としてやる」

「(……………仕方ない…か)

四つ葉、これを…」

「えっ!?!」

四つ葉が渡されたのは西上が最初に付けていた決闘盤だった。

「少しでいい、時間を稼いでくれ。必ず瞬矢をこの生き地獄から解放させる」

「分かりました。瞬矢さんを……………頼みます…」

四つ葉の返答を確認した西上は瞬矢を連れて部屋の隅の方へ移動した。

「ちっ、待ちやがれ!!」

「行かせません!貴方達の相手は私です!!」

「邪魔を……雑魚めが！更に進化した俺や氷川のデッキに打ちのめされるがいい！！殺るぞ氷川！！」

「私の新たなデッキ……その切れ味を貴女で試してやろう」

「「決闘！！！！」」

四つ葉達から十数メートル程度離れた所まで来た西上は瞬矢を壁に寄り掛からせ、瞬矢の決闘盤を傍らに置いた。

「現実から逃げるな瞬矢。ちゃんと四つ葉の決闘を見届けろ」

「……………」

反応すらしない瞬矢に尚も西上は続ける。

「……あの時お前にキメラテック・オーバー・ドラゴン、キメラテック・フォートレス・ドラゴン、サイバー・エルタニンの三枚を渡したのは失敗だったな……」

「……………」

「俺が渡さなければお前は憂司にも負けていただろうな。その場合でも俺がこの目で助ければ、今の状態になることはなかった」



「……………」

「…それだけは謝っておく……………すまなかった…」

「手札より永続魔法、神の居城・ヴァルハラを発動します！ヴァルハラの効果により、手札のThe splendid VENUSを特殊召喚！！ターンエンドです」

「俺のターン！見やがれ！！これが陰達に与えられた至高のカードだ！！」

「（！！……………まさか、あのカードは……………）」

瞬矢、お前が何もしなければそのままだと四つ葉は死ぬ。とてもじゃないが、あの二人の猛攻に四つ葉は耐えられん。行け、あいつを

救えるのはお前だけだ」

「……………俺にはもう……そんな資格は無い……」

「少しは喋れる様になったか。ならとつと四つ葉を助けに行け」

「……………無理だ　人を殺めてしまったんだ……………あの日俺があのでッ  
キの封印を解いたから　出来る事なら……………このまま死にたい……………」

「過去に囚われて現在、そして未来をも潰すつもりか？愚か者が！  
そんな事を誰が望む?!」

「……………俺が決めた事だ……………お前にそ……ぐつ……うつつうつ……  
あああああああああああああああ……!」

「!………どうした、瞬矢!？」

突然瞬矢は右手で頭を押さえて苦しみだした。

「……………精神が……………何処かに……………とば……………」

その言葉を最後に瞬矢は意識を失い、まるで抜け殻の様にその場に横になった。

「（……………今一瞬感じたあの気は……………）  
まさか……あいつが……………」

「！！……そんな　私のVENUSが……」

「止めだ。私が味わった苦界を身を以って知るがいい！！モンスターでダイレクトアタック！！！」

「（くっ……これ以上は無理か……）  
四つ葉！！」

西上は自身の決闘盤を装着し、四つ葉の援護に向かった。その瞬間、西上の横を何かが過ぎ去った。

「！！……まさか……！？」

「死ね、四つ葉ああ！！」

「っ……きゃああああ！！！！」

迫って来る衝撃を前に四つ葉は目を閉じた。

「……………え……………」

しかし、四つ葉が覚悟した衝撃は到達しなかった。驚いて目を開いた四つ葉が見た光景……それは彼女が待ち望んだ彼の雄姿だった。

「／／……瞬矢さん！！」

「瞬矢！！」

二人が目を見張った光景……それは銀色に輝かせた瞬矢がサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃を防ぐ姿だった……

失意と願いの果てに（後書き）

次回、生き地獄から復活した瞬矢に挑む者は

次回もよろしくお願い致します！！m（）（）m

堕ちたプロ決闘者と超越者…神VS古の巨兵…1(前書き)

一話一話が短いながらもやっと50話目まで来れました。これも偏にこの様な小説を読んでもくださっている皆様のお陰です。本当に有り難うございますm( )m

それではどうぞ…!

墮ちたプロ決闘者と超越者…神VS古の巨兵…1

「瞬矢さん……やっと…戻って来て…」

愛しい人が帰還し、涙を流している四つ葉を瞬矢は片手でそっと抱き寄せた。

「……心配をかけて済まなかったな。俺はもう…大丈夫だ」

「／／…瞬矢さん……！！　その目は？」

「説明は後だ。今は………」

銀色に輝く眼で瞬矢は前の二人を睨みつけた。

「ちっ……まさかあの状態から這い上がるとはな………」

「須崎……この私が叩きのめしてやる！！」

「……来るなら来い、俺はもう何も失わない！」

三人は睨み合い決闘盤を構えた。

「…焦るなよ、瞬矢」

三人の間に西上が割り込んだ。

「いくらお前でも二人相手はきついだらう。俺が一人　氷川と  
か言っただか、奴は俺に任せろ」

「……………大丈夫か？」

「今度は俺の本来のデッキだ。お前ならまだしも、あいつには負けんよ」

「…頼んだぞ」

「勝手に進めやがって……………殺してやるよ、瞬矢も……………貴様もな！！」

「「決闘！！」」

「俺の先攻、ドロー。モンスターをセットして…ターンエンドだ」

西上LP8000

場：裏側守備モンスター

「私のターン！私は極星天ヴァルキュリアを召喚！

ヴァルキュリアが召喚に成功した事により、手札の極星天ミール、極星将テュールの二枚をゲームから除外してエインヘリアル・トークン二体を特殊召喚する！！」

氷川のフィールドに鋭利な刀剣を携えた天使、極星天ヴァルキュリアが現れ、同時にエインヘリアル・トークン二体を生成した。

「…いきなりだな…シンクロ召喚するならするがいい」

「ならば遠慮なく。レベル4のエインヘリアル・トークン二体にレベル2の極星天ヴァルキュリアをチューニング！！」



ヴァルクユリアが剣で描いた光輪が高速回転し、エインヘリアル・トークンを包んだ。

「北欧より伝承されし星界の神よ！愚かな屑共に鉄槌を下す為舞い降りよ！！シンクロ召喚！全知全能の神、極神聖帝オーディン！！」

部屋全体が目映い光に包み込まれ、極神聖帝オーディン（ATK4000）が神々しい気迫を放出しながら光臨した。

「…極神聖帝オーディン　あの不動遊星をも苦しめたモンスターか…」

「極神聖帝オーディン！？どうして氷川さんが三極神の一体を！？」

「あのモンスターの前に…私は敗北するしかなかった…」

「ハハハハハハハハ！！見せてやれ氷川！お前の神を！！」

「バトルだ！オーディンでセットモンスターに攻撃！セレスチャル・トール！！！！」

極神聖帝オーディンの雷撃を伴う斬撃が巨大ネズミ（DEF1450）を貫いた。

「巨大ネズミが戦闘で破壊された事により、デッキから攻撃力1500以下の地属性モンスター、古代の機械兵士を特殊召喚！」

「カードをセットし、ターンエンドだ！」

氷川LP8000

場：極神聖帝オーデイン（ATK4000）

伏せカード一枚

「俺のターン。フィールド魔法、歯車街発動！更に速攻魔法、ダブル・サイクロン発動！俺の場の歯車街とそのリバースカードを破壊する！！！」

フィールドに旋風が吹き荒れ、歯車街と氷川の伏せカードが吹き飛ばされた。

「ちっ　　奈落の落とし穴が……」

「歯車街が破壊された事により、デッキからアンティーク・ギアを一体特殊召喚する。現れよ、古代の機械巨竜！」

全身が機械でコーティングされたアンティーク・ギアモンスター、古代の機械巨竜（ATK3000）が舞い降りた。

「さらに手札から融合発動！場の兵士、巨竜、手札の巨人を融合！来い、古代の英知の結晶、古代の機械究極巨人！！！」

フィールドと手札のアンティーク・ギアが空中で一体化し、古代の機械究極巨人（ATK4400）がその懐古的な姿を現した。

「攻撃力4400だと?.....」

「古代の機械究極巨人で極神聖帝オーディンに攻撃!アルティメット・フィストクラッシュ!!」

古代の機械究極巨人の巨大な拳と極神聖帝オーディンの強大な槍がぶつかり合い、そこで生じた多大な衝撃が二体の周囲に分散するのだった

堕ちたプロ決闘者と超越者…神VS古の巨兵…1 (後書き)

次回、神に抗う西上のアンテイク・ギアは……

次回もよろしくお願ひしますm ( ) ( ) m

堕ちたプロ決闘者と超越者…神VS古の巨兵…2(前書き)

氷川VS西上の決着です。

そして氷川の心の闇の正体とは……………

それではどうぞ…!

## 墮ちたプロ決闘者と超越者…神VS古の巨兵…2

古代の機械究極巨人の拳と極神聖帝オーデイン槍が激突し、拮抗し合っていたがやがてオーデインの槍が崩れ始め、バラバラになった所で古代の機械究極巨人の右手がオーデインの胸部を貫いた。

「ぐっ……オーデインが……」

氷川LP8000 7600

「俺はカードを一枚セットし、ターン終了だ」

「くっ…エンドフェイズに墓地の極星天ヴァルクユリアを除外し、オーデインの効果を発動！極神聖帝オーデインを墓地から蘇生する！！」

氷川のフィールド上空から神々しい光が出現し、その中から極神聖帝オーデインが西上に向けて威光を発しながら復活した。

「極星天が存在する限り半永久的に復活し続ける……これが神か……」

西上LP8000

場：古代の機械究極巨人（ATK4400）

伏せカード一枚

「（攻撃力4400……今のオーデインでは太刀打ち出来ない…）  
くっ……どうすれば……」

「どうした？代々続くプロ決闘者の家系と聞いたが、所詮自分一人では決闘で勝つ事も出来んどら息子か？」

「貴様に何が解る……デュエルアカデミアネオ童実野校を卒業後に親父のコネでプロ入り……しかしその後は大した実績も上げられず、スポンサーからも見放され墮落した私を……！」

西上は怒りと悲しみの表情で語る氷川を見詰めた。

「そして公表されていないが既に親父からは勘当された……こんなバカ息子の世話は見切れんだそうだ。親父やスポンサーの信頼を取り返そうと思ってやっと出場出来たIDGPだが一回戦で敗北……絶望に打ちのめされた所に陰達の僕……そんな奴の気持ちなぞ分かるまい」

「……それで、お前は本当に満足するのか？陰達の……自分より年下の僕となって何が楽しい？」

その問いを聞いた瞬間に氷川は目を見開き西上に向かって怒号した。

「では何をすればいい！！何もかも……親からも見捨てられた愚かな男が生き延びる術が他にあるというのか！！」

「……それがお前の心の闇か……お前の父が本当の意味でお前を見捨てる訳なかるう」

「黙れ！！貴様が親父の何を知っている！！」

「知っているさ。十年程前に何度か決闘した、だから俺には分かる。氷川涼！お前の父は本当の意味で見捨ててはおらん！！」

「!?……だが、現に親父は私を……」

「あの男は今お前を試している。どん底から這い上がるか、このまま野垂れ死ぬかをな」

「そうだとしても、心の闇に堕ちた私は這い上がる資格など……」

「既にこの眼でお前の闇の大部分は払った。後はこの決闘の中で自分自身でケリをつける」

西上の言葉に感化されたのか、氷川からそれまで纏っていた凶々しいオーラが消え去った。

「……私は……俺は……この決闘で、俺の闇と決別する!!  
俺の……ターーン!!……俺はこいつに賭ける!速攻魔法、手札断殺を発動!互いに手札を二枚捨て二枚ドロウする!」

「フフ……さあ来い、氷川涼!!」

「ドロロー!!……俺は極星天ミームルを捨て、魔法カード、ライトニング・ボルテックスを発動!古代の機械究極巨人を破壊する!!」

西上のフィールド上空から放たれた雷が古代の機械究極巨人に直撃し、墓地へと葬られた。

「(古代の機械究極巨人を破壊するカードを引き当てたか……)  
破壊された古代の機械究極巨人の効果発動!このモンスターが破壊



された時、墓地の古代の機械巨人を特殊召喚する」

古代の機械究極巨人の破壊された地点の床に輝が入り、そこから古代の機械巨人（DEF3000）が守備体勢で呼び出された。

「ならば……極神聖帝オーディンで古代の機械巨人に攻撃！セレス  
チャル・トール！！！」

極神聖帝オーディンの巨大な槍が脳天を貫通し、古代の機械巨人はそのまま崩れ去った。

「……見事な一撃だ。お前の気迫は十分対戦相手の俺には伝わった。それに応え、俺も本気を出そう……」

暴発動、バイロード・サクリアイス！！モンスターが戦闘で破壊された事により現れよ、サイバー・オーガ！！」

古代の機械巨人が破壊された場所に突如として現れた空間の中からサイバー・オーガが現出した。

「……ターンエンド」

氷川LP7600

場：極神聖帝オーディン（ATK4400）

「俺のターン！」

（削れない……神を従えても……奴のライフが……一切削れない……）

「俺は貪欲な壺を発動。墓地のアンティーク・ギア四体と巨大ネズ

ミをデッキに戻し、その後カードを二枚ドロ―！融合呪印生物・地を召喚！」

（……………俺には分かる……………この男は　　この神をも超えて来る！）

「融合呪印生物・地の効果発動！このカードとサイバー・オーガをリリース、サイバー・オーガ・2を特殊召喚！！」

サイバー・オーガと融合呪印生物は共に融合し合い、サイバー・オーガ・2（ATK2600）が誕生した。

「……………サイバー・オーガ・2……………機械で構築された鬼神か……………」

氷川はサイバー・オーガ・2に対して素直に感想を呟いた。

「さらに魔法カード、死者蘇生発動！俺の墓地から融合呪印生物・地を特殊召喚！」

先程サイバー・オーガ・2の召喚に利用されたグロテスクな風貌のモンスター、融合呪印生物・地が再びフィールドに戻った。

「デッキの一番上のカードを墓地に送り、墓地からグロ―アップ・バルブを特殊召喚。

レベル3の融合呪印生物・地にレベル1のグロ―アップ・バルブをチューニング！！」

グロ―アップ・バルブの全身が白く輝き、やがて一輪の光となって融合呪印生物を包み込んだ。

(融合モンスターの出現からシンクロ召喚 一分の隙も無い…)

「大いなる力の為現出し、他の者を助長させよ!!!シンクロ召喚! 助勢せよ、アームズ・エイド!!!」

西上の宣言と同時に片腕だけのモンスター、アームズ・エイド(ATK1800)が一筋の光の中から姿を現した。

「アームズ・エイドの効果発動!俺の場のサイバー・オーガ・2にこのカードを装備し、攻撃力を1000ポイントアップさせる!」

サイバー・オーガ・2

ATK2600 3600

「サイバー・オーガ・2で極神聖帝オーディンに攻撃!サイバー・オーガ・2のモンスター効果、攻撃対象モンスターの攻撃力の半分を自身の攻撃力に加算する!!!」

サイバー・オーガ・2

ATK3600 5600

「!!! 攻撃力5600」

「まだ終わらん!さらに魔法カード、リミッター解除を発動!!!サイバー・オーガ・2の攻撃力を倍にする!!!」

サイバー・オーガ・2

ATK5600 11200

サイバー・オーガ・2が限界を突破し、青白かった体は赤くなり体

中から蒸気が吹き出した。

「…氷川涼、これで終焉……だな」

「あぁ、俺はこれから 何も無い所から這い上がってやるよ……」

「……そうか。決めて、サイバー・オーガ・2!!!リミットオーバー・ギガントプレス!!!!」

サイバー・オーガ・2の強烈過ぎる威力の拳が極神聖帝オーディンを微塵も残さず叩き潰した。

氷川LP7600 400

「アームズ・エイドの効果発動!このカードを装備したモンスターが戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える!!!」

装着中のアームズ・エイドがサイバー・オーガ・2の右手から氷川本人に向けて発射され、周りにその衝撃が広がった。

氷川LP4000

ダメージの衝撃で周りに煙が立ち込めたその後、傍観していた瞬矢達はその目で見たものは………一点の曇りの無い穏やかな表情で西上を見る氷川の姿だった……

墮ちたプロ決闘者と超越者…神VS古の巨兵…2(後書き)

次回、西上達の決闘が終わり、ぶつかり合う瞬矢と駆将は……

最近ふと思ったんですが、5D'sの2番目のオープニングってZ  
ONE達にも当て嵌まると思いました。私にとっては1番好きなオ  
ープニングだったりします(何の話だ)

脱線しましたが次回もよろしくお願いします!!m( ) ( ) m

祝！50000PV達成！ぶっちゃけトーク！！（前書き）

漸くこの小説も50000PVを達成する事が出来ました。これも偏に読者の皆様のお陰です。本当に有り難うございますm（（

m

それを記念致しまして今回は番外編となっております。いつもと違ってはっちゃけた感じの瞬矢達をお楽しみ下さい！

それではどつぞー！

祝！50000PV達成！ぶっちゃけトーク！！

「ハイ！という訳でぶっちゃけトークの司会を務めるのはこの僕、本編で唯一瞬矢先輩に勝利した遊城翔夜と」

「この小説の主人公、サイバースタリッシュの須崎瞬矢！そして」

「瞬矢さんと同棲同然の生活をしている藤堂四つ葉です。よろしくお願ひします！」

ちよつと待てい！！今回は作者もいんだから説明とかさせてくれたっていいじゃねえかよ

「いやだって……作者小説の腕無いし」

「リアルな苦情だって来てたんだぞ！」

「最つ低です！！」

お、お前ら……ガハツ！！

「さあ作者に瀕死の重傷を負わせた所で行ってみましょう！！」

「祝！50000PV達成！ぶっちゃけトーク！！！！」

「いや、本当にやつとって感じですね」

「全くだ。随分長い道のりだったぞ」

「一話一話が短いし人気もないですもんね……」

「本当こんな小説読んで下さってる方達は神ですよ」

「だよな〜。というかお前、今病院いるんじゃないのか？」

「この際時系列とかは無視でいいんじゃないんですかね。せつかくの祝賀会なんですし！」

「そうですねよ〜瞬矢さん。所でぶっちゃけトークって一体何をぶっちゃけるんですか？」

「まあ説明の前に作者から渡された台本に従って一旦ゲストを呼ぼうか。この方々ですどうぞ！」

「あれ？何か聞き覚えのある音楽流れて来ましたけど？」

「どうも〜!!」

「フン……………」

「フフツ　面白そうだね　」

「ちょっと！色んな人入場して来ましたけど!？」

「みなさんは何のくくりですか？」

「僕たちは!!」



「『『遊戯王 真相の果て』登場キャラクターです……!』」

「て、おい作者ああああ!」

ボカッ!

痛っ!!いきなり作者に拳骨ってどういうことじゃー!!

「それはこっちの台詞です!今貴方の作成した台本の通りにしましたか……」

「ぶっちゃけトークって聞いた時から思ってたけどさ……」

「これテレ○の某トーク番組まんまじゃねえかよ!」

だって実際好きなんだししょうがないじゃん!

「言い訳するなお笑いヲタ作者!」

いてっ!!ちよっと、決闘盤のめちゃくちゃ堅そうな部分で叩くの止めて!

「たく 訴えられるかもしれないから○メトークパクンのは無しな!じゃあ今回の主旨を発表します」

「先程のゲストが一人ずつ登場しますのでそれぞれに一つずつ質問をしていきゲストがそれを答えていくという主旨になっております!」

「それじゃ一人目どうぞ!!」

まず一人目は若くして海馬コーポレーション総帥、そしてIDGP  
ベスト4進出者の海馬彼方で〜す!!

「一人目から海馬さん!？」

「フン、須崎!この俺をこんな下らん会に呼び出すとはな」

「・・・まあまあそんなに怒らずに。せつかくの祝賀会なんですから。」

「フン、海馬コーポレーション総帥という仕事柄俺も暇ではないんだ。すぐにこんな茶番済ませてもらうぞ」

「(結構怒ってらっしゃる...)

まず第一の質問です。これは翔夜が直々に聞きたかった事だとか」

「ハイ!ズバリ聞きますけど、最近社長辞めたんですか?」

「戯けた事を抜かすな!!まだ現役で仕事をこなしとる!」

「え〜だって野球部の監督やってませんか?NOKで...」

「ふざけるのも大概にしろ!!俺はもう帰る!お前らの戯れ事につきあってられるか!!」

「あ、ちょっと!海馬さん!」

あゝあ、帰っちゃった。

「…もう。翔夜さんがあんな質問するから…」

「だって海馬さん、も○ドラに出てる人に声そっくりなんですもん」

「先祖代々ああゆう声質らしいからなあ」

テレ○とN○Kを敵に回してしまった(T○T)・・・

・・・それでは二人目、雪代憂司どうぞ・・・

「いやあの……登場しにくいんですけど……」

「作者テンション低っ!」

お前らのせいだよ

「まあいいや。それじゃあ憂司君に質問です!」

【この小説内で憧れている決闘者は?】

「え〜と……やっぱりお兄さんかな。裏サイバー流使ってる時カッ  
コイんだ!」

「（…洗脳時と性格全然違う　　）  
やっぱ総司さんか。あの人は精神も強いし俺も尊敬してるよ」

決闘描写が一回しかなかったんだけどね。しかも負け決闘だし。三年前の瞬矢じゃ手も足も出ない位強い設定なんだけどね。

「作者静かに！」

「兄さんの悪口言わないで下さい！！」

・・・みんな俺のコトキライ？・・・

「という訳で二人目のゲスト雪代憂司でした。  
続いてはこの方です！」

三人目のゲストは瞬矢達の最大の仇敵、無月陰達！！

「ちよつと作者！本当にこいつ出していいのか！？」

まあいいからいいから。番外編だから今日だけは昔の事は忘れて！

「ホント今日だけだからな！それじゃあ陰達への質問はこちらです  
！」

【一応この小説の悪役ですが普段の過ごし方は？】

「普段かい？そうだね　三年前に瞬矢と会った後は世界中を転々としていたよ。そして数々の決闘者との出会いと別れを繰り返したね。まあ負けることは無かったけど」

「ほお、何か意外だな。俺には殺戮を繰り返しているイメージが無かったからな……」

「人を外見だけで判断しない方がよいよ瞬矢。俊矢からはそういう事教わらなかったのかい？それだからアカデミアでも翔夜以外友人が出来ないんだよ？」

「（無性に腹立つ……）  
ハイありがとうございます。以上無月陰達でしたー」

強引に追い出したなオイ

「これで全員出たかな」

「そうですね。なんだかあっという間でした」

「…実は、先輩と四つ葉さんに内緒でもう一人ゲストがいらっしやります！」

「おっ、マジで？もしかして氷川さんとかか？」

この方ですどうぞー！！

「ええ！？」

「うそ……」

「本日最後のゲストは先輩と共にサイバー流を学んでいた決闘者、藤堂ミツバさんですー！！」

「瞬ちゃんに四つ葉！久しぶり〜！」

「ミツ姉、どうやってここに？」

「冥界で出来た友達にサイコデュエリストがいてね、今日だけ死者蘇生を発動して生き返らせてもらったの！

それにしても……瞬ちゃんホントに成長したよね。背だって三年の間にはら　こんなに大きくなっちゃって……」

「ミツ姉……」

「ちよつ、ストオオオオプ！！！」

何だよ四つ葉、いい感じだったのに……

「お姉ちゃん！瞬矢さんの事誘惑しないで下さい！！！」

「人聞きの悪い事言わないでよ。せつかくの感動の再会シーンが台なしじゃない」

「いいから瞬矢さんから離れてよ！」

「もう……しょうがないなあ」

「先輩、罪深過ぎですよ。こんな美人姉妹虜にするなんて」

「／／／……あんまりからかうな翔夜……」

「……ミツバさん！？」

あ、憂司が戻って来た。

「やっぱりミツバさん！？てことは兄さんもここに？」

「あゝ総司と俊矢さんは冥界一決闘大会に出場するから来れなかったのよ。まあ総司も元気にやってるから心配無いわよ」

「そうですか……向こうに戻ったら兄さんにボクも元気にやってる  
と伝えて下さい」

「了解！ちゃんと伝えておくわね。それと……四つ葉……！！」

「っ！ ばれちゃった」

「何瞬ちゃん連れて逃げようとしてんのよ！」

「いくらお姉ちゃんだからって瞬矢さんは渡せません！」

「……こうなったら瞬ちゃんを賭けて決闘よ！妹だからって容赦しないからね！！」

「しなくて結構よ！瞬矢さんは絶対渡さないからね！！」

あーあ、姉妹喧嘩始めちゃった……

「これじゃ質問は無理ですね。しょうがないからここらでお開きに  
しますかね」

「……そうだな。じゃあ巻き込まれない内に俺もそろそろ……」

「瞬矢さんはそこにいて下さい!!」

「私が勝つたら今日一日付き合っただけだからね!」

「……………はい」

「それじゃ瞬矢先輩。僕はこれで失礼しますね」

じゃあな〜瞬矢〜

「うう　作者まで…………」

「行くよ四つ葉!!」

「はい!!」

「決闘!!」

余談だが決闘は引き分けに終わり、結局三人でデートする事になった瞬矢は姉妹に散々付き合わされたのだった……………



祝！50000PV達成！ぶっちゃけトークー！！（後書き）

次回からは本編の続きに戻ります。

今後も『遊戯王 真相の果て』をよろしくお願い致しますm（  
—）m

成長した決闘者VS進化したHERO……自らの存在意義とは……1（前書き）

今回は瞬矢VS駆将になります。サブタイトルにも重要な意味が……

……

それではどござー！

成長した決闘者VS進化したHERO……自らの存在意義とは・・・1

「ありがとよ、あんたのお陰で俺は 絶望せずに生きて行けそう  
だ……」

決闘後氷川は西上の元に歩み寄り、自身を真理に導いてくれた事への謝辞を述べていた。

「礼には及ばん。伝説の神とも闘えたしな……俺に取ってもいい決闘だった」

「一つ頼みがあるんだがあんたのそのデッキ……神をも寄せ付けない力を俺に一時預らせてはくれないか？」

「悪いがそれは出来んな。このデッキはもう譲る相手が決まってるのでな……」

「まさか こんな事が」

二人が談笑している所から少し離れた場所で駆将は西上の技量に驚嘆していた。

「・・・神があの方にダメージを一切与えられないまま倒されただと・・・」

「駆将……翔夜も言っていたらう。『洗脳されて得た力には限界がある』ってな。本物の決闘者にはそんな小細工は通用しないんだよ」

「黙れ！俺に必要なのは全てを薙ぎ倒す力！そしてその後待ち受ける勝利　それだけだ！！」

「……河上駆将、俺は翔夜の想いを引き継ぎお前を救う！」

「フン、お前の助けなど不要……殺してやるよ、闇のゲームでな！！」

駆将が千年盤を構えると部屋全体が闇に覆われ、傍らにいた四つ葉にも闇が迫っていた。

「っ！……瞬矢さん！！」

「（四つ葉！）  
闇のゲームはさせない！」

瞬矢の両目が銀色に輝き出し、辺り一面に蔓延っていた闇が粒子となって消滅した。

「チツ、厄介な能力身に付けやがって……」

「これで命懸けの決闘は無しだ。行くぞ！」

「「決闘！！」」

「俺から行かせてもらっぜ須崎、ドロー！魔法カード、E・エマー

ジェンシーコール発動。デッキからE・HERO エアーマンを手札に加える。そしてエアーマンを攻撃表示で召喚！」

強力なサーチ能力、そして魔法・罠カード破壊効果を持つE・HERO エアーマン(ATK1800)が姿を現した。

「エアーマンの効果により俺はデッキからE・HERO オーシャンを手札に加える。カードを一枚セットし、ターンエンドだ」

駆将LP8000

場：E・HERO エアーマン(ATK1800)

伏せカード一枚

「(E・HERO……こいつも氷川さんの様に陰達から新たな力を与えられた筈だが……)俺のターン、ドロー！モンスターをセット、カードを二枚伏せターン終了」

瞬矢LP8000

場：裏側守備モンスター

伏せカード二枚

「(守備に回ったか だが!)ドロー！魔法カード、融合発動！手札のオーシャンとバーストレディを融合する！」

「その二体の融合だと……まさか……」

「出でよ……E・HERO アブソルトZero!!」

白銀のマントを身に纏い、身体中から凍てつく冷気を放出する騎士の様な出で立ちのモンスター、E・HERO アブソルトZero(ATK2500)が融合召喚された。

「アブソルトZero……これが奴の新たなカードか……」

「行けアブソルトZero!!瞬間氷結!!」

「リバースカードオープン、聖なるバリア・ミラーフォース……これで相手の攻撃モンスターを全て破壊する!!」

アブソルトZeroの吹雪による攻撃がミラーフォースによって反射され、二体のHEROは荒れ狂う氷雪に包み込まれた。

「フフ……ヒャーハツハツハ!!まんまと引掛かったな須崎!!」

「?……どういう意味だ?」

「アブソルトZeroなど新たなHEROのための通過点に過ぎん!今そのHEROを見せてやる!!」

瞬矢のフィールドに煌びやかな氷の嵐が吹き荒れ、裏側守備モンスター……マシユマロンが凍りつき吹き飛ばされて行った。

「!?!……駆将……一体何をした?」

「俺は貴様のミラフォにチェインしこのリバースカード、マスク・チェンジを発動したのさ!」

このカードは俺の場のHEROを墓地に送りエクストラデッキから墓地に送ったモンスターと同じ属性のM・HEROを特殊召喚する！」

「M・HEROだと？」

「変身召喚！現れよ、M・HERO ヴェイパー！！！」

突然現れた水流の中から白亜の槍を構え、淡い水色の仮面を付けたHERO、M・HERO ヴェイパー（ATK2400）が降臨した。

「アブソルートZeroが墓地に送られた時相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！さらにM・HERO ヴェイパーはカード効果では破壊されない！！！」

「・・・成る程。それで俺のマシユマロンが破壊され、俺のミラーフォースを受けてもお前のヴェイパーが生き残っているという訳か……」

現状を瞬時に理解した瞬矢は来るであろう駆将の攻撃に身構えた。

「M・HERO ヴェイパーでダイレクトアタック！フリーアタック  
エクスペロージョン！！！」

「リバースマジック、月の書発動。ヴェイパーを裏側守備表示にする！」

攻撃体勢を取っていたM・HERO ヴェイパーは月の書によってセットされた状態になった。

「チ……………ターンエンドだ」

駆将LP8000

場：裏側守備モンスター

「俺のターン！相手フィールドにのみモンスターが存在する事により、手札からサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！更にチューナーモンスター、グローアップ・バルブを召喚！」

「レベルの合計は 6か」

「レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！シンクロ召喚！現れよ、C・ドラゴン！」

「攻撃力2500……………ヴェイパーを上回ったか……」

「墓地のグローアップ・バルブの効果発動。デッキの一番上を墓地に送り、このカードを特殊召喚する。レベル6のC・ドラゴンにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング!!」

「連続してのシンクロ召喚だと」

「悲しみを乗り越えし漆黒の竜よ、今こそその雅なる花を咲かせよ！シンクロ召喚！舞い散らせ、ブラック・ローズ・ドラゴン!!」

溢れんばかりの光の中から鮮やかな黒薔薇が舞い散り、ブラック・ローズ・ドラゴン（ATK2400）が現出した。



「伝説の……シグナーのドラゴン……」

「ブラック・ローズ・ドラゴンの効果発動。墓地のグロリアップ・バルブを除外する事でM・HERO ヴェイパーを攻撃表示にし、その攻撃力を0にする！ブラック・ローズ・フォール！」

「なんだと!？」

M・HERO ヴェイパー

ATK2400 0

「ブラック・ローズ・ドラゴンでヴェイパーを攻撃！ブラック・ローズ・ヴェンジエンス!!」

ブラック・ローズ・ドラゴンは眼前に紫紺の艶めかしい波動を創出し、M・HERO ヴェイパーに向けて放出した。

「ぐっ……………」

駆将LP8000 5600

「…ターンエンド」

瞬矢LP8000

場：ブラック・ローズ・ドラゴン(ATK2400)

「くっ……………おのれ」

「……河上駆将。陰達の手駒となっているお前に一つ質問があるんだが……」

「何だ？」

「…IDGPが始まる前に海馬さんが言っていた。『陰達以外に素性も分からない危険人物が大会に出てる』ってな。

俺や翔夜、海馬さん、氷川さんを除けばあとは君と憂司君と神山さんだが神山さんは海馬さんと面識が合ったから違う、憂司君だってアカデミアの生徒だと調べたら判明する事だ。となると……」

瞬矢は両目を銀色に輝かせ、駆将を覗き込むように凝視した。

「海馬コーポレーションの情報処理能力を以てしても特定出来なかった人物……」

「……………」

「…………お前は…………誰だ？」

成長した決闘者VS進化したHERO……自らの存在意義とは……1（後書き）

次回、瞬矢が言及した駆将の正体とは……

こんな小説ですが、次回も読んで下されば幸いです。よろしくお願  
い致しますm（）m

成長した決闘者VS進化したHERO……自らの存在意義とは……2（前書き）

今回は瞬矢VS駆将の決着です。そしてラストには衝撃が

それではどござー！

「俺が何者か……か。ならこの決闘に俺の秘密を賭けてみるか？緊張感の出ないこの決闘に退屈してた所だ」

期待はしていなかったらしくその言葉を聞いても瞬矢は落胆の色を見せなかった。

「……たやすい条件だな。お前のターンだ、プレイを続ける」

「……ドローー！！M・HEROだけが俺の新たな力ではないことを教えてやる！！手札より魔法カード、ダーク・コーリング発動！！」

駆将のフィールド上空に闇で覆われた異次元への扉が開かれた。

「このカードにより、俺は手札のフェザーマンと墓地のバーストレイを除外しダーク・フュージョンさせる！！」

「ダーク・フュージョン……あの霸王十代が随えた悪魔を呼び出すカード……」

「そつだ！出でよ災厄を齎す悪鬼、E・HERO インフェルノ・ウイングー！！」

不気味な妖艶さを醸し出す女性型悪魔、E・HERO インフェルノ・ウイング（ATK2100）が闇の扉より降臨した。

「これが……E・HERO……」

「手札より速攻魔法、エネミーコントローラー発動！ブラック・ローズ・ドラゴンの表示形式を守備へ変更する！」

「昔前のゲーム機のようなコントローラーが現れブラック・ローズ・ドラゴンを強制的に守備体勢にさせた。」

「インフェルノ・ウイングでブラック・ローズ・ドラゴンに攻撃！インフェルノ・ブラスト！！」

インフェルノ・ウイングが発射した炎の弾丸がブラック・ローズ・ドラゴン（DEF1800）を貫き、その火炎弾が瞬矢にも降り注いだ。

瞬矢LP8000 7700

「くっ……貫通効果持ちか……」

「それだけでは無い！インフェルノ・ウイングがモンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力が守備力、どちらか高い方の数値のダメージを与える！ヘルバツク・ファイア！！」

突如瞬矢の上空から球状の炎が降り掛かり、無防備な状態の瞬矢を包み込んだ。

瞬矢LP7700 5300

「く　流石だな………そうだよ、翔夜の言う通りお前は強いんだ。そんな凶々しいHEROを使う必要なんて無い……俺には分か

る。わざわざ悪に成り切る必要なんて無いんだよ」

「悪に成り切る……か。その厄介な目で俺の心の迷いを覗いたのか？」

駆将は心を読まれた事に少しムスツとしていた。

「ああ。恐らくはお前……翔夜との決闘の後ずっと考えていたんだろっ？ 陰達と翔夜、どちらが正しいのかわな」

「……その通りだ。あの決闘の後に遊城翔夜の言葉に揺れ動いたが奴は陰達に敗北した。だから正しいのは陰達だと思えば再び従うつもりだったが……貴様と決闘していると正しい事を見失ってしまいそうだ……」

「常に決まっている正しい事なんて無い。大事なものは《間違った事をしない》ことだ……俺は決闘のプレイングも同じだと思う。それでも報われない時もあるけどな」

その言葉を聞いた瞬間駆将は翔夜の決闘を思い出した。プレイングミスの無い決闘だったが陰達に敗北した。駆将はそれが瞬矢の言った報われない時なのだと感じ、同時に虚しさを覚えた。

「……まだお前のターンだ。プレイを進めろ」

「（……俺のやっている事は正しいのか……それとも）  
まだ俺のバトルフェイズは終わっていない。俺は手札より二枚目のマスク・チェンジを発動。E・HERO インフェルノ・ウィングを墓地に送り、同じ炎属性のM・HEROを召喚する。変身召喚！  
現出せよ、M・HERO 剛火！！」

真紅の仮面と鎧を身に纏ったM・HERO 剛火（ATK2200）  
が荒ぶる火炎の中からその姿を現した。

「M・HERO 剛火は墓地のHERO一体につき攻撃力を1000  
ポイントアップする。俺の墓地のHEROは五体……よって500  
ポイントアップだ！」

M・HERO 剛火  
ATK2200 2700

「剛火でダイレクトアタック!!!レイジング・シュート!!!」

M・HERO 剛火の炎を纏った拳が瞬矢の腹部に強烈な一撃を放  
った。

「うっ……………」

瞬矢LP5300 2600

「俺はこれでターンエンドだ」

駆将LP5600

場：M・HERO 剛火（ATK2700）

「やるな……俺のターン！チューナーモンスター、デルタフライを  
召喚！そして魔法カード、死者蘇生発動。今一度その美しい花を咲  
かせるべく蘇れ……ブラック・ローズ・ドラゴン!!!」



艶やかに咲き乱れる黒薔薇と共にブラック・ローズ・ドラゴンが蘇生された。

「何をする気だ……」

「カードを二枚伏せる。

レベル7、ブラック・ローズ・ドラゴンにレベル3、デルタフライをチューニング!!」

デルタフライが三つの輝く光の輪となり、ブラック・ローズ・ドラゴンを包摂した。

「地獄からの猛火により、三ツ首の竜王が今日覚める！シンクロ召喚！燃やし尽くせ、トライデント・ドラゴン!!」

M・HERO 剛火の召喚時以上の炎が吹き荒れ、トライデントドラゴン（ATK3000）がフィールド上空より降臨した。

「（翔夜……ありがとよ……）」

トライデントドラゴンの効果発動。シンクロ召喚に成功した時、俺の場のカードを二枚まで破壊し、このターンドラゴンはその枚数分攻撃回数を増やす!!」

「なに!?!」

トライデントドラゴンが吐き出した炎の渦が二枚の伏せカード異次元からの帰還とオーバーロード・フュージョンを破壊した。

「こいつは翔夜の想いが詰まったシンクロモンスターだ。行けトライデントドラゴン!!トリプルバーニング・フレア!!!!」

トライデントドラギオンの三位一体の攻撃がM・HERO 剛火、  
そしてプレイヤーである駆将に襲い掛かった。

「くっ……ぐあああああああ……!!!!」

駆将LP5600 0

「……負けたか。やはり敵わなかったか」

ある程度覚悟は出来ていたらしく駆将は負けたショックを殆ど見せ  
なかった。

「約束だ。話してもらうぞ、お前の正体を」

「……いいだろう。話してやるよ、どうせこの体も……長くはない  
からな」

「……どういう意味だ？」

「……どういう意味だ……ハアアアアア……!!!!」

突如駆将が取った行動 それに瞬矢達は驚きを隠せなかった。

「なっ!?!」

「きゃああああ!?!」

「……ほう」

「まさか……お前は……」

四人が驚愕した光景。それは決闘盤を装着していた左腕を右手で力付くでもぎ取った姿だった。

しかし不思議と左腕からは血液が流れず、駆将自身も苦悶の表情を浮かべなかった。

「……これが俺の正体だ。俺の肉体はすでに存在しない。俺が生きながらえていたのはこの……機械で構築された身体があつてこそだ」

「機械の身体だと?」

「本来なら俺はもう存在しないんだよ。あの日……八年前のあの事件で俺は生涯を閉じたんだからな」

駆将は物悲しさを隠せぬ表情で自らの過去を語り始めるのだった……

成長した決闘者VS進化したHERO……自らの存在意義とは……2（後書き）

次回、駆将の語る自身の過去とは……………

更新速度は相変わらず遅いですが何とか完結目指して頑張ろうと思  
います（\*^o^\*）

それでは次回もよろしくお願い致しますm（）（）m

現世に残りし少年・・・その者の託す願いは……（前書き）

真に申し訳ございません！！m（　　）m

活動報告にも載せましたが課題やらバイトやらで忙しく、間が開いてしまいましたがそれでもお読みいただけるのなら幸いですm（

　　）m

それではごっごぞー！…

現世に残りし少年・・・その者の託す願いは……

窓から入る夕陽によって部屋全体が照らされている中、片腕を無くした少年は過去を語ろうとしていた。

「…瞬矢、お前は八年前のモーメントの事件を知っているか？」

「…ああ、確か突然起こったモーメントの暴走により広範囲に渡って地震や津波が発生したっていうゼロ・リバースの再来とも言われたあの事件だろ？」

「表向きはな。だが実際にはモーメントに異常は無かった。あの事件の原因は……隕石の衝突だ」

この事実瞬矢は驚愕の色を隠しきれなかった。

「隕石だと？なぜそんなことが公表されていない？」

「公表されていないのではなく分からなかったんだよ。その隕石は肉眼では見えず、レーダーにも反応しない代物だった。だから学者達はモーメントの暴走としか判断出来なかった」

その事件について語る駆将の顔はひどく悲嘆に暮れていた。

「父親がそのモーメントの研究者だった俺はあの日父に会いにそのモーメントまで行った。忙しくて家に帰ってくる暇もないから淋しいだろうと思ってな……」

父との会話の最中、その隕石によって俺は死んだ。だがあの世には行かなかった。あの時の俺は余程この世に未練があつたんだろうな……そして丁度三年前だよ、あいつによってこの体に魂を入れられたのは」

「……………陰達にか？」

「ああ、奴は俺の生きたいという強い怨念の存在に気付いてこの機械の身体を生み出し、俺の魂を注入した。そして蘇つたその日から洗脳されていた……つい昨日までな」

昨日、という言葉に一同は違和感を抱いた。

「昨日だと？何故陰達はわざわざお前の洗脳を解いた？翔夜との決闘に負ければ洗脳を解くという約束だつた筈だが」

「……悪いが俺も詳しくは分からない。だがあいつの体は既に限界を越えている。精神的にも……肉体的にも……」

「？……それはどついう意……」

問い掛ける途中で瞬矢は駆将の身体の変化に気付いた。駆将の身体からシャボン玉のような七色の気泡が溢れ出て来るのだ。

自身から発生するそれを見た駆将は何かを悟つたように自嘲した感じでつぶやき始めた。

「かつて俺の中に疼いていた生きたいという思念がお前と遊城翔夜との決闘で消滅したんだ。魂がもう成仏しかけている……明日の決勝だが、あいつはお前を決闘で破りその後　この宇宙を破滅

させるつもりだ」

「破滅……だと？……なら何故、奴はこんな大会に出場した？」

「……奴はお前に一つの希望を託している　あいつも救われるのを求めているんだよ　」

瞬矢らは駆将の伝えた突然の事に頭を整理する時間も無いまま消滅していく駆将をただ見届ける事しか出来なかった。

「……遊城翔夜が生きていたら伝えておいてくれ……俺はHERO使いのあなたの下で……舎弟になりた……かった……って……」

「……必ず翔夜に伝える　そして明日の奴との決闘にも必ず勝利してみせる」

「……さいごに……もう一つだけたのむ……瞬矢。あいつを……三つとも……すくってく……れ……」

その言葉を最後に身体から噴出する気泡は止まり、駆将が入っていた機械は活動を停止した。

「……駆将……」

線香花火のように雅やかな　散り際を見届けた四人は静寂に包まれた。

四人の見詰める先に有るのは今までの荒々しく粗暴な性格ではなく、



一切の汚れの無い安らかな笑顔で眠る一人の少年であった……

それからしばらくして瞬矢が一人動き出し、駆将を背負った。

「駆将は俺が弔っておく。こんな機械だったとしても一応あいつの宿っていた身体なんだ」

「待て瞬矢、こいつを持ってけ。必ず役に立つ」

そう言つて西上が渡したのは絵柄もテキストも何も描かれていない一枚のカードだった。

「このカードは？」

「実際に決闘では使えんがいずれお前の願いを叶えるために必要な物だ。その時が来れば自ずと使い方が分かるだろう」

「（決闘で使えないカードか　　）  
ありがたく頂戴しておくぞ」

「駆将の供養は俺がしておく。お前は明日の準備をしておけ。それから……四つ葉」

「?　　なんででしょうか」

「お前が覚えている限りでいい　　決勝までに瞬矢に話しておけ。  
お前のこの三年間をな　　」

「ッ!!……………分かりました」

過去の事について触れられた四つ葉は尋常ではないほどひどく動揺していた。

「……………氷川さん、あなたはこれからどうするつもりですか?」

「とりあえず明日のお前らの決闘を見届けろさ。そこから何かを得られるかもしれないからな」

「そうですか……………さて……………」

瞬矢はひどく散乱した有様の選手控室を見渡した。

「ずいぶん散らかったな　　本気の決闘が3回もあったから仕方が無いか」

「……………あの、瞬矢さん。実は私……………」

「きみの過去は後で聞きたい。俺も今日の事できみに話したいことがあるんだ」

「……………分かりました」

その後四人は別れ、西上は駆将を供養するため何処かへと消え、瞬矢と四つ葉、氷川は選手宿泊先のホテルへと別々の車で向かって行った。

ホテルに到着するまでの間四つ葉は昨日までと違うどこか達観した様子の瞬矢に異様さを感じながらも、ホテルに到着するまでの間西上の言った自分の三年間の事について黙想していた。

瞬矢がホテルの部屋の扉を開き、四つ葉が先に入り自身の過去について語り出そうとしたその刹那・・・四つ葉は瞬矢に後ろから強く抱きしめられた。

「!!!!・・・瞬矢・・・さん？」

「すまない・・・君と過ごす時間は・・・今日で最後にしたいんだ」

「・・・どういう意味ですか？」

後ろから抱きしめられているため四つ葉には見えていなかったが、この時の瞬矢は罪悪感に満ちた哀しい表情をしていた。

「俺が二度目の生き地獄に陥ったあの時・・・俺は君の姉さんと・・・ミツ姉と会っていた」

「お姉ちゃんど!?!?・・・一体どうやって?」

「それについてはこれから話すよ・・・だが始めに言っておきたい」

四つ葉は自分の背中で瞬矢が涙を流している事に気付いた。

「・・・俺は許せないんだ・・・きみの幸福な生活を奪ってしまった自分が・・・そして・・・」

「そして……何ですか？」

長く溜めた後、意を決したように瞬矢は囁いた。

「…堪らなく許せないんだ……こんな俺が……きみに惹かれてしまったことが」

現世に残りし少年・・・その者の託す願いは……（後書き）

次回、瞬矢が語るミツバとの出来事とは

更新がいつになるか現時点では分かりませんが、次回もよろしくお  
願い致しますm（| |）m

甦りし青年の意思と姉妹の願い(前書き)

真に申し訳ございません!! m ( ) ( ) m

次の更新がいつになるか分からないと言っておきましたが、二ヶ月  
以上も間を空けてしまいました。

何とか完結を目指しますのでこれからもよろしくお願い致します m

( ) ( ) m

## 甦りし青年の意思と姉妹の願い

きみに惹かれた、その言葉を聞いた四つ葉は更に赤面しながらも静かに瞬矢の言葉を聞いた。

「きみが駆将と氷川さんを相手に決闘していた時、俺は精神を冥界に移動され……ミツ姉と話してきた」

「冥界に？……それで……お姉ちゃんは何か言っていましたか？」

「ミツ姉がいなければ俺はこうして立ち直る事は出来なかつたな」

## 数時間前

「……ここは……」

一瞬にして周囲の光景が変化し、薄暗い教会のような場所へと移動したことに驚嘆した瞬矢だったが、だからといって何かしようとする気力は湧かなかった。

「……ここが何処かなどどうでもいい……いつそのまま父さん達のところへ行きたい……」

そう呟いて仰向けに倒れようとした瞬間にその背を何者かが支え、そのまま瞬矢は後ろから強く抱きしめられた。

「！！……誰だ？」

「……久しぶりだね……瞬ちゃん！」

耳元で囁かれた優しい声は瞬矢にとって忘れることなど出来ない彼のかつての思い人の声そのものであった。

「！！……まさか……ミツ姉……？」

「正解。懐かしいね、4年振りかな」

「何でミツ姉が……ミツ姉はあの決闘の後に死んだはず……」

「ええ、私や総司はあの時確かに死んだわ。だけどね瞬ちゃん、異端なのは貴方の方……ここは冥界の一部なの」

「冥界……そうか……俺は死んだんだね……」

冥界と聞かされ自分は死んだと思った瞬矢はどこか嬉しそうな表情をしたがミツバは首を横に振った。

「違う、瞬ちゃんはまだ死んでなんかいない。瞬ちゃんのデッキのサイバー・エンド・ドラゴンとサイバー・ダーク・ドラゴンに頼んで精神をこっちに呼び寄せただけよ」

「そう、あいつらが……確かあの二枚つてカードの精霊なんだっけ？俺は見えないけど……」

「ええ。サイバー・エンドは私の、サイバー・ダークは総司の精霊



だったわ……

瞬ちゃんはまだ生きてる……こっちは長く居れないから……ずっと  
言えなかった事、言うね……」

「・・・何？」

「瞬ちゃん・・・ずっと・・・大好きだったよ」

「！！……え……」

突然の告白にしばらく呆然としていた瞬矢だった。がやがて落ち着き  
を取り戻した。

「何で　俺、何度も告白してたのに　」

「お父さんと俊矢さんに言われてたの、瞬ちゃんが一人前のサイバ  
ー流継承者になるまで待っててっね」

「父さんと師範がそんなことを……」

「私はその時まで瞬ちゃんを護っていくつもりだったわ……だけど  
今は違う。今度は瞬ちゃんが護りたいと思う人達を護って！」

「俺には……誰かを護る力なんて無い」

「その銀に輝く眼よ。その力で人の心の闇を覗けたり精霊を実体化  
できる。他にも所持者の生命力を上昇させたり……一度だけ死者を  
蘇らせることができるの」

「死者を……ならその力でミツ姉達を生き……」

その言葉の続きは他ならぬミツバ自身が瞬矢の口を塞ぐことによつて止められた。

「……ダメ。死者を蘇らせる事はこの世界にとつて最大の禁忌よ。蘇生させた人も蘇生させられた人も冥界からの使者によつて冥界の奥深くに永遠に幽閉される……だから、もうそんなこと考えないで私達だつてこつちで色々楽しくやってるんだからね。私や総司なんか伝説の決闘者と毎日のように決闘してるのよ」

「そうなんだ………だけど本当に懐かしい。昔よく三人で決闘したよね？」

「………やっぱり」

「?………やっぱりってどういう事？」

「まだ瞬ちゃんは大事な記憶が戻ってないの。だけど、それは瞬ちゃん自身で気づかなきゃいけない………そのためにもこれを渡しておくね!」

「これは………？」

瞬矢がミツバから受けとつたのはテキストもイラストも何も描かれていない白紙のカードだった。

「今はまだ何も描かれて無いけど私と総司の思いが詰まってるカードだから、その時が来れば力を発揮するわ」

「色々ありがとう、ミツ姉。おかげで何て言うか……自分を戻した気がする」

「そう……良かった。時間が無いから最後に一つだけ約束して……あの娘を……四つ葉をよろしくね」

「……わかった」

その言葉を最後に瞬矢の体は消滅し、現世へと戻って行った。

「瞬ちゃん……も救ってやってね」

静寂な空間の中でミツバは今の彼が聞いても理解出来ない言葉を残しその場を立ち去るのだった。

現在

「お姉ちゃんがそんな事を……」

「ミツ姉にはよろしくと言われたけれど、俺といるときみはきつと不幸になる。俺がいなければミツ姉が死ぬ事も無かった。全部俺のせいなんだ……資金は出すから俺から離れてくれ」

「……………嫌です！！私は瞬矢さんから離れる気なんて毛頭ありません！！」

「四つ葉……………俺にはきみと一緒にいる資格なんて無い……………きみの事だつて、ずっと忘れていたのに……………」

「忘れてなかったじゃないですか！！」

突然の四つ葉の怒声に瞬矢は一瞬たじろいだ。

「本当に忘れていたのなら、どうして私に四つ葉と名付けたんですか！？記憶を失っても頭のどこかに残っていたからじゃないんですか！？」

「……………四つ葉……………」

今まで気弱だった少女がここまで感情を露にしたのを瞬矢は今まで……………四年前までも一度も見たことが無かった。

「瞬矢さんは全て話してくれました。だから話します、私のこの三年間を……………」

そう言って四つ葉は自らの過去を瞬矢に話し始めるのであった……………

……………

甦りし青年の意思と姉妹の願い（後書き）

次回、四つ葉によって明かされる彼女の三年間とは・・・

次回もよろしくお願い致します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8786n/>

---

遊戯王 真相の果て

2011年9月25日14時14分発行